

外語大の教師が 熱中する もうひとつの言語

活動報告書

ロマンシュ語
スィンディー語
パンジャービー語
ウクライナ語 スンダ語
アストゥリアス語

東京外国語大学オープンアカデミー 2011年度 後期開講講座

外語大の教師が 熱中する もうひとつの言語

活動報告書

企画

東京外国語大学 語学研究所

2011年10月4日(火)～11月8日(火)

東京外国語大学 本郷サテライト

目次

… * ←—————→ * …

まえがき	高垣敏博	
ロマンシュ語	富盛伸夫	1
スインディー語	萬宮健策	25
パンジャービー語	萩田 博	45
スンダ語	降幡正志	57
ウクライナ語	中澤英彦	77
アストゥリアス語	黒澤直俊	101
講座概要		

まえがき

東京外国語大学語学研究所は「諸言語の個々の研究を進める一方、各研究者が互いに密接に関連を保ちつつ諸言語の比較研究を行う」機能をはたす学内の研究機関ですが、同時に研究や教育の成果を世に問うという使命ももっています。

この目的で研究所では 1994 年からほぼ毎年 18 回にわたって公開講座を実施してきました。昨年度 2011 年には東京外国語大学オープンアカデミーのプログラムとして本学本郷サテライトで『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』と題した公開講座を行いました。その内容を受講者だけではなくできるだけ多くの方に共有していただこうと今回はじめてブックレットとして刊行することにしました。

執筆内容は当日の講演内容を文字におこしたものを基に原稿にしていたものです。話された内容はできるだけ忠実に文字化しています（ロマンス語、パンジャービー語、スンダ語、ウクライナ語、アストゥリアス語）が、講演内容を基に新たに加筆したもの（スィンディー語）が含まれることをお断りしておきます。また各章末にはコラムや講師が薦める言語や文化に関する 3 冊が紹介されています。

それぞれ専門をもつ各研究者がそれとともに「熱中する」「もう一つの」言語やその文化背景について語る知的興奮と研究の余滴を楽しんでいただければと願っております。

語学研究所長
高垣敏博

平成 23 年度 東京外国語大学オープンアカデミー
東京外国語大学語学研究所 企画
『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』
ロマンシュ語
2011 年 10 月 4 日 第 1 回
東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
富盛 伸夫

1. はじめに

みなさん、こんばんは。スイスのロマンシュ語（英：Romansh、ロマンシュ語：rumantsch [rumantʃ]）ではこういう時間にご挨拶するには「Buna saira!（ブナ・サイラ）」と言います。直訳すると「よい夕方を」となりますが、スイス・アルプスでは、昼食をとって夜になって寝る直前まで「ブナ・サイラ!」と言い、日本語の夜に限定した「こんばんは」に比べると時間帯が大変広い。冬は午後早くから暗くなり、夏はたっぷりと一日をつかうアルプスの人々の生活を思うと、時間の区切りがスイスと日本とは若干違うのもわかるような気がします。さて本日は長い秋の夜に、高度 1200m から 2000m の高原地帯で約 35000 人の人々が伝える少数者言語、スイス・アルプスの言葉ロマンシュ語の歴史から現地の人々の生活文化や感性にいたるお話をいたしたいと考えております。

皆様方には東京外国語大学オープンアカデミーにご参加いただきましてありがとうございます。語学研究所が主催するこの講座では、個別言語の授業を開講するのではなく、多様な言語が他の言語とは異なる特徴を比較したり、またその共通点を探ったり、言葉の重箱の隅をつつくようなおもしろい部分を拾いだしながら企画しています。今年の本講座のテーマには「外語大の教師が熱中するもうひとつの言語」というちょっと変わったテーマ名をつけさせていただきました。本講座でご紹介する言語ですが、東京外国語大学では独立した授業として教えている言語もあり教えていない言語もあります。今日お話するロマンシュ語はロマンス言語学概論とセットにした「スイス・ロマンシュ語概説」として私が担当し、開講しています。学生は例年 10~13 人、多い年で 20 人いたこともあります。スイスの人に聞くと、1 クラスに 15 人もいるロマンシュ語のクラスは世界で一

番多いのではないかと言われました。スイス本国でも学習人口が少なく、国をあげて支えて行かなければ消滅しそうな弱小言語のロマンシュ語の将来は、心もとない状況にあるようです。

本講座で講義をする先生方は、実は大学の授業では本務として別の授業をしています。私は言語学一般、特に機能言語学、談話研究、テキスト言語学などを担当しています。一方、授業外では文科省科学研究費補助金をいただいて、EUの言語政策の研究を共同研究で行なっています。私は幸いにスイス・ロマンシュ語という授業を開講することができましたが、来週以降に講義のあるフィンディエー語やスندا語やアストゥリアス語は授業には組み込まれておらず、先生が自宅や研究室で研究して論文や本を書いている状況です。パンジャービー語はウルドゥー語の先生がなさいます。どれも日本では学習者の少ない言語ですが、スندا語はインドネシアで2700万人の話者がいますので決して少数言語ではありません。ウクライナ語はウクライナの国語です。他方、アストゥリアス語というのはイベリア半島北西部の言語で、一旦消滅しかかりましたが復活しつつある言語です。今日のロマンシュ語と同様、非常に言語人口が小さいので、このままいくとどんどん話者人口が減っていく、いわゆる危機言語の一つです。第1回から第6回まで、言語の話ばかりでなく、社会文化背景に立ち入った話になるかと思います。どうか全6回おつきあいください。

2. スイス・ロマンシュ語とはどういう言語か：言語地域と系統

歴史言語学において、ロマンシュ語が系統的にはインド・ヨーロッパ語族に属するということは定説となっています。その言語的特徴から、大きくくりの「ロマンス諸語 (Romance languages) の下位グループ、イベリア半島地域のイベロ・ロマンス (Ibero-Romance)、ガリア地域 (現在のフランス地域に相当) のガロ・ロマンス (Gallo-Romance)、イタリア中部と南部のイタロ・ロマンス (Italo-Romance)、そしてダキア地域 (現在のルーマニアに相当) のダコ・ロマンス (Daco-Romance)、などと並ぶレト・ロマンス (英: Rhaeto-romance¹) 系言語群に含まれています。

¹ 語頭の rh- はもともとギリシャ語の対応する音を表記するために用いられたが、地域名レチアについては Raetia のように、r- 単独で書くことが多い。

以下、ロマンシュ語をスイス・ロマンシュ語と表現することがあります。これは、上位言語グループの「レト・ロマンス」という言語群の名称とわかりやすく区別する便宜的な呼び方です。レト・ロマンス系言語とは、スイス東南部のグラウビュンデン州で話されるロマンシュ語方言群の他に、イタリアの北東部、ヴェネツィアの北東に広がるフリウリ語（言語人口約 50 万人）の地域、そして、スイスとの間にあるイタリア北部のドロミテ地方のラディン語地域（言語人口約 28000 人）、の 3 地域を含めた場合の名称です。



【図 1】レト・ロマンス系言語の 3 地域²

しかし、そのルーツは、となるとほとんどわかっていません。レト・ロマンスという名称に付けられた「レト」とは、古代ローマ時代にアルプス一帯に付けられていた地方名「レチア (Raetia)」に由来し、そこには先住民のレチア人たちが住んでいたらしい。そしてローマの歴史書によれば、レチア人たちは戦いになると勇猛果敢で、レチアの言葉で雄叫びをあげた、とあるので、独自の言語を持っていたらしい。しかし、残念ながら、それ以上の記録はなく、後に『ガリア戦記』を書いた将軍ジュリアス・シーザー率いるローマ軍に紀元前 15 年に平定されラテン語化されてから約 1500 間、ほとんどまとまった言語資料はありません。

最近、アルプス先住民を彷彿とさせる男性が日本でも話題になりました。1991 年にスイスに近いオーストリアとイタリアの国境のエッツ渓谷 (Ötztal) の山頂付近で偶然発見されたミイラ (愛称「エッツィ」) は綿密な科学的調査がされて、今から 5300 年ほど前の男性であることが検証されています。峠越えに必要な雪

² 富盛伸夫. 1998. 「レト・ロマンス語」, 『世界の言語ガイドブック 1 ヨーロッパ・アメリカ地域』, 東京外国語大学語学研究所編, 三省堂書店.



「アイス・マン」またの名は「エッツィ」(Ötzi)³
(1991年偶然に発見されたオーストリアの谷の名から付けられた愛称)

山装備に身を固めたエッツィは、おそらくは矢にうたれた場所で息を絶えたとはい。所持品には残念ながら、なんの文字資料もなく当時の言語がわからないままに終わりましたが、確かに、ロマンシュ語のルーツは狩猟時代のレチアにすんでいた一族の言語がもととなったと考えられ、それが名称「レト・ロマンス」の起源になっています。先住民がいたレチアと呼ばれていた地域は、今のミュンヘン、ジュネーヴ、ジェノヴァあたりまで広がっていたとされ、地名研究から、スイスのコンスタンツ湖の近くに昔の名でゲノヴァというところがあり、ジュネーヴ、ジェノヴァをあわせて、「水辺」に関係しているという説もあります。

確かに、ユーラシア大陸の西端、現在のヨーロッパ地域には、多くの先住民が長く住んでいたことは考えられます。その後、恐らくは約5000年前に東から南西ヨーロッパに移動してきたインド・ヨーロッパ語族の一派イタリック系言語が広まり、イタリア半島中部で発達したラテン語と各地の先住民の諸言語とが融合して形成されたのがロマンス諸語の母体となっている、と考えられております。その中で、アルプス地方土着の民族の言語とラテン語（文章語より口語）とが接触・混淆して成立したのが、レト・ロマンス系の言語です。

レト・ロマンス系言語は上記の3つの地域をとおして、いくつか共通の言語特徴を持っているのでドイツ語系学者たちは「レト・ロマンス語」とくくって呼んでいます。「レト」という名の元になったレチア人が、はたしてイタリア北東部のフリウリ平野にいたかという、物証的にはいなかった可能性があります。名称・名付けというのは一つの記号化でイデオロギーをはらんでいます。イタリア

³ <http://www.iceman.it/en/mummy-world-sensation>

人学者は「レト・ロマンス語」ではなく「ラディン語」と呼びます。レト・ロマンスとは呼びたがらない理由の一つにはドイツ語圏と対立する複雑な政治的背景があるのですが、言語学的にも論議が絶えません。名付けをしていく仕方は根深い問題を内在しているので、一旦あるくくりで名前を与えると、それがあたかも実態があるかのような錯覚にとらわれます。ヨーロッパ言語圏をどのように分けるかということは、中世からの大きな問題です。

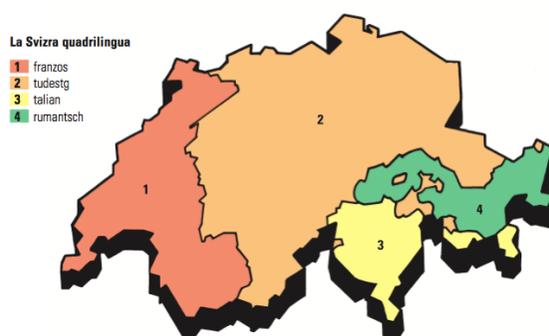
14世紀初頭に『俗語論 (*De Vulgari Eloquentia*)』を書いたダンテ (1265-1321) は、肯定的に答える (「はい」) 場合、「スイ (si)」と答える西南ヨーロッパ地域、「オック (oc)」と答えるプロヴァンス (オック) 地域、「オイル (oil)」と答える北フランス地域の3つに分けました。これにはそのとおりの説得力がありますが、問題は言語研究が科学になってからの話です。科学的根拠に基づく分類学が学問の代名詞になったおよそ150年前に、ロマンス語圏を、ラテン語男性複数が現在のロマンス諸語で「-i」で終わる東のロマニア (イタリア語とルーマニア語) と「-s」で終わる西のロマニア (イタリア以西のロマンス諸語) とに二分する提案がなされました。これはたった一つの形態論的特徴で分けていますので、根拠は確かだが少し足りない。後に、言語の分類にあたっては、結局自分達の地元の言葉はよく見えるので、南西フランスを独立した言語グループ (Occitano-Romance) にたてるなど、特徴の相違が少しでもみつかりと独立させるという傾向がありました。レト・ロマンスもその一つかもしれませんが、名前を一つ与えることによって、まるでその言語があるかのように見えてきてしまうというのが言葉のおもしろさであり恐ろしさでもあります。

3. 多言語国家スイスの中の危機言語、ロマンシュ語

スイスは26の州からなる連邦共和国で、広さは日本の九州本島を左に90度回転し一回り大きくした形をしており、ロマンシュ語の話されるグラウビュンデン州は鹿児島県に相当する南東の端にあります。連邦 (英: Confederation) は共和国が法律上連邦を形成している組織で、それぞれの共和国には法律があり、言語条項も規定されています。スイスという名称は、4つの国語で異なった発音と綴りがあるので、ひとつのまとまりとしては、Confoederatio Helvetica とラテン語で表記します。スイスの自動車ナンバーに CH と国別略号が書いてあるのもこの名前に由来し、ジュリアス・シーザーの歴史書『ガリア戦記』にも出てくる、

ローマ時代のケルト系先住民族の地域名称ヘルヴェチア (Helvetia) を現在も使っているのです。

スイス (外国人在住者を含め人口約 800 万人) 全体の言語分布を見ると一番広い部分がドイツ語で約 63.7%、次はスイス西部のレマン湖に沿った地域 (スイス・ロマンド地方) でフランス語が約 20.4%の人々によって話され、3 番目がスイス中央南部ティチーノ州で約 6.5%の人々によってイタリア語が話されています。4 番目が約 0.5%の言語人口のロマンシュ語で、スイス最大の州であり、かつ、アルプス山岳地帯のため最少の人口密度のグラウビュンデン州で使用されています。



【図 2】スイスの 4 言語分布図⁴

1. フランス語地域 2. ドイツ語地域 3. イタリア語地域 4. ロマンシュ語地域

スイスの 4 つの国語のうちドイツ語は、ドイツの共通ドイツ語とは発音、文法、語彙においてもかなり違います。綴りだけを見てもはっきり異なっていて、聞いた感じはもっと違います。文法面で格変化は基本的には話し言葉なので相当な単純化の方向に向っています。従ってドイツのドイツ語とは別の言語であるともいえ、ドイツ語圏のほとんどの人々は、二つのドイツ語を自由に使い分けています。

西部のフランス語地帯のフランス語については、現在はフランスのフランス語と相互理解に支障があるほどの違いはありません。実は、もともとフランコ・プロヴァンス語というロマンス系の別方言があり、フランスと地続きでジュラからオート・サヴォワのあたりまで続いていた広い地域です。田園部ではまだフランコ・プロヴァンサル語を話す高齢の人に遭えることがありますが、街で日常的に触れることは珍しい。第 3 番目のイタリア語は、イタリア北部の方言と地続きで

⁴ http://www.liarumantscha.ch/data/media/pdf/facts_figures/facts_figures_english.pdf

同じ特徴の方言ですが、教育やメディアなどは共通イタリア語でなされています。

国語として第4番目のロマンシュ語は、最近の統計では話者約35000人を割り込む0.5%で、ヨーロッパの危機言語のひとつとされています。生物界で個体数5万を切ると種の存続が危ぶまれると言いますが、言語の場合はどうでしょうか。その歴史を見ると、かつて、広大な言語領域をもっていた先住民族がローマ人、そしてゲルマン人に侵略・浸透され、版図を削られていった。中世、近代をへて、国家標準語への道を閉ざされたロマンシュ語は、ますます時代の要請から取り残されてしまう。加えて、20世紀に入ってこの言語は最大の危機、ナチスとムッソリーニの両政治的勢力の狭間にあって、消滅の瀬戸際に立たされる。そこで、自らの存在理由と自由の権利を主張するロマンシュ語の人たちが立ち上がり、声を上げて、国民投票で憲法改正をへて、国語、そして公用語への地位にまで高めることに成功する。言語権を守り擁護する戦いには国をあげて取りくむスイスのロマンシュ語の将来はいかに、というところに関心があります。遠くからの傍観者的立場でその行く末を見定めてゆくのもあり得ますが、一方、ほかの言語地域、おそらくは多くの点で正反対の日本の日本語の現状と比べると、言語の存続と文化の継承には何が必要要件なのか、という問いかけが湧いてきます。

4. ロマンシュ語研究のおもしろさ

ロマンシュ語を含むロマンス系言語の歴史研究は、150年以上の研究史があります。スイスの言語学者ソシュール (F. de Saussure, 1857-1913) がでるまで、19世紀には歴史的研究、通時言語学が唯一の言語研究上のアプローチであったといえます。ゲルマン語学とともにロマンス語学はその格好のまな板でした。研究対象の言語の主なルーツ (ラテン語) が史資料としてわかっている点において、現在でも通時研究のトレーニングの場であることにはわかりありません。いや、ゲルマン諸語やスラブ諸語と比べて、出発点 2000 年前頃のラテン語で書かれた圧倒的な量の文学作品、実務書、碑文などの資料が現存し、かつ、ほとんど網羅的に整理されているのですから、ロマンス諸語の研究は、実証科学としての絶好の観察の場であるのです。

さらに、歴史のいたずらといえましょうか、ロマンス諸語の歴史には、ミッシング・リンクの謎があります。ローマ帝政末期から、北方のゲルマン諸民族の侵入と定植が始まり、言語資料的には4世紀から8世紀末までほとんど空白の300

年間があるのです。その混乱の時代に、何かが起こり、進行し、歴史資料が羊皮紙に書かれるようになる9世紀には、かつてのラテン語にはない特徴がどのロマンス諸語にも大量に(!)発生していたのです。むしろ、「ロマンス諸語」の発生は、この空白の数百年の間にあり、これを経て、はじめて言語的に成熟していったのです。スイス・ロマンシュ語も、現存する資料こそ中世後半からになりますが、それだけ空白の時代が長く、その間に起こった言語進化の現象を想像する楽しさは倍増します。

19世紀の通時言語学では、歴史資料の希薄な時代に生じたとされる変化の説明に、音韻法則や類推の原理、文法化、経済原理、など、様々な仮説が立てられました。そのなかにアルプス地方の言語史を説明するのに、言語基層説、言語上層説、そして言語傍層説があります。ロマンシュ語のケースだと、ローマ時代に入ってラテン語化された時点で、ラテン語を主軸におくと先住民の言語(たとえば、上述のレチア民族の言語)が基層にある、その言語からの影響を推し量る、という発想です。ただし、先住民の言語が資料的に豊富で、研究が進んでいけば有効なアプローチですが、レチア地域の言語資料は皆無です。代わりに、地名や、若干の基礎語彙が用いられ、アルプス・ロマンスという仮想的な言語群をたて、さらにフランス・スペイン国境地帯のバスク語や、コーカサス付近のグルジア語、といった山岳地帯の諸言語を結びつける試みがなされました。が、証明するには実証的証拠が決定的に不足しています⁵。

これに対して、言語上層と言語傍層は具体的で実証可能性が高まります。主軸の言語がラテン語化したレチア民族の言語であるにしても、「上から」支配的にかぶさってきたゲルマン系の言語(スイス・ドイツ語)や、地方によっては「横から」強い影響を一定期間与え続けた言語(近隣のスイス・ドイツ語やイタリア語など)の干渉は、実に有効な説明の原理となるでしょう。現代の言語研究では、個々の言語間の干渉問題は、言語接触研究として盛んになりました。

ロマンシュ語はローマによるラテン語化が始まった紀元前15年以來、数百年間にわたり他のロマンス諸語の地域と同様に、強い言語上の支配をラテン語から受けてきました。先住民のレチア人の言語からみれば、上層言語としてかぶさったラテン語の圧倒的な影響を被り、おそらくは短期間に大きな構造的な変化を

⁵ そもそも「アルプス」(ロマンシュ語ではalp)という単語もこの地方の先住民由来の語彙であることは通説となっている。アルプスの原意は「山岳地帯の林が途切れた上にある高地の草原」ということらしい。

とげたと思われます。また、傍層から近隣の言語に干渉を受けつつ、成長してきた言語と言えます。地政学的にも、北からはドイツ語系（ゲルマン系）、南からはイタリア語系にはさまれて成長してきました。もっとも、言語の発展をみる上で、これをネガティブに捉える必要はありません。ロマンシュ語は絶えず近隣の言語から必要に応じて多くの言語パーツを譲ってもらい、老化した部位を差し替えて再生してきた言語であるからです。

そこで想像されるのは、永続的な異民族間の接触があった場合、言葉による意思疎通、コミュニケーションの必要と、自然と生じる異民族間結婚を経て、そこには言語と文化の接触と、あらたな融合が生まれます。そしておそらくは世代ごとに、日常的な言葉が変質しつつ継承される、現代の国際社会に起こっていることが 2000 年前にもあったに違いありません。接触言語が社会的に地位を得て一定地域に規範化され、世代をこえて継承されるとクレオール（またはクリオール creole）化現象が起こります。さらに、社会化、政治経済の集中と並行して社会化が進むと、その言語はクレオールではなくなって地方の通用語、あるいは国家の標準語になったりします。ただ、レト・ロマンス諸語地域には、政治的・社会的な求心力のある中心都市が生まれませんでした。スイス内部のロマンシュ語も、アルプスの谷間に散在する各方言を平準化する言語的中心地が生まれないうまま、現代に至っています。従って、言語特徴的にも方言間に統一された標準語が形成されなかったという歴史的背景が、すべての意味で、この言語の生命力と将来に陰影を与えています。政治や文化との関連をふまえたロマンシュ語の経年的観察が、他の言語にも通じる、言語一般の進化現象の解明に役立つと思います。

5. ロマンシュ語に起こったこととは...

前章でみたロマンシュ語研究のポイントからまとめた、言語史の概観を描きましょう。ロマンシュ語の歴史は進化現象と言語類型論の関連をみる上で、素材が豊富でわかりやすいことが特徴です。

5-1. 音声進化と形態論

スイス・ロマンシュ語はローマ時代以来、他のレト・ロマンス諸語と同じく、文字の文化ではなく話し言葉の文化でした。したがって、文章ラテン語に比して動詞の変化はかなり単純化しており、名詞や形容詞、動詞の活用語尾などが発音

されていなかったようです。文章体と口語体とではラテン語自体にもすでに大きな乖離が生まれていて、イタリア半島でもポンペイの遺跡（紀元 79 年に埋没）にみられるいたずら書きで、土地の言語では単語の最終音節の音が非常に曖昧になっていることが確かめられています。また話し言葉の特質として、古典ラテン語の高低ピッチアクセントから強さアクセントへと変化し、強い音節はますます強く発音され弱い音節は落ちていくこととなります。紀元 3 世紀ネロ皇帝の時代に、プローブス (M. V. Probus) という文法学者が、今の言葉はおかしい、間違っていると気づいて文法書と誤用表現の付録 (Appendix Probi) を書きました。文法書自体は残されていませんが、付録には 273 語の単語が正用・誤用の対照表で書いてあります。

【表 1】文法学者 PROBUS による付録 Appendix Probi
(AD 3 世紀ごろ) からの実証⁶

passim	non passi	(語末の -m の脱落)
oculus	non oclus	(アクセントのない母音の脱落)
calida	non calda	(母音脱落)
frigida	non fricda	(母音脱落と g > c へ変化)
vinea	non vinia	(-e- が 半子音になっていた)
auris	non oricla	(au が o に、-cla という縮小辞)

最初の例 *passi* は民衆の使っていた音形で、その時代には一般の人々は、古典文章ラテン語にあった語末の -m をすでに発音していなかった。その語末音がなくなることは、格変化が示せなくなってしまうので、コミュニケーションは成り立ちません。これは名詞・形容詞などの格変化を語末で表示する屈折語ラテン語にとっては致命的です。つまり屈折言語ではなくなるのです。動詞も多くの語末音節が簡略化したため、活用が崩壊していきます。ロマンシュ語の地域でも、同じ現象があったと想像できます。強さアクセントが特徴的なゲルマン語との傍層的あるいは上層的接触も、それを推し進める要因になったでしょう。

そこでロマンス諸語では、格変化の喪失を補う手だてとして前置詞を発達させました。ロマンシュ語も同様に、対格・属格・与格などを語尾変化で示す代わりに、a や da などの前置詞をつけて機能の明確さを補強するようになりました。

5-2. ロマンシュ語の統語的進化：語順の一定化

⁶ http://www.orbilat.com/Languages/Latin_Vulgar/Vocabulary/Appendix_Probi.html

発話する文の文意、特に主語と目的語とを明確に表示するもう一つの方法は、全く別の解決法、すなわち語順を一定の方向にすることでした。何世紀もかけてロマンシュ語やフランス語のとった語順は、ゲルマン系の言語に多い、主語→動詞→目的語という語順で、いわゆる SVO 語順です。もしかしたら、ロマンシュ語やフランス語はゲルマン傍層の強い影響を受けたのかもしれませんが。

面白いことに、また意外なことに、この語順が固定し、かつ主語が必須で、動詞が第二位置におかれる言語は、世界に 5000~6000 もあるという言語のうち 20 ほどしかありません。しかもその分布は北西ヨーロッパに偏っているというのです。アメリカ先住民語を研究したウォーフ (B. L. Whorf, 1897-1941) というアメリカの言語学者は、「(北西) ヨーロッパ諸語 (Standard Average European) は世界の言語類型の標準とはならない」ということに思い至ります。英語の《It is hot today.》のように、指示的な機能を持たない形式主語をたてないと文が成り立たない(主語表示の義務化)という言語は、世界にはごく少数しかないわけです。フランス語も Il、ドイツ語も Es という形式主語をたてます。このダミーの形式主語をもち、主語を動詞の前に置くロマンシュ語も、英語やドイツ語やフランス語同様、世界の言語の中で類型論上特異な言語 (Type A Languages) に入っています。⁷

例1 (ロマンシュ語) Id es a mezdi. 「お昼だ。」
Cf. : (英語) It is at noon.

文の語順と主語の明示義務の観点からは、西ヨーロッパ諸語は、二分されるといえます。

例2

- (1) イタリア語・スペイン語・ポルトガル語など
(イタリア語) Piove. 「雨が降っている」
(スペイン語) Llueve.
- (2) ロマンシュ語、フランス語、英語、ゲルマン諸語などの
20 ほどの言語
(ロマンシュ語) I plover. 「雨が降っている」
(フランス語) Il pleut.
(英語) It rains.
(ドイツ語) Es regnet.

ちなみに、そのような世界の諸言語からみて「特異な語順」が人間の理性の働

⁷ 松本克己 (1991), 「主語について」, 『言語研究』 100, pp. 1-41.

すが、あまり自由な感情が構文上には表現できません。ですから文の構成要素の一部をハイライト化するための、(英) It is ~ that (ロマンシュ語では Id es ~ che) という強調構文があるのはこのためで、やはり北西ヨーロッパの言語に偏在しています。この強調構文は言語学では分裂文 (cleft sentence) と呼ばれ、ロマンシュ語は、ドイツ語、スウェーデン語、オランダ語と同じ類型言語、そして実はフランス語もその仲間です。この点では、フランス語はゲルマン語的類型の特徴を持つ、といえましょうか。

5-3. 現代ロマンシュ語の音声特徴 (エンガディン地方の方言から)

私が現地で学んだロマンシュ語の1方言ピュテール語には、母音音素が豊富にあることが特徴的です。強勢位置の単母音は9もあり、特に円唇中舌母音 (y, ö) があって、単語中の位置により ö は[ø]または[œ]として発音されるので、その区別には日本人の私は苦労しました。

i	y	u
e	ö	o
	ε	ɔ
	a	

【図3】ロマンシュ語 (ピュテール方言) の母音体系⁸

もっとも、フランス語やドイツ語にも同じような円唇中舌母音があるので、フランス語から入る人にはさほどの困難はありません。14ある二重母音は、長い間の音声変化の結果として生まれたのですが、ロマンス諸語の中でも際立って多いといえます。

子音体系のうち面白いのは、閉鎖音と摩擦音の他に、3種類の破擦音が区別されてあることです。日本人の私は、日本語の「ツ、チ」の始めの子音に近い [ts]、その有声音 [dz]、また他の破擦音系列の音の区別が日本語でも「チャ」「ジョ」にもあらわれるのでいとも簡単に発音できるため、ロマンシュ語の授業では、「日本人なのに(?)よく上手に発音できるね」とほめられました。日本語で「た、ち、つ、て、と」「ちゃ、ちゅ、ちょ」を発音すると破擦音が全部入っているわ

⁸ 富盛伸夫. 1998. 「レト・ロマンス語」, 『世界の言語ガイドブック1 ヨーロッパ・アメリカ地域』, 東京外国語大学語学研究所編, 三省堂書店.

けです。

	両唇音	唇歯音	歯茎音	口蓋音	喉音
閉鎖音	p/b		t/d	k/g	
破擦音			ts/dz		
			tʃ/dʒ		
			tʃ/dʒ		
摩擦音		f/v	s/z	ç/j	h
鼻音	m		n	ɲ	
側音			l	ʎ	
ふるえ音			r		

【図4】 ロマンシュ語（ピュテール方言）の子音体系⁹

20世紀のはじめ、この地方、サンモリッツ近郊に逗留したマルセル・ブルーストは、耳に聞いたロマンシュ語のことを紀行文にしています。「エンガディン渓谷の人々の話す音を聞いた。僕たちはやさしい名が2つ重なったエンガディン地方の寒村で愛し合った。そこではドイツ語的な響きの夢想がイタリア語の音節の持つ肉感の中で消えていった。まわりには見たこともない緑色の湖が3つ重なって樅の森を映し出し、氷河の先鋒は地平線を閉ざしていた。」という美しい文章から、ロマンシュ語の母音と子音の織りなす音の響きがうかがえるでしょう。

6. ロマンシュ語の現在と未来

スイスでは10年ごとに国勢調査が行われ、使用言語についての質問項目があります。下の表2をみると、1980年までは、第一使用言語をLingua materna（母語として自分が受け継いでいる言語、母語）と表現して質問しています。約130年前、1880年はドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語、それ以外の言語で考えるとロマンシュ語は1.4%でした。その後、スイス全体の人口は増えていって2000年には728万人です。そのなかでロマンシュ語を母言語として使っている人口は絶対数はさほど変化がないのに、言語人口比率は3分の1、0.5%になりました。

ただ、国政調査で「あなたの母語はなんですか」という質問は母語の概念に誤解の余地を生むことがわかりました。そこで、実際の言語状況で場面場面の相手

⁹ 富盛伸夫. 1998. 「レト・ロマンス語」, 『世界の言語ガイドブック1 ヨーロッパ・アメリカ地域』, 東京外国語大学語学研究所編, 三省堂書店.

が誰かによってスイッチングするため、1990年からの調査では、職業生活ではどうなのか、家の中で話す言語はなにか、といった場面と言語使用能力の自己判断で回答させるようになりましたが、これによれば、ロマンシュ語を使える話者は約60000人となります。

Resultats dad insaquantas dumbraziuns dal pievel 1880–2000 al nivel federal
(en parentesas las procentualas):

	1880	1980	1990		2000	
	LM	LM	ML	ML/LD	ML	ML/LD
D	2 030 792 (71,3)	4 140 901 (65,0)	4 374 694 (63,6)	4 951 280 (73,4)	4 640 359 (63,7)	5 285 700 (72,5)
F	608 007 (21,4)	1 172 502 (18,4)	1 321 695 (19,2)	2 268 499 (33,6)	1 485 056(20,4)	2 416 034 (33,2)
I	161 923 (6,7)	622 226 (9,8)	524 116 (7,6)	998 187 (14,8)	470 961 (6,5)	971 505 (13,3)
R	38 705 (1,4)	51 128 (0,8)	39 632 (0,6)	66 356 (1,0)	35 095 (0,5)	60 816 (0,8)
A	6 675 (0,2)	379 203 (6,0)	613 550 (8,9)		656 539 (9,0)	
T	2 846 102	6 365 960	6 873 687		7 288 010	

1880–1980: LM = lingua materna; 1990/2000: ML = meglra lingua; ML/LD = meglra lingua e/u lingua discurreda en famiglia, en scola e/u en la professiun.

D = tudestg; F = franzos; I = talian; R = rumantsch; A = outras linguas; T = total populaziun.

【表2】ロマンシュ語人口の経年変化¹⁰

(ロマンシュ語は太字のRの行、LMは母語、MLは最も使える言語を示す。)

アルプスの人々の中では、父母が別々の言語の間で結婚したケースが多いし、子供は母親の言語に近づきますから、家自体が多言語家庭になっていきます。そしてさらに決定的なのは、テレビ番組やマンガなどのメディアの力です。学校教育は地域によって若干違いますが、エンガディン地方では学齢期前にロマンシュ語幼稚園に通わせて、ロマンシュ語で子供に話しかけたり遊んだりします。このため保育士さんもまず全員ロマンシュ語を勉強してマスターします。しかし、原則小学3年生まで全科目ロマンシュ語で授業をしますが、4年生からいきなりドイツ語になります。しかし子供達は平気でドイツ語でも授業についていきます。というのも、ドイツ語による番組ばかりで、大好きな日本のマンガもドイツ語だし、ドイツ語は周りにたくさんあふれているので、いきなり教育言語が変わっても大混乱にはなりません。ロマンシュ語だけの世界はもうなくなっていると言っていていいでしょう。

¹⁰ http://www.liarumantscha.ch/data/media/pdf/facts_figures/facts_figures_english.pdf から転載。2000年の国勢調査をもとに作成したもの。

1848年の憲法では「スイスの言語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語の3言語である」と決めていたのですが、ロマンシュ語をめくり法制度は20世紀になって大きく変動しました。第一次世界大戦で疲弊したヨーロッパでは、北はナチス・ドイツ、南にはムッソリーニのイタリアが世界を二分していました。南北を結ぶゴタルド峠をもつスイスはその枢軸の狭間にあつて苦しみました。アルプスの言葉、ロマンシュ語を母語として守る人々は、ドイツ語か、イタリア語か、自分の生活をかけた選択が迫られました。この厳しい状況にあつて、かつての救国の父、ウィリアム・テルの伝説が喚起され、激しい議論と郷土愛から生まれるロマンシュ語の言語文化復興・継承の機運が生まれ、1938年にスイス全土の国民投票となりました。スイス特有の自衛本能から、アルプスはイタリア語でもなくドイツ語でもなくロマンシュ語を残そう、そして国語の1つにロマンシュ語を入れて、スイスのアイデンティティーのシンボルとして守ろう、という投票行動を促しました。こうして勝ち得たロマンシュ語のステイタスは「国語」(national language)、しかし、公用語 (official language) とはしない、ということでした。

ところがその後、ロマンシュ語の復興はあまり芳しくありません。スイスでは言語文化の弱者であるロマンシュ語を護るということが、スイスのアイデンティティーを護るということにつながります。20世紀の後半、ロマンシュ語の危機が改めて叫ばれ、1997年の国民投票を経て1999年にはロマンシュ語の準公用語ともいえる地位を定めた憲法改正が行われました。新憲法第4条「国語」に「国の国語はドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語である」とし、この条文のあとで、「連邦の公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語である。」そして「ロマンシュ語の人々と関係を維持する上では公用語である。」という折衷的な、いわば準公用語の地位を与えました。ロマンシュ語母語話者の言語権を尊重し、その人々が望む場合には、公用語として対応する。つまり逆に言えば、ロマンシュ語に全ての文章を翻訳する必要はないし、ベルンの連邦議会でフランス語の演説があつても、同時通訳でロマンシュ語に訳す必要がないということです。これが現実的な負担軽減、コスト削減という知恵かもしれません。

ロマンシュ語は準公用語に昇格しても、谷ごと、方言ごとに異なった語彙、発音、綴りなど、違いを残したままでは公文書の翻訳にも支障がある。そこで2001年度、方言間の異同を折衷した「共通文章ロマンシュ語」ともいえるべき Rumantsch Grischun (グラウビュンデン州ロマンシュ語) という名のリンガ・フランカが

採用され、公の場面にはこの共通語使用を推奨する言語政策が取られています。すでに1982年にチューリッヒ大学ロマンス言語学教授のシュミット(H. Schmidt, 1921-1999)が提案していた最大公約数的な理想的な共通語ですが、これが言語政策化されるにつれ、企画者たちの有力方言である、ライン河源流地域スルセルヴァ地方の方言スルシルヴァン sursilvan が中核になってきています。果たして一般の人々には、特に他の方言の話者たちにはどれほど浸透しているのかが気になります。

筆者のインタビューや観察では、このルマンチ・グリジュンは、あくまで文章語で、お役所(行政機関)が上から押し付けてくるもの、自分たちは昔からある自分たちの方言を使い続ける、という反応が一般的です。しかし、メディアも教育もこの共通語を使うようになった現在、自分たちの方言はますますローカルになる。他方、共通文章語をあらためて習得する負担は避けたい、いっそのこと、苦勞して共通文章語を書くより、ドイツ語を書いたほうが楽だ、という意識も本音としてはあるようです。はたして、この状況で、ロマンシュ語の楽観的な展望を持てるのかどうか、心配になります。

スイスはEUに入っていないませんが、言語の多様性、文化の多様性、人権の尊重はそのままEU形成の理念上の基になっています。スイスでは少数者の言語文化復興の財政的支援の義務化が法的に整備されました。言語文化の権利を保障し、法的な保護、政策的・予算執行上で実現しているという点では、幸福な例外であるのかもしれませんが。出版の助成、メディアでの優遇措置、言語教育支援など、様々な文化的・財政的支援がある一方で、少数者言語を守り育てるという切迫感が若干薄れていく可能性もないとはいえません。言語文化の継承には、複層的な要素がかかわり、気を許せない状況は続いてゆくでしょう。ロマンシュ語の将来をかけた人々の努力を今後も見守りたいと思います。

10. ロマンシュ語を学ぶために

最後に、「ロマンシュ語を知るための3点」に紹介したものの他に、日本で参照しやすいロマンシュ語関係資料を解説しましょう。

1. 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第4巻 世界言語編 (下-2) ま～ん』三省堂、1,232p, 1992.

世界の諸言語について日本で現在最も記述内容が詳細な事典。この巻には「ロマンシュ語」の他、「ロマンス諸語」「レト・ロマンス諸語」の項目が収録されている。
(執筆者富盛伸夫)

2. 富盛伸夫「レト・ロマン語入門1～6」月刊『言語』大修館、1980.

現在は休刊になった言語学分野に特化した月刊誌のバックナンバーで、ロマンシュ語概説が参照できる。連載のタイトルは「レト・ロマン語」となっているが、レト・ロマンス諸語のこと。特に、スイス・ロマンシュ語の言語状況、歴史、言語構造、民俗文化などに詳しい。

3. *Pledari Grond Online* (<http://www.pledarigrond.ch/>)

現代生活に必要な新語も含め 21 万語収録した Pledari Grond (大辞典) という巨大なドイツ語・ロマンシュ語の辞書のオンライン版。主要な動詞には活用形も検索できるようにになっている。ただし解説はドイツ語で書かれている。

4. *MesPledaris (MyPledari)* (<http://www.pledari.ch/>)

4つの言語(ドイツ語、フランス語、イタリア語、英語)とのオンライン対照辞書、総称して mes pledaris 「私の辞書たち」と呼び、1つのサイトからそれぞれの言語との対訳辞書に入れるようになっている。共通ロマンシュ語だけでなく、ロマンシュ語内部の各方言が対照されて逆引きもできるので、方言形をひく場合に役立つ。随時更新・増補してはいるが、語彙数が少なく意味記述も簡潔な対訳式なので、これだけでは不十分な場合も多い。英語版 *MyPledari* があるのが便利である。

5. *Lia Rumantscha*
(<http://www.liarumantscha.ch/sites/content/index.html?lang2=rm>)

ロマンシュ語による出版助成、言語教員養成などの事業を進める言語文化復興財団のサイト。ロマンシュ語、ドイツ語、イタリア語、フランス語、英語の5言語でのポータルサイトで、ここから貴重な情報にアクセスできる。

コラム † スイス・アルプスに伝わる不思議な謎々のルーツは？



ミュステールのベネディクト派修道院

http://www.wanderland.ch/en/orte_detail.cfm?id=317916

… * ←————→ * …

急峻な峰々と深い谷の織りなすスイス・アルプスは、ヨーロッパでは魑魅魍魎の住むところと恐れられていた。その谷間に住む人々は、厳しい自然とのひきかえに、美しい雪山と清澄な空気を愛し静かに暮らしていた。では、全く文化や文明から隔絶されていたか、というと、そうではない。

筆者はスイス留学時代、ロマンシュ語の先生の教えを受けて、グラウビュンデン州に伝えられることわざや謎々を収集したことがある。たしかに、スイス独自の土地の薫りのする言葉遊びに会うばかりではなく、典型的に他の地域のものに似たものを発見することもある。

アルプスにはヨーロッパを二分する二つの大河、ドナウ河水系とライン河水系の源流があるが、ライン河の源に程近い町ミュステール (Mustér、ドイツ語名 Disentis) は、中世から栄えたひとつの文化的中心地である。街の中心には新聞社があり、出版文化活動が絶えず町を活気づけている。その名の由来どおり、谷の中腹にベネディクト派の巨大な修道院がそびえ、威圧感をもって町を見おろし

ている。

さて、このスルセルバ地方に伝えられる謎々に、次のような不思議なものがある。

《 Prau alv, sem ner, tschun che meinan e dus che miran ? 》

「白い野原、黒い種、 5 (頭) が進み、 そして2つが眺める、(これは何?)」

概して滑稽で意表をつくスイス・アルプスの謎かけにしては、特異な雰囲気をもつ文だ。

その心(解答)を尋ねると、なんと、scriptur「書く人」、scripziun「書く行為」であるというのだ。私の抱いていた先入観、白い野原とか黒い種、多分五頭の牛(?)を引いて耕す、アルプスの牧歌的なイメージからほど遠い答え、それは仄暗い修道院の写本室で黙々と羊皮紙に字を刻む修道士のことである、というのだ。アルプスの風景とはミスマッチ、と思い込んでしまった。

ところが、その後、ロマンス語学を学ぶにつれ、各言語の最古の文献を読解するという授業にあたった。そこで教材にあったのは、「ヴェローナの謎」。8世紀末か9世紀初頭の北イタリアはヴェローナで保管されている写本の欄外に書き込まれたイタズラ書き、それが謎々であるのだ。

(原文)

《 se pareba boves alba pratalia araba & albo versoria teneba & negro semen seminaba 》

イタリア語試訳：

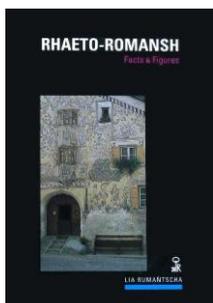
si spingeva avanti i buoi, arava un campo bianco e teneba un aratro bianco e seminava seme nero.

「(彼は)牛達を前に追い、白い畑を耕し、手に白い鋤を持ち、黒い種を蒔いた。」

中世の羊皮紙写本は旅をする。もともこの写本はスペインのトレドで書かれた祈祷書で、その後、カリアリ、ピサを経てヴェローナにもたらされたものであるという。そこで、土地の修道士(?)によって退屈しのぎにこっそり書かれた謎々、その綴りと単語に注目したい。albaに対応するスイス・ロマンシュ語はalv(a)で、ラテン語直系のアルプスに残る単語album(-a)「白い」を共通に持っているのだ。大半のロマンス諸語と同じくイタリア語では、ゲルマン語起源の*blank > bianco に変わっているので、北イタリアの方言か、あるいはロマンシュ語からの影響か?他の語彙もむしろロマンシュ語に近い。もっとも時代的には

ロマンシュ語を知るための3点

・*・...†...・*・*・*...†...・*・*・*



Manfred Gross, 1996, *RHAETO-ROMANSH : facts & figures*, Lia Rumantscha: Chur.

現代のスイス・ロマンシュ語のおかれている社会文化状況の全体像を把握するためにはコンパクトで一般の読者向けにわかりやすく編集されている。若干データの数値など古い部分があるが、ロマンシュ語言語文化復興財団の Lia Rumantscha の編集になり、信頼できる一冊である。2004年にはサイトから pdf 形式でダウンロードできる増補改訂第2版がアップされて入手が容易になった。データもアップデートされ、ロマンシュ語、ドイツ語、フランス語、イタリア語の他に英語版（タイトルは ROMANSH に変更）も用意されている。

http://www.liarumantscha.ch/data/media/pdf/facts_figures/facts_figures_english.pdf

... * ◀──▶ * ...

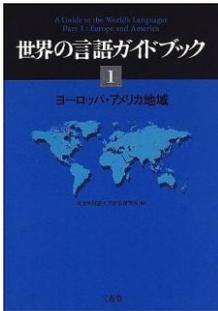
スイス文学研究会編. 1980. 『スイス詩集』. 早稲田大学出版部.

スイス文学研究会編. 1990. 『スイス民話集成』. 早稲田大学出版部.

スイス文学研究会が編集したスイスの4言語圏から選ばれた詩と民話の日本語訳アンソロジーで、2冊でセットとして紹介する。(ロマンシュ語訳とロマンシュ語の言語文化に関する解説文は本稿筆者が担当) 現在は絶版であるが、ネット古書販売では容易に入手できる。



... * ◀──▶ * ...



富盛伸夫. 1998. 「レト・ロマンス語」, 『世界の言語ガイドブック 1 ヨーロッパ・アメリカ地域』, 東京外国語大学語学研究所編, 三省堂書店. pp. 364-377.

東京外国語大学語学研究所で刊行した世界の言語を2分冊にして紹介した導入書。その「ヨーロッパ・アメリカ地域」編に所収。日本では紹介されることの少なかったスイス・ロマンシュ語を中心にレト・ロマンス系言語の特徴や文化背景などを簡潔に記述した概説。

… * ←—————→ * …

平成 23 年度 東京外国語大学オープンアカデミー
東京外国語大学語学研究所 企画
『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』
スィンディー語
2011 年 10 月 11 日 第 2 回
東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授
萬宮 健策

1. はじめに

スィンディー語(Sindhi)は、パキスタンの南東部に位置するスィンド州を中心とした地域で話されている、インド・ヨーロッパ語族の中の現代インド・アーリア諸語の 1 つに数えられる言語である。ウルドゥー語やヒンディー語、パンジャービー語(Panjabi)とは姉妹関係にあたる。母語人口は、パキスタンに約 2500 万¹、インドに約 280 万人²である。

パキスタンでは、南東部のスィンド州を中心に居住している。同州の州都カラチーにはそれほど多くないが、いわゆる「内陸スィンド(Interior Sindh)」にその大半が居住する。

インドのスィンディー語話者は、そのほぼすべてが 1947 年のインド・パキスタン分離独立を機にインド側へ移住したヒンドゥー教徒である。彼らは、いわゆる「言語州」を形成しておらず、デリーやムンバイ、ブネーなど全国に散らばって居住している。インド亜大陸で話されている他のいくつかの言語と同様、話者が信仰する宗教により、用いられる語彙には少なからず差異が見られるものの、スィンディー語の場合も、国をまたいでも相互理解は問題なくできる。

スィンディー語は、パキスタンでは、文字が追加されたアラビア文字で表記され、文字数は 52 である。ウルドゥー語の 35 文字に比べてアルファベットの数が多くなっている理由には、子音音素がウルドゥー語に比べて多くなっているだけでなく、有気音（帯気音）などの表記のしかたが異なる、などの点が挙げられる。一方、インドでは、アラビア文字に接する機会が少ないなどの理由で、インド政府が推奨するデーヴァナーガリー文字も併用される。

こちらも、スィンディー語特有の入破音（詳細は後述）を表記する文字が追加され、総数はヒンディー語のそれに比べて増えている。

本稿では、このスィンディー語の概略を説明するとともに、スィンディー語話者の現在の状況および直面しようとしている課題についても触れてゆきたい。また、日本でスィンディー語を学習する場合の参考情報もあわせて考える。

2. スィンディー語の音韻体系

2.1. 子音

スィンディー語の音韻体系のうち、子音の音韻体系は、同系統の近隣の言語に比べて複雑であると指摘できる。中でも、入破音(implosives) 4種と鼻子音(nasals) 5種の存在が、スィンディー語を際立たせていると言える。近隣の言語では、サラエキー語(Saraiki)に入破音の存在が認められている。

日本語で用いるすべての言語音は、肺から出る空気を用いるが、入破音は声門閉鎖音の1種であり、声門を閉じた状態で「バ」や「ガ」を発音する。こう説明すると理解が難しいかもしれないが、実際にはそれほどでもない。日本語では、驚いたときによく「あっ」という声が出るが、その瞬間には、意識せずとも声門が閉じている（息が止まっている）。その状態を維持して「バ」や「ガ」を発音すると、この入破音になる。

入破音以外にも、日本語を母語とするものにとって聞き分けが困難な音に、鼻子音がある。具体的には日本語における歯音の「ナ」行と、それが口蓋化した「ニャ」行の違いである。母音が「ウ」なら、それぞれ「ヌ」と「ニユ」で日本語を母語とするものには容易に判別できる。しかし後続の母音が「イ」の場合、つまり「ニ[ni]」と「ニィ[nʰi]」の区別は、日本語を母語とするものには非常に困難であろう。また、反舌鼻子音の[ŋ]、軟口蓋鼻子音[ŋ̠]も、日本語では独立音素になっていないため、その発音および聞き取りには訓練が必要である。

上記以外でも、日本語を母語とするものにとってその聞き分けが困難な子音には、有気音⁴と無気音の対立、反舌音(retroflexes)の存在がある。

日本語では、「カ[kə]」と「ガ[gə]」は区別するが、[kə]と[kʰə]や、[gə]と[gʰə]は、それぞれ別の音素と認識されない。この小さいhで表されるのが有気音

である。日本語でも、たとえば力を込めて「勝った！」と言う場合の「カ」は意識せずとも有気音化しているはずである。

また、反舌音は、文字通り舌を反らせて発音される音である。日本語の「タ」や「ダ」では、舌の先端上面が上の歯の後ろ側に広がる部分に付いて発音されるが、この反舌音は、舌先を反らせるようにして、舌の裏側の先を上歯の後ろ側に付けて発音される「タ[tʰə]」や「ダ[dʰə]」である。この反舌音は、近隣のウルドゥー語やヒンディー語にも見られる音である。また、反舌音の有気音と無気音も区別される。

上述のとおり、スィンディー語はウルドゥー語と同様に、有声・無声の区別、有気・無気の区別をどちらもすることに留意する必要がある。たとえば、歯音を例にとると、[tʰə]、[tʰə̃]、[dʰə]、[dʰə̃]を区別する。また日本語では「ダ」としか表記できない音が5種類、すなわち[dʰə]（歯有声無気閉鎖音）、[dʰə̃]（歯有声有気閉鎖音）、[dʰə̃]（反舌有声無気閉鎖音）、[dʰə̃]（反舌有声有気閉鎖音）、[dʰə̃]（反舌入破音）あり、どれも日本語母語話者には「ダ」としか認識できないということになる。

2.2. 母音

母音については、3種の短母音、7種の長母音があり、それぞれに鼻音化母音が確認できる。具体的には、短母音 (/ə/, /i/, /u/) ⁵、長母音 (/a:/, /i:/, /u:/, /e:/, /o:/, /ɛ:/, /ɔ:/) である（音韻体系については、表1、表2を参照）。ただし、実際の発話においては、短母音の/e/や/o/が聞かれる。具体的には、同一音節内にある子音/h/の直前にある/i/、/u/がそれぞれ/e/、/o/に変化する。以下に例を示す。

mihmānu	→	mehmānu	（客：男性名詞）
mihrbānī	→	mehrbānī	（感謝：女性名詞）
uhdō	→	ohdō	（地位：男性名詞）
muhru	→	mohru	（印：男性名詞）

また、同様に、同一音節内にある子音/h/の直前にある/a/は、/ɛ/に変化する。

pəhriyũ	→	pəhriyũ	（最初の：形容詞）
---------	---	---------	-----------

2.3. 音節構造

なおシンディー語は開音節言語であることも、同族の近隣諸言語と異なる点である。一部の借用語を除いて、日本語と同様に、すべての語彙は何らかの母音で終わる。特に語末の短母音は、文法的な変化を担っており重要な役割を果たす。しかし、あとで触れるシンディー文字は、原則として語中、語末の短母音を補助記号なしには表記できないため、表記された語彙からはそこに含まれる短母音が判別できない場合が多く、外国語として学習するものにとっては、大きな障害となっている。具体例を挙げれば、以下のとおりである。

kita:bu 「本」(男性名詞・主格・単数形)

kita:bə 「本」(男性名詞・主格・複数形)

上記の語彙は、文字ではともにكتابと表記され、これだけでは、どちらの発音なのかは判別できない。

シンディー語のアクセントは、英語と同様に、強弱アクセントである。英語では、アクセントがある音節が変わることによって語彙の意味が変化する場合があるが、シンディー語では、アクセントの移動はない。同一語以内では、短母音よりも長母音が、また同一語以内に長母音が2つ以上ある場合は、より後ろの長母音が相対的に強く発音される。

3. シンディー語の文字

先に簡単に触れたとおり、シンディー語は、2種類の文字を用いて表記される。パキスタンではアラビア文字が、インドではデーヴァナーガリー文字とアラビア文字が併用されている。アルファベットについては、表3を参照されたい。

ほかの諸言語と同様、シンディー語の文法や語彙集、辞書類は、それを学ぶ必要に迫られたイギリス人たちにより 19 世紀中期以降に編纂され始めた。当時のシンディー語は決まった文字体系を有していなかったため、1852 年に、英国人およびシンディーが協議した上で、アラビア文字を基本とする 52 文字からなるシンディー語のアルファベットが、まず決定された。パキスタンおよびインドで現在用いられているシンディー語のアルファベットはこのときに決められた文字体系である。この文字は、シンディ

一語特有の音韻体系を表すために、文字の形に手が加えられた結果、総数 52 文字からなっている。今後は、アラビア文字をもとにした 52 文字のアルファベットをスィンディー文字と呼ぶことにする。

スィンディー語は、上記 2.3.でも触れたとおりの開音節言語である。上述したとおりの補助記号なしでは短母音の表記が困難なスィンディー文字で表記することには、かなりの無理があるといわざるを得ない。外国語としてスィンディー語を学ぶ立場になると、短母音の有無、ある場合それがどんな短母音か、また長母音の場合も、現れる場所によっては、文字から判断ができないことが少なからずある。たとえば、他動詞 *kəraṇu* (する) の未完了分詞 *kəndō* の女性単数形 *kəndī* と、後置格形 *kəndē* は、文字上では判別できない。

一方、インドで用いられているデーヴァナーガリー文字は、1948 年にインド政府が推奨した文字である。その背景には、インド国内ではアラビア文字に接する機会が相対的に少ないこと、インド国内のほぼすべてのスィンディー語話者がヒンドゥー教徒であることが考慮されたものと指摘できる。1965 年にスィンディー語がインド憲法第 8 附則における重要言語へ追加されたことは、後述する「言語州」を形成していないことと関係があろう。ヒンディー語を表記する文字に、入破音を表す 4 文字が追加されている。

4. 文法面から見たスィンディー語の特徴

スィンディー語の語順は、原則として日本語と同じ SOV 形式である。既述だが、英語などと異なり、アクセントの位置によって語彙の意味が変化することもない。アクセントがないわけではなく、英語と同様に強弱アクセントを有するが、アクセントの位置の変化は文法上の意味を持たない。

日本語と異なるのは、スィンディー語が屈折語であるという点である。名詞には単数形と複数形があり、その名詞には男性名詞と女性名詞とがある。有性名詞の性は、その名詞の性別に従うが、無性名詞の性は、恣意的に決められているため、個別に覚える必要がある。このような文法性は、主として語尾変化により表される。また、名詞を修飾する形容詞のうち、基本形の語尾が *ō* で終わるものに関しては、修飾する名詞の性、数、格に応じた語尾変化をする。動詞は、主語に応じて人称 (1、2、3 人称) や性 (男性、女性) ・数 (単数、複数) ・時制 (原則として未来、現在、過去) 等による語尾変化を

する。以下、いくつかスィンディー語を特徴づける点に絞って、説明を加えてゆく。

4. 1. 能格構文・与格構文

北インドを中心とする現代インド・アーリヤ諸語に属する他の言語と同様、スィンディー語は能格言語の1つに数えられる。しかし、能格構造⁶をとるのは、他動詞完了分詞を用いる単純過去、およびコンピュータ動詞をとともなう完了形の文のみである。以下に例を示す。

(1)私はこの本を読む

mā hīu kitābu pəḥā t̪ō.
私 (代・主) これ (代単・主) 本 (男単・主) 読む (未完1男単) である (コンピュータ1男単)

(2)私はこの本 (単数) を読んだ : 「本」と「読む」が文法的に一致

mū hīu kitābu pəḥiyō.
私 (代・後) これ (代単・主) 本 (男単・主) 読む (完・男単)

(2a)私はいこれらの本 (複数) を読んだ : 「本」と「読む」が文法的に一致

mū hī kitābə pəḥiyā.
私 (代・後) これら (代複・主) 本 (男複・主) 読む (完・男複)

スィンディー語の能格構文では、能格を示す後置詞が消失している。しかし、意味上の主語は後置格形となり、動詞は、主格目的語の性・数に応じて変化する。

同様の構文として、与格構文が挙げられる。この文では、意味上の主語が与格後置詞をともなって現れる。スィンディー語では、義務・強制、喜怒哀楽などの表現に多用される。

(3)あなたはここに来るべきだ

təvḥā kḥē hitē əcəṇə kḥəpē.
あなた (代・後) に (与格) ここ (副詞) 来る (自・不定・後) べきだ (補助・単)

(4)彼らはこの仕事をしなければならない

hunəni kḥē hīu kəmu kəṛəṇō āhē.
彼ら (代・後) に (与格) これ (指代) 仕事 (男単・主) する (自・男単・後) コピュラ (現・単)

(5) (私は) あなたにお会いできてうれしいです

(mũ k^hē) təv^hã sã milī xušī t^hī
 (私 (代・後) に (与格) あなた (代・後) と (具格) 会う (自・接) 喜び (女単・主^マ) ある (過・女単)

4.2. 使役動詞

スインディー語には、他動詞から派生する使役動詞が用いられ、他動詞と役割を厳密に異にする。また、いわゆる「二重使役動詞」と呼ばれる動詞群も存在する。二重使役とはあまりなじみのない表現だが、仲介者（もしくはモノ）を介する使役である。以下に例を示す。

(6) 私は、食事をした。

mũ k^hād^hō k^hāyō.
 私 (代・後) 食事 (男主単) 食べる (完了・男単)

(6a) 私は、彼に食事を（直接）食べさせた

mũ hunə k^hē k^hād^hō k^hārāyō.
 私 (代・後) 彼 (代・後) に (与格) 食事 (男主単) 食べさせる (完了・男単)

(6b) 私は、彼にAをして食事を食べさせた（食事を直接食べさせたのは、A）

mũ hunə k^hē A sã k^hād^hō
 私 (代・後) 彼 (代・後) に (与格) A (後) によって (具格) 食事 (男主単)

k^hārāyō.

食べさせしめる (完了・男単)

スインディー語の特徴として注目すべきは、実際に用いられるかどうかはさておき、二重使役以上の多重使役とも呼ぶべき動詞を、他動詞からほぼ規則的に導き出すことができるという点である。上記の動詞「食べる」（不定詞形は k^hā-iṇu）を例にとると、使役動詞は k^hā-rā-iṇu、二重使役動詞は k^hā-rārā-iṇu となる。使役を表すと考えられる接辞 rā を繰り返し用いることにより、仲介者（もしくはモノ）を理論上は無限に増やすことができる。たとえば、上記の例では、k^hā-rārārā-iṇu、k^hā-rārārārā-iṇu、k^hā-rārārārārā-iṇu というかたちが導き出せるということである。

4.3. 人称接尾辞の多用

最後に、人称接尾辞についてもふれておく。スインディー語には人称接尾辞(pronominal suffixes)と呼ばれる品詞があり、親族名称、後置詞、動詞に付加される。たとえば、他動詞には、主語の人称代名詞と間接目的語の人称代名詞を、人称接尾辞により表すことができる。インフォーマントによると、人称接尾辞を用いる文と、用いない文とで、表す意味には差がない。また、人称接尾辞を用いる文は、口語文に限られるとされる。以下に、例を示す。：の右側が、人称接尾辞を用いたかたちである。

1) 親族名称に付加されるもの

7) mūhījō puṭu : puṭumi (私の息子 (主格・単数))

7a) tāv^hājā puṭə : puṭəvə (あなたの息子 (主格・複数))

男性名詞 puṭu は、主格複数形になると puṭə と変化する。mi は 1 人称単数形を、və は 2 人称複数形を表す人称接尾辞である。

2) 後置詞に付加されるもの

例) 私は彼にこの本をあげた。

8) mū hunə k^hē hīu kitābu qīnō āhē.

私 (代・後) 彼 (彼女)⁷ (代・後) に (与格) この本 (男主単) あげる (完了男・単+コピュラ現在・単)

8a) mū k^hēsi hīu kitāb qīnō āhē.

私 (代・後) 彼 (彼女) に (与格+3 単接尾辞) この本 (男主単) あげる (完了男・単+コピュラ現在・単)

3) 動詞に付加されるもの

動詞に付加される人称接尾辞は、その動詞が自動詞か他動詞か、どのような分詞かにより、細かい差異がある。今回は、他動詞完了分詞に付加される人称接尾辞の例を挙げることにする。

例) 私は、彼 (彼女) にまた来て下さい、と言った。

9) mū hunə k^hē cəyō tə

私 (代・後) 彼 (彼女) (代・後) に (与格) 言う (完了男・単) 接続詞

wārī əcō.

再び (副) 来る (命令・複)

9a) mū cəyōsi tə

私 (代・後) 彼 (彼女) に言った (完了男・単+3 単接尾辞) 接続詞

wārī acō.

再び^(副) 来る^(命令・複)

9b) cəyōmāsi

私は彼（彼女）に言った^(完了男・単+1 単接尾辞+3 単接尾辞)

tə

接続詞

wārī acō.

再び^(副) 来る^(命令・複)

上記の例では、9)が通常の文、9a)が、間接目的語を、人称代名詞を用いて表した文、そして 9b)が文の主語と間接目的語の両方を、人称接尾辞を用いて表した文である。

先にも触れたとおり、インフォーマント⁸⁾によると、上記の3文はどれも文法的には正しい文である。ただし、人称接尾辞を用いる文は、その話題への参加者全員が、人称接尾辞で表された人物を誤解なく特定できる会話文でのみ用いられ、それ以外の場合はほとんど用いられない、という説明である。なお、9b)で見られるような、人称接尾辞を2つ用いる文では、先に文の主語が、次に間接目的語が表される。また、文の主語だけを人称接尾辞で表す文については、構造上導き出せるが、慣例として言わない、という説明を受けたことを付け加えておく。

5. 社会言語学的な観点から見たスィンディー語

スィンディー語は、主としてパキスタン、インドで話されているが、それぞれに課題を抱えていると指摘できる。以下、国別にその状況を概観する。

5.1. インド

インドでは1950年代に、いわゆる「言語州⁹⁾」に基づき州再編が行われたが、スィンディー語は言語州を形成しておらず、また、どの州でも公用語になっていないため、母語話者は全国に散らばっている。マハーラーシュトラ州、グジャラート州、デリーなどに比較的集中しているが、このことは、スィンディー語を母語とするものは、インドの連邦公用語であるヒンディー語と、居住している州の公用語をも理解することが必要であることを意味する。そのため、必然的に母語であるスィンディー語を用いる機会は、家庭内を除

けばほぼなくなる。

こうした状況の下、マハーラーシュトラ州のプネー(Pune)やウルハースナガル(Ulhasnagar)、またグジャラート州ガンディーダーム(Gandhidham)では、児童に対するシンディー語教育、シンディー語による教育を積極的に実施していることは評価されるべきであろう。ただ、若年層のシンディー語やシンド文化への関心が薄れつつある点は否めない。ガンディーダームにあるインド・シンド学研究所(Indian Institute for Sindhology)の役割には、シンディー語教育の普及・促進とともに、シンディー語、シンド文化の保護も含まれている。

前述のとおりインド国内ではアラビア文字に触れる機会が少ないため、デーヴァナーガリー文字によるシンディー語表記がインド政府により推奨されている。一方で、シンディー語話者には、シンド文化の中心は、現パキスタン側シンド州にあるという考えも残っている。現インド側に居住するシンディー民族のほぼすべてが、現パキスタン側からの移住者であることを考えると、当然という感もある。しかし、パキスタン側でのヒンドゥーの地位に危機を感じて移住したのも少なくなく、筆者の経験では、インドのシンディー民族同士の関係は、どの文字を用いて表記するのかという点が基準になっていると考えられる。つまり、シンディー文字を用いるグループには、パキスタン側に文化の中心があるという考えがあるが、デーヴァナーガリー文字を用いるグループは、それとは一線を画す傾向にある。なお、移住第一世代には、両方の文字の読み書きができるものが少ない。参考までに、サーヒティヤ・アカデミー(文学協会)(Sahitya Akademi)が出版するシンディー語出版物にも、シンディー文字とデーヴァナーガリー文字併記のものがある。

5.2. パキスタン

パキスタンで、シンディー語が主として用いられているのは、南東部のシンド州である。シンド州では、州公用語としてウルドゥー語とともにシンディー語が制定されている¹⁰。しかし、この州公用語制定をめぐり、1970年代初頭を頂点として、紛争があったことはよく知られている。「言語紛争(linguistic conflict)」と呼ばれ、ウルドゥー語話者とシンディー語話者

の間で、言語の違いを原因とする覇権争いがあった。言語が違うと言っても、日本語話者から見れば、東京弁と博多弁程度の差であり、なぜその程度の違いにこだわるのかを理解することは困難かもしれない。そこには、インド、パキスタンの現代史が深く関わっている。

1947年の印パ分離独立前後に、ヒンドゥー教徒は現インド側に、イスラーム教徒（ムスリム）は現パキスタン（当時の東パキスタン（現バングラデシュ）を含む）側に移動したことはよく知られている。彼らのうち、現パキスタン側へ移住したムスリムは、パキスタンではムハージル（避難民）と呼ばれた。一方、独立前からパキスタン側に居住していた各民族は、ムハージルたちを自分たちが居住している土地にあとからやって来た「他人」という目で見た。中でも、パキスタン政府の意向により、ムハージルの多くを受け入れることとなった¹¹スィンド州では、その流入が強い反発を招いた。

一方ムハージルには、「自らこそが、ムガル朝期以降インド亜大陸のムスリム文化の正統なる継承者である」という自負があり、新生パキスタンを背負っていくのは自分たちであるという思いで、移住してきたと指摘できる。こうした意識の違いが対立を深めていくことになる。

ほぼすべてのムハージルの母語は、ウルドゥー語である。一方、スィンド州内に居住する人々はスィンディー語を母語とする。両者間の関係には、上記のとおり分離独立後からのくすぶりがあったが、パキスタン政府がウルドゥー語を国語と制定したことや、1971年の州公用語制定問題で、急速に緊張が高まった。

しかしスィンディーにとっての「言語紛争」は、他者の流入によるアイデンティティ再考のきっかけとなったという指摘もできよう。すなわちムハージルの流入により、あらためてスィンディー民族およびスィンディー語はどうあるべきか、ということ自身で考えるきっかけが与えられたのである。スィンディー語の発音や文法の体系は、ウルドゥー語のそれに比較して古いかたちを残しており、難解な部分が多い。そのことがかえってスィンディー民族にとっては誇りとなり、あとから自分たちの土地にやってきたウルドゥー語話者との差異を強調することにつながっていった。

パキスタンには、こうした民族アイデンティティが各地に根付いていると言える。現パキスタンのどの地域にも根ざしていなかったウルドゥー語を新生パキスタンの国語として制定しなければならなかったパキスタン政府の苦

悩もそこにある。すなわち、「パキスタン人」の共通項は、信仰する宗教がイスラームである、という点以外にはなかったことが、パキスタンという国への帰属意識の薄さ、各民族としてのアイデンティティが国民としてのアイデンティティに勝っているということと結びついているのである。シンディー人たちは、その民族アイデンティティの構成要素の重要な1つとして、言語の差異にも注目したのである。シンディー語による新聞や出版物の豊富さが、ウルドゥー語や英語をのぞく他言語のそれに比べると群を抜いていることは、その証左であろう。

また、州公用語の地位を得ているため、シンド州内の公立学校では、シンディー民族でなくとも、最低2年間はシンディー語を学ぶことになっている¹²。また、制度上は州公務員もウルドゥー、シンディー両言語の運用能力があることを採用条件の1つとしている。

6. シンディー文学

シンディー文学は、17世紀後半のシャー・アブドゥッラティーフ・ビターイー(1689-1752)の「シャー・ジョー・リサーロー」を頂点として、18世紀頃にかけてその黄金期を迎えたと言える。七言語詩人と呼ばれたサチャル・サルマスト(1739-1829)や、サーミー(1743-1850)とともに、三大詩人と称される。カーフィーやワーイーといった詩のジャンルが確立したのもこの時代である。詩の内容には、地域に根ざした民話が多く、中でも「ウマル・マールヴィー」や、「ドードー・チャネーサル¹³」に代表される悲恋物語が中心的な位置を占める。

現代では、ミールザー・カリーチ・ベークの長編小説「ズィーナト¹⁴」がその代表であろう。近年では、ウルドゥー語を介した日本の俳句も、シンディー語詩のジャンルの1つとして確立されつつある。

一方で、シンディー語で書いても読者層が限定される、という理由から、ヒンディー語やウルドゥー語、英語で書くことを選ぶ作家も増加傾向にある。

7. 日本でシンディー語を学ぶということ

日本において、シンディー語を学ぶ機会は皆無と言っていい。日本では、インドや南アジアの言語といえば、ヒンディー語、ウルドゥー語といった地

域の「大言語」、「共通語」がようやく知られはじめた段階と言え、それ以外の地域語(regional languages)に対する関心はまだまだ低い。東京外国語大学の授業や、2010年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催の言語研修でスィンディー語が取り上げられたのが、唯一とも言える機会であった。上記言語研修のテキストは、会話などを収録したCDの音声データとともに以下のウェブサイト公開されているので、参照していただきたい。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/ilc-list/20103>

また、スィンディー語学習に関する相談等は、筆者が受け付けるので、電子メール・アドレス(k_mamiya@tufs.ac.jp)宛に遠慮なく連絡をいただきたい。スィンディー語や文化に関する情報は、以下のウェブサイトでも順次公開していくので、参照されたい。

http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/mamiya_k/snd/sindhi_home.html

あまり知られていないことかもしれないが、スィンディー語母語話者は、少なからず日本にいる。関東では横浜周辺、関西では神戸周辺に集中している。そのほとんどはインド、パキスタンの分離独立以前から貿易関係で日本にきた人とその子孫である。ただし、長期間本国を離れている人が多いことから、筆者の経験では、在日2世、3世にとっては、すでに文字の読み書きは難しくなっている。

これをきっかけとして、読者の方にスィンディー語への関心を少しでも抱いていただければ、望外の喜びである。

		子音															
		両唇音		唇歯音		歯茎音		後部歯茎音		反舌音		硬口蓋音		軟口蓋音		声門音	
		無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声
閉鎖音	無気	p	b			t	d			t̪	ɖ	ʈ	ɟ	k	g		
	有気	p ^h	b ^h			t ^h	d ^h			t̪ ^h	ɖ ^h	ʈ ^h	ɟ ^h	k ^h	g ^h		
入破音			β								ɸ		β		ɣ		
鼻音	無気		m				n				ɳ		ɲ		ŋ		
	有気		m ^h				n ^h				ɳ ^h						
摩擦音				(f)	v	s	(z)	ʃ						(x)	(χ)	h	
はじき音	無気					r				ɽ							
	有気									ɽ ^h							
側音	無気					l											
	有気																
半母音					w								y				

(表 1 : スインディー語の子音)

母音				
	前舌			後舌
狭	i			u
		e		o
		ɛ	ə	ɔ
広			a	

(表 2 : スインディー語の母音)

(表3) スィンディー語アルファベット対照表

S-D	S		S-D	S		S-D	S	
फ	फ	37	द	د	19	母音	ا	1
क़	ق	38	ध	ذ	20	ब	ب	2
क	ک	39	ड	ڈ	21	भ	پ	3
ख	ک	40	ड	د	22	ब्र	ب	4
ग	گ	41	ढ	دھ	23	त	ت	5
ग़	گھ	42	ज़	ز	24	थ	ث	6
घ	گھ	43	र	ر	25	ट	ت	7
ङ	گھ	44	ड़	ڑ	26	ठ	ت	8
ल	ل	45	ज़	ز	27	स	س	9
म	م	46	स	س	28	प	پ	10
न	ن	47	ष	ش	29	ज	ج	11
ढ	ٹ	48	स	ص	30	ज़	ج	12
व	و	49	ज़	ض	31	झ	جھ	13

ह	ह	50	त	ط	32	त्र	ج	14
	ء	51	ज़	ظ	33	च	چ	15
य	ي	52	母音	ع	34	छ	چھ	16
			ग	غ	35	ह	ح	17
			फ़	ف	36	ख	خ	18

注) 上記の表は、スィンディー文字の順序を基本にしているため、デーヴァナーガリー文字の順序とは異なる。また、デーヴァナーガリー文字のうち母音を表す文字は、この表には含まれていない。

参考文献

- 萬宮健策. 2010. 「文法」(平成 22 年度言語研修スィンディー語研修テキスト): 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 272p.
- . 2004. 「地域語のエネルギーに見る国民統合と地域・民族運動」黒崎卓、子島進、山根聡(編)『現代パキスタン分析』pp.83-120.所収

MAMIYA, Kensaku. 2008. Mother tongue and creation of their own culture: In the case of Sindhi in South Asia, 民族紛争の背景に関する地政学的研究 vol.2 コトバの力学—他者表象としての「外国」語(第1回国際シンポジウム報告集), pp.97-106.

- . 1993. Urdu aur Sindhi ke Arkan-e Tahajji ka Taqabili Jaiza -Angrezi Dakhail Alfaz ke Nuqta-e Nazar Se- (ウルドゥー語とスィンディー語の音節構造比較研究。原文はウルドゥー語)

-
- ¹ 1998年国勢調査では、スィンディー語の母語人口は全人口の14.1%。
<http://www.census.gov.pk/MotherTongue.htm>。一方で、2012年10月現在のパキスタンの人口は推計約1億8000万である（Population Census Organization, <http://www.census.gov.pk/index.php>）ことから筆者が計算。
- ² Ethnologue 推計(1997)による。（以上、2012年10月29日閲覧）
http://www.ethnologue.com/show_language.asp?code=snd（2012年10月29日閲覧）。
- ³ []で囲まれた記号は International Phonetic Alphabet である。その詳細は、
<http://www.langsci.ucl.ac.uk/ipa/fullchart.html> を参照のこと。（2012年11月末閲覧）
- ⁴ 帯気音とも呼ばれる。aspirated sounds を指す。
- ⁵ 実際には、短母音/e/、/o/が現れることがあるが、現れる環境が限られており、それぞれ/i/、/u/の異音と考えるべきである。
- ⁶ 能格構造とは、動詞のかたちが、意味上の主語ではなく直接目的語（主格：nominative）の性・数に応じて決まる構造を指す。意味上の主語は能格(ergative)となり、動詞には影響を与えない。
- ⁷ スィンディー語の3人称代名詞後置格形は、性を区別しない。
- ⁸ Dr. Baldev Matlani。ムンバイー大学スィンディー語科主任。ラールカーナー（現パキスタン）出身で、母語はスィンディー語。1971年にインドへ移住。
- ⁹ 東北部などを除いて、言語の差異に従って、州の境界線が決められている。
- ¹⁰ 他州の公用語は、ウルドゥー語である。
- ¹¹ スィンド州には、ヒンドゥー教徒の割合が他州に比べて多く、インド側へ移住していったヒンドゥー教徒の土地等を、ムハーヅルに優先的に割り当てるという政策を、パキスタン政府が執ったことがその原因である。
- ¹² 州内のスィンディー語教科書には、母語話者向けと非母語話者向けの2種類が、スィンド州教科書委員会(Sindh Textbook Board)により用意されている。
- ¹³ どちらも、スィンド州内各地の聖者廟でメロディーをつけて唱われ、人気が高い。
- ¹⁴ 題名は、女性の名前。スィンディー女性のあるべき姿が描き出されており、高い人気を誇る。



町の八百屋さん
(女性が売っているのは、パキスタンでは珍しい)

…* ←—————→ *…

ムスリムやヒンドゥーには、食事にもさまざまな宗教上の制約があることはご存じだと思います。スィンディー語話者も例外ではない。つまり、ムスリムは豚肉やアルコール類を口にすることはできないし、ヒンドゥーは牛肉を食わず、また菜食である場合が多い。こうした制約の中でも、おいしいものは当然だがたくさんある。スィンディーと言えば、まず思い浮かぶのは、「母なる河」インダスで獲れるパッラーという魚、それにカタール



インダス河で捕れた魚 (インダス河岸にて)

ン (もしくはアーチャール) と呼ばれる漬け物であろう。

パッラー (単数形はパッロー) はインダス河下流域で捕れる淡水魚で、コイに近い。いわゆる「カレー」にして食べるため、くさみなどはほとんど感じない。小骨が多い点は食べる際に難点となるが、淡泊な白身でとても

おいしい。日本と違って、冷蔵して遠くまで運ぶということをしないため、河の近くで、漁師さんがいるところでないと食べられない。

カターンは、漬け物と説明したが、日本人が思い描く漬け物とは大きく異なる。マンガーや、ニンジン、ダイコンなどの野菜を、香辛料を加えた油、もしくは塩漬けにする。見た目は正直言ってあまりおいしそうではないが、一度食べると病みつきになるおいしさである。カターン自体は、インドやパキスタンどこでも入手可能だが、パキスタンのシカールプール(Shikarpur)は、カターンで知られる場所である。各家庭がその家に伝える味を持っており、市販されているものとはひと味違う。

インダス河沿いの青空天井のレストランで食べるパッラー料理は格別である。すさまじい暑さ（熱さと言ってもいい）を初めとして、スィンドを代表する風物詩である。

スィンディー語、スィンディー民族を理解するための3冊

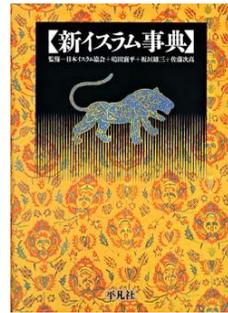
・・・✚・・・✚・・・✚・・・✚・・・✚・・・✚・・・✚・・・✚・・・✚・・・



1) 萬宮健策. 2003. 「母なる河インダスが育んだ大地：シンド州」, 広瀬 崇子・小田尚也・山根聡編 『パキスタンを知るための60章』明石書店. pp.165-168 所収

・・・* ————— *・・・

2) 萬宮健策. 2002. 「シンド(Sind)」, 佐藤次高監修 『新イスラム事典』平凡社 p.293 所収



本文にも書いたとおり、日本語でスィンディー語やスィンディー民族に関して知ることができる文献おぼぼ皆無です。

1) と 2) は短い紹介文ですが、彼らの一端を知ることができると思います。

・・・* ————— *・・・



萬宮健策. 1996. 『スィンディー語基礎 1500語』大学書林. 140p.

2010年度に実施した東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催言語研修に用いた語彙集の元になったものです。

・・・* ————— *・・・

平成 23 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』

パンジャービー語

2011年10月18日 第3回

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

萩田 博

はじめに

まずパンジャービー語を始めたきっかけについてお話ししたいと思います。私が東京外大に入ったときのウルドゥー語の外国人教師は、サット・プラカーシュ・ガーンディーという方だったのですが、先生はヒンドゥー教徒で、パンジャーブの生まれでした。後になってからわかったのですが、先生の母語はパンジャービー語でした。3年生になってウルドゥー文学に関心を持ち始めた私は、サーダット・ハサン・マントー（1912～1955）という作家の短編小説の日本語訳を読んで、非常に気に入りました。それがきっかけでウルドゥー文学をやるようになったのですが、実はこの作家もウルドゥー語が母語ではなくて、パンジャービー語を母語としている人でした。ウルドゥー小説を読み進むにつれて、パンジャービー語を母語とし、ウルドゥー語の作家として活躍している人々が数多くいることを知りました。私はパキスタンのラホールというところに通算で2年間留学しました。ラホールというのはパキスタン・パンジャーブ州の州都でインドとの国境のすぐ近くにありますが、ラホールで町を歩いていると、みんなが話しているのは、ほとんどがパンジャービー語でした。大学での授業や先生との会話はすべてウルドゥー語でしたが、先生たちも同僚や職員と話すときはパンジャービー語を使うことが結構あり、生活の中で二つの言語が使い分けられているように感じました。パキスタンの主要言語のひとつであるパンジャービー語も習得することを恩師である鈴木斌先生からすすめられていましたし、現地での言語状況に対する関心も加わって、パンジャービー語を学ぶようになりました。

パンジャービーという言葉について

パンジャービー語というのは、panjab (パンジャープ) という単語から派生した言葉です。またパンジャープはパンジとアープという語が結合してできた語です。パンジというのはペルシア語で数字の5であり、アープというのは河です。つまり、パンジャープとは5つの河という意味です。パンジャープには5つの大きな河が流れていて、そこからこの地名がつけられたとされています。このパンジャープにイーという音を加えられて、言語名、民族名になっています。パンジャープはインドにもまたがっていて、両国にパンジャープ州があります。1947年にインドとパキスタンが分離独立したときに、もともと一つだったパンジャープはインドとパキスタンに分割されて現在に至っているために、こうした状況になっています。

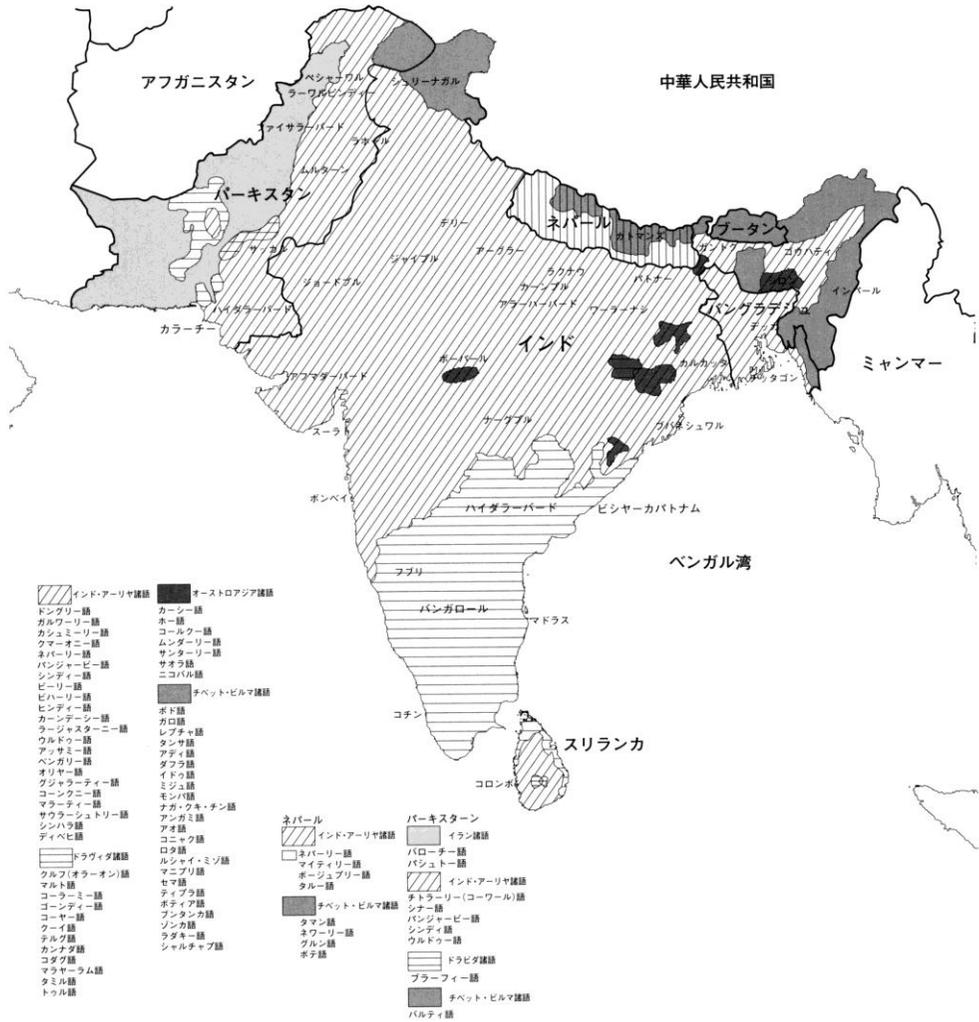
パンジャービー語について

ここからは言語的な説明に入りたいと思います。系統からいきますと、パンジャービー語はインド・ヨーロッパ語族のインド語派に属します。ここでインドの言語事情についておおざっぱに説明したいと思います。北インドの多くの地域、およびパキスタンの東部ではインド・ヨーロッパ語族のインド語派に分類される言語が話されています(図1参照)。またパキスタンの西部ではインド・ヨーロッパ語族のイラン語派に属する言語が話されています。インドでは人口の4分の3以上、パキスタンでは人口の約7割がインド語派の言語を話しています。一方南インドではドラヴィダ諸語という、まったく違う系統の言語が話されています。そのほかインドではオーストロ・アジア系の言語やチベット系の言語を母語とする人々もいます。一口にインド語派といっても、実に多くの言語があり、パンジャービー語やウルドゥー語もその中に含まれています。

話者人口で見ますと、パキスタン側でのパンジャービー語母語話者の数は約8000万人、インド側は約3000万人です。

パンジャービー語を表記する文字は2種類あり、1つがインド側で使われているグルムキー文字、もう1つがパキスタン側で使われているシャームキー文字です。図2の1がグルムキー文字です。インド系の文字で、左から右に書かれます。一方図2の2はシャームキー文字です。これはアラビア系の文字で、右から左に書かれます。アラビア文字は28文字ですが、ペルシア語ではアラビア語にない

言語地図



注：この図は「地図で知る東亜・南アジア」(平凡社、1994)を参考に、バークスタン周辺言語構成の概略を示したものです。

【図1】

地図出典：

萩田 博, 1996. アジア理解講座 1996 年度第 1 期 『「ウルドゥー文学を味わう」報告書』 国際交流基金アジアセンター.

音を表すために4文字加えられて32文字となりました。同様にしてウルドゥー語ではそれに3文字加えて35文字となり、シャームキー文字ではさらに1文字加えられて36文字となっています。

音について特徴的なのは声調で、パンジャービー語には高声調と低声調があります。声調は他のインド語派では普通みられません。たとえば、ウルドゥー語やヒンディー語で「馬」は *ghōrā* (ゴーラー) と発音します。パンジャービー語でも同じ単語を使うのですが、音が変化し、声調をとまなうようになります。そのため有声・有気音である *gh* が対応する無声・無気音の *k* になり、それに続く *ō* という長母音が低声調になります。

次にあいさつについて紹介したいと思います。

- | | | |
|---|------------------------|---------------|
| 1 | <i>assalām alaikum</i> | アッサラーム・アラェークム |
| 2 | <i>sat srī akāl</i> | サト・スリー・アカール |
| 3 | <i>namastē</i> | ナマステー |

1がイスラム教徒どうしのあいさつ、2はシーク教徒どうしのあいさつ、3はヒンドゥー教徒どうしのあいさつに使われる言葉です。このように宗教によってあいさつの言葉が異なるわけです。そうすると、たとえばヒンドゥー教徒とイスラム教徒はお互いにどのようなあいさつするのかということが当然疑問として浮かぶことと思いますが、そういうときは宗教的には中立である「ハロー」という英語が用いられたりします。

「パンジャービー語」の表記

- | | | |
|---|----------|--------|
| 1 | グルムキー文字 | ਪੰਜਾਬੀ |
| 2 | シャームキー文字 | پنجابی |

【図2】

パンジャービー語の歴史と言語状況

次に、パンジャービー語、あるいはパンジャーブ州でのパンジャービー語がどのような歴史をたどってきたのかを話したいと思います。パンジャーブは、ムガル帝国時代にはその版図に組み込まれていたのですが、ムガル朝が衰退するにつれて、色々な王国が出現します。その中で有力だったのが、シク教徒の人々が建てた王国です。そこでは公用語としてペルシア語が用いられていました。ちなみにペルシア語はムガル朝でも公用語でした。このように公用語としてはペルシア語が長い間力を持ち続けてきたのですが、イギリスによってパンジャーブが併合されると、言語に関する問題が持ち上がりました。行政、司法、教育などの分野で、現地語を使わなければならない状況が生じますが、その際にどの言語を採用するかというのがイギリス人たちによってかなり議論されました。これ以前に、北インドでイギリスが支配権を確立していった頃、ウルドゥー語が下位レベルで用いられていました。パンジャーブの統治にたずさわっていた英国人の官僚や現地人の下級公務員の人々には、ウルドゥー語を知っている人たちが多かったことから、パンジャーブでもウルドゥー語が用いられるようになりました。これに対して抵抗がなかったのかというと、少なくともイスラム教徒の中では抵抗があまりありませんでした。ウルドゥー語はアラビア系の文字を使った言語ですから、彼らにとって親しみのもてる文字でしたし、パンジャービー語を母語とする人にとってウルドゥー語は似かよっている部分が多く、あまり抵抗感がなかったものと考えられます。しかし、シク教徒の人たちは彼らの聖典を記述する文字でもあるグルムキー文字で教育を受けている人もいましたので、ウルドゥー語がパンジャーブで使われることに反対して、運動を起こしたりしていますが、大きな勢力となることはありませんでした。そのために、パンジャーブではイスラム教徒のみならず、ヒンドゥー教徒やシク教徒の人々もウルドゥー語の教育を受け、文学活動を行いました。たとえばムハンマド・イクバル（1878～1938）はパキスタンの建国を予言したと言われている詩人で、パキスタンでは知らない人はいないというほど有名な人物ですが、この人の母語はパンジャービー語です。しかし著作活動は主にウルドゥー語、ペルシア語で行いました。パンジャービー語を母語としていた著名なウルドゥー文学者としては、来日したこともある有名な詩人、ファイズ・アフマド・ファイズ（1911～1984）、小説家としてはサアードット・ハサン・マントー（1912～1955）、アフマド・ナディーム・カースミー

(1916～2006) といったイスラム教徒やヒンドゥー教徒であるクリシュン・チャンドル (1914～1977)、シク教徒であるラージェンダル・スィング・ベーディー (1915～1984) などがいます。こういう状況が生じたのはパンジャーブでの言語状況が背景となっています。私自身の体験ですが、デリーなどでは、シク教徒でタクシーの運転手をしている人が結構多いのですが、そういう人と世間話のついでに、「あなたのおじいさんはウルドゥー語を知っていませんでしたか？」と聞くと、「うちのおじいさんは読み書きはできたが、自分ではできない」という返事が返ってきたことが何回かあります。つまり、インド・パキスタン分離独立以前にパンジャーブでウルドゥー語で教育を受けている人々がかなりいたということです。最初にも話しましたが、私が大学に入ったときの外国人の先生がパンジャービー語が母語でありながら、ウルドゥー語を教えていたのにはこうした背景があるわけです。ここに挙げた小説家の作品は大同生命国際文化基金やめこんなどから、また詩集は花神社などから翻訳が出版されています (大同生命の本は市販されておりませんが、公共図書館などに収蔵されています) ので、是非ご一読ください。

ウルドゥー語について

パキスタンにおけるパンジャービー語の言語状況を考えるうえで、ウルドゥー語との相互関係は重要なので、ここでウルドゥー語について説明しておきたいと思います。ウルドゥー語は国家や民族の名前とは関連のない言語名です。日本で見かけるウルドゥー語としては「ナン」や「キーマ」「カバブ」などがあります。これらの単語は語源をたどっていくとペルシア語などにいきつくのですが、日本語にはインド料理を通して入ったものと言ってよいと思います。戦後に広まった日本のインド料理というのは主に北インドの料理でした。伝統的な北インドの料理に中央アジアやペルシアから来た人たちがもたらした食文化が融合してできたのが現代の北インド料理です。ウルドゥー語も同じような過程を経て成立しました。10世紀以降にイスラム教徒のインド進出が本格化しますが、その過程で、デリー周辺で話されていたインドの言語にイスラム教徒がもたらしたペルシア語 (このペルシア語にはすでにアラビア語の語彙が多数含まれていました) の語彙などが取り入れられてできあがったのがウルドゥー語なのです。母語話者はインド側の方が多く 6000 万人ほどいます。パキスタン側には 1000 万人ほどし

かいませんが、パキスタンではウルドゥー語が国語のため、全地域でウルドゥー語が通じます。パキスタンの人口は今1億6000万人くらいですが、その6割~7割がウルドゥー語が分かるのではないかと思います。

次に「ウルドゥー」という語彙についてお話ししたいと思います。もともとウルドゥー語は *zabān-e urdū-e muallā-e šājahānābād* (ザバーネ・ウルドゥー・エ・ムアッラー・エ・シャージャハーナーバード) という長い名前でした。エという音が何回か出てきますが、これはペルシア語からきたもので、英語の *of* にあたる、イザーファトというものです。アーバードというのは「町」という意味で、シャージャハーナーバードは「シャージャハーン（ムガル朝第5代皇帝）の町」デリーを指します。ムアッラーは「高貴な」、ウルドゥーは「陣営」、ザバーンは「言語」という意味で、全体としては「シャージャハーンの町の高貴な陣営の言葉」となります。これが短くなってウルドゥーが残りました。

ウルドゥー語とヒンディー語は文法的には同一言語と考えて差しつかえありません。ではどう異なっているかという、大きな違いとしては、文字があげられます。ウルドゥー語はアラビア系のウルドゥー文字を用い、ヒンディー語はインド系のナーガリー文字を用います。これはパンジャービー語でシャームキーとグルムキーという2つの文字が用いられているのと同様の関係になります。もう一つの大きな違いは語彙の問題です。例えば「文学」といった抽象的なものを表現するとき、ウルドゥー語の場合はペルシア語やアラビア語起源の語彙を使うことが多く、ヒンディー語の場合には、サンスクリット語などインド起源の語彙を使うことが多いのです。そのため、抽象的な問題を議論する場合に、両言語の使用の間でお互いの使う語彙を理解するのが困難になる場合があります。ただし、日常的な会話のレベルでは相互に十分理解ができる関係にあります。こうした問題は実はパンジャービー語にもありまして、特に分離独立してからその傾向が顕著なのですが、パキスタン側のパンジャービー語にはアラビア語やペルシア語起源の語彙が多く含まれたウルドゥーの語彙がかなり入っている一方で、インド側のパンジャービー語ではヒンディー語の影響もあり、サンスクリット語などインド起源の語彙がたくさん入っています。独立後何十年も経ち、そうした傾向が続いたために、用いる語彙にもかなりの変化が起きました。そのため、インド・パキスタン両国の人々が参加するパンジャービー語の会議が開かれた時に、発表される論文で、相手が理解するのに苦労する語彙を使ってしまったたりということがよく起こり、そうした傾向に苦言を呈する人もいます。

パキスタンのパンジャービー語

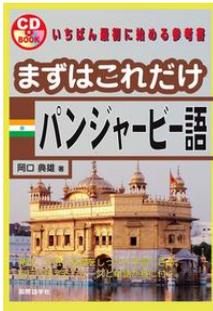
次に、分離独立後のパキスタンにおけるパンジャービー語についてお話ししたいと思います。現在パキスタン側でパンジャービー語は6年級からの選択科目となっています。それでは普通パンジャープ州では何語で教育を受けるかというところ、普通はウルドゥー語です。英語で学ぶ子弟もいますが、そうした人たちは比較的裕福な中流以上の階層に属しています。初等・中等教育の段階で、パンジャービー語が置かれている立場は高等教育にも反映されてきました。そのため、大学レベルでパンジャービー語を教えられるようになったのは1970年になってからで、パンジャープ大学のオリエンタル・カレッジにパンジャービー語学科が開設されました。最初のうちは左翼的な人たちがスタッフになり、パンジャービーの民族的な連帯を求めてインド側で使われているグルムキー文字も教えられていました。70年代の後半にズィアーウル・ハックというクーデターで実権を握った軍部出身の大統領が出て来て、イスラム化が推し進められると、教育にもその影響が及び、グルムキー文字は教えられなくなりました。現在、グルムキー文字が読める人はパキスタンにほとんどいないというのが実情です。ですから、パキスタンでパンジャービー語を読むというのはシャームキー文字で読むのが普通です。パンジャービー語の教科書ではウルドゥー語の教科書と同様にイスラム的なこと、パキスタン・ナショナリズム、印パ戦争でパキスタンのために活躍した人々をたたえるようなものも多く含まれています。インド側とパキスタン側では文字も違うし、分離独立時の騒乱で数十万人といわれる犠牲者が出たという歴史的背景や、上に紹介したような教科書の記述などから、たとえばシク教徒とイスラム教徒は今でも仲が悪いのではないかと思われるかもしれませんが、実はそうでもなく、パンジャービーとしてのアイデンティティを持ち、それを発展させようという意思を持った人々も多く存在します。そうした例の一つとしてたまたまYouTubeを見ているときに会ったビデオについて紹介したいと思います。故人となりましたが、Nusrat Fateh Ali Khan ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン(1948～1997)というパキスタンの非常に有名な歌手がいました。この人はカッターリーと呼ばれる宗教歌謡を歌った人として有名です。カッターリーは元来、イスラム神秘主義者の聖者廟で演奏されるものです。そのビデオにはイギリスでヌスラット・ファテ・アリー・ハーンが比較的小規模な場で公演したとき朗読した「Tere Qurban Pyare Muhammad (愛しきムハンマドよ、汝にこの身を捧ぐ)」と題された

預言者ムハンマドへの讃歌が紹介されています。聞いている人たちが繰り返される歌詞と次第に早くなっていくリズムで高揚していく様子がよくわかります。カッワリーはもともとイスラム教徒のための歌なのですが、そのビデオでは、赤いターバンをしたシーク教徒の人も大きく心を揺さぶられてゆく姿が映されています。こうした例に見られるように、パンジャーブは分割されてしまいましたが、パンジャービーとしてのアイデンティティは民衆の中で脈々と息づいているのではないかと、私は思っています。

インターネットでパンジャーブの文化関係のサイトを探そうとしても、いったいどこから検索を開始すればよいのか、見当もつかない人が多いだろうと思われる。そこで、ここではその入り口となるサイトについてご紹介します。それが Academy of the Punjab in North America 略称 APNA が運営しているサイトです。この団体はパンジャービー語・文学・文化の促進を提唱する非宗教的・非政治的団体です。アクセスするには「APNA」と「Punjabi」のキーワードで検索すればヒットします。このサイトではシャームキー文字とグルムキー文字が併用され、パンジャーブに関する英語やパンジャービー語の単行本、雑誌、論文などを読むことができます。悲恋物語であり、のちのイスラーム神秘主義詩で神への愛の比喩ともなった「Heer Ranjha (ヒールとラーンジャー)」に代表されるパンジャーブの恋愛物語やシャー・フサインやブッレー・シャーなど、パンジャーブを代表する神秘主義詩人の作品が網羅的に紹介されていることもこのサイトの素晴らしいところ。またこれらの作品の英訳も多く載っています。こうした作品が現代パキスタンのポップミュージックやロック音楽の歌詞などに影響を及ぼしていることは、パンジャーブの文化的伝統が現代の人々の心にもしっかりと根付いていることを示しています。このサイトにはこうした読み物だけでなく、音楽や映像も数多く紹介されていますので、様々な側面からパンジャーブの豊かな文化に関心を広げてゆくことができると思います。

パンジャービー語を知るための3冊

・*・...‡...・*・*・*・...‡...・*・*・*・...‡...・*・*



岡口典雄. 2010. 『まずはこれだけパンジャービー語』. 国際語学社.

表記にはインド側のグルムキー文字が用いられている。文字と発音、基本単語、文法の概略、よく使われる会話表現がコンパクトにまとめられている。カナによる発音表記も付され、初学者に親切である。

... * * ————— * * ...

萩田博. 1996. 『基礎パンジャービー語』. 大学書林.

表記にはパキスタン側のシャームキー文字が用いられている。同じ出版社から出ている鈴木斌著『基礎ウルドゥー語』の例文に対応するパンジャービー語の例文が使われているので、対照すると両言語の相違などが見えてくる。



... * * ————— * * ...



萩田博. 2002. 『基礎パンジャービー語読本』. 大学書林.

パンジャーブのスーフィー詩人などパンジャーブの文化について、シャームキー文字で書かれた平易な読み物が集められている。

... * * ————— * * ...

平成 23 年度 東京外国語大学オープンアカデミー
東京外国語大学語学研究所 企画
『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』
スندا語
2011 年 10 月 25 日 第 4 回
東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授
降幡 正志

はじめに

降幡と申します。今回はスندا語という言語について紹介したいと思います。配布資料は 2 種類あります。1 つがハンドアウトで 6 枚綴り、もう 1 つが「月刊言語」にかつて書いたエッセイです¹。

スندا語という言語について聞いたことがあるという方はいらっしゃいますでしょうか。(挙手した人に) どちらでお聞きになりましたか? (『世界のことば 141』で読みました) ハンドアウトの 3 枚目の参考文献のところにあるように、南山大学の森山先生という方が書かれています²。

スندا語という言語は、インドネシアの一地域で話されています。ですので、まずはインドネシアがどこにあるのか、どんな地域なのかなどについて、お話しします。それから、スندا語の話に先立って、インドネシア語の話をしてしたいと思います。

1-1. インドネシアについて

まずインドネシアの地域の概要ですが、こちらは簡単にしたいと思います。国名はインドネシア共和国で首都はジャカルタ、島が約 17,500 となっています。国土の面積はだいたい日本の 5 倍強あります。ちなみに国土は北緯 6 度 08 分から南緯 11 度 15 分、東経 94 度 45 分から 141 度 05 分に広がっています。

¹降幡正志。2002。「ことばというパスポート(20)スندا語」、『月刊言語』第 31 巻第 9 号。大修館書店。pp. 94-97。

²森山幹弘。2009。「スندا語」, 梶茂樹他編『事典 世界のことば 141』。大修館書店。pp. 126-129。

位置関係は、ハンドアウトの5枚目の地図で確認できます。まず上が日本とインドネシアの位置関係。下がインドネシアの位置関係。インドネシアは赤道の南北に広がっていることが分かります。特にメインの部分は赤道の南側に広がっています。気候は熱帯雨林気候で、人口は約2億4000万人と、日本の倍ほどの数を抱えています。

インドネシアでは、国籍を持つ人は宗教を一つ信仰していなければならないことになっています。法的に認められている宗教はまずイスラム教で90%弱。人口のほとんどがイスラム教徒といえますが、それだけではなく、キリスト教徒、仏教徒、ヒンドゥー教徒などもあります。ここでいうヒンドゥー教は、バリ・ヒンドゥー教で、バリ島およびその周辺で信仰されています。ヒンドゥーを宗教と書いていいのかという議論もあるのですが、インドネシアではバリ・ヒンドゥー教として宗教の一つに数えられています。また儒教も宗教ということになっています。

インドネシアを紹介する上でほぼ必ず出てくるのが「多様性の中の統一」というスローガンです。Bhinneka Tunggal Ikaというのがそれに当たりますが、これはインドネシア語ではなくサンスクリット語です。国章として、ヒンドゥー文化での想像上の鳥であるガルダが使われています。独立記念日は8月17日です。1945年のこの日に独立が宣言されました。つまり太平洋戦争が終わってわずか2日後に独立したことになります。その後オランダが攻めてきて独立戦争になっていて、名実ともに独立したと言えるのは1950年に入ってからなのですが、インドネシアの立場では独立したのは1945年となります。

1-2. インドネシア語について

次にインドネシア語について話したいと思います。インドネシア語は憲法上でインドネシアの国語として制定されています。したがって公の場ではインドネシア語を使うということになっています。なお、使われている地域で言うともう一ヶ国、東ティモールでも実用語となっています。東ティモールでは国語(national languages)、公用語(official languages)、実用語(working languages)の3種類が制定されています。まず国語はテトゥン語とその他の地域語。次に公用語としてテトゥン語およびポルトガル語。そして実用語としてインドネシア語と英語が憲法上定められています。2001年の言語の話者数をみるとテトゥン語が圧倒的に多いのですが、テトゥン語プラス他の言語など、他にもさまざまな状況があ

ります。そしてこの当時でいうとインドネシア語を使える人が約43%います。ここでおもしろいのは、公用語として定められているポルトガル語の話者がわずか5%であったということです。これはどういうことかと言うと、独立へと導いた指導者たちが、ポルトガルに留学したりといったエリート層であり、誤解を恐れずに言うと、半ば強引にポルトガル語を公用語にしたということになります。聞くところによると、現在東ティモールでは学校教育でポルトガル語を用いているそうです。したがって、この数字、すなわちポルトガル語の話者数はおそらくどんどん増えていくでしょう。一方で、インドネシア語の話者数はどんどん減っていくのではないかと思います。

インドネシア語の話者人口は、母語話者数として3000万人から6000万人、第2言語としての話者数として1億4000万人くらいということで、最大数として2億人となります。おそらく現時点ではもっといるだろうと思われれます。母語話者と第2言語としての話者数が2億人とすると、人口は2億4000万人ですから、かなりの割合になります。

インドネシア語の歴史的経緯についてお話しします。もともとムラユ語という言葉があり、インドネシア語はこのムラユ語のヴァリエーションのひとつとすることができます。西側にスマトラ島という島があり、その近くにマレー半島があります。ムラユ語はこの辺りで話されていましたが、マラッカ海峡という交易の中継点でこのムラユ語がいわゆるリング・フランカとして使われるようになりました。しかし、ただマラッカ海峡で用いられるだけではなく、交易が行なわれる中でどんどん広がり、現在のインドネシア地域の東側にも広まっていきました。これによってムラユ語を母語とする人たちの住む地域が東側にも多くあります。古い時代から交易用語として使われ、しかも歴史の中でそれが現在のインドネシア地域に幅広く散らばっていったのです。

その後1500年代にポルトガルが来たりスペインが来たりといういわゆる大航海時代があり、1600年代以降になると今度はオランダが来て、オランダ東インド会社が実質上インドネシア地域を支配することになります。オランダ東インド会社は1700年代末につぶれ、その後はオランダ政府が植民地として支配することになりますが、その植民地支配がおよそ300年続きました。1800年代の終わりごろからだんだんと民族意識が高まっていき、そのような民族意識の高まりの中でオランダ領東インドの枠組みを自らインドネシアと呼ぶようになります。インドネシアというのは「インドの島々」という意味で、「ネシア」はギリシャ語です。

このインドネシアというネーミング自体は 1850 年にイギリス人の弁護士が論文の中でオランダ領東インド地域を地理的に呼ぶときに使ったのが最初です。そしてそのネーミングを使って現在のインドネシア地域の人々は「インドネシア」と自らを呼ぶようになり、統一の枠組みを作りました。そして、かつてのムラユ語をインドネシア語というネーミングで呼び、統一言語として用いるようになりました。ハンドアウトにも記載しましたが、1928 年 10 月 28 日に第 2 回青年会議が開催され、その中で「青年の誓い」(Sumpah Pemuda) という宣言が採択されました。1 つめが「我々インドネシアの青年男女は 1 つの祖国インドネシアを承認する」、2 つめが「我々インドネシアの青年男女は 1 つの民族インドネシア民族を承認する」、3 つめが「我々インドネシアの青年男女は統一言語インドネシア語を尊重する」という 3 つの条文から成り立っています。インドネシア語という呼び方は公式に現れたのはこの時期、つまり 1928 年 10 月 28 日であるという問題ないと思います。ただし実態としてインドネシア語は、かつてはムラユ語という名前ではありましたが昔から存在していました。

インドネシア語はしばしば人工言語だと思われることもありますが、必ずしも人工言語ではなく、ムラユ語という自然言語がネーミングを変えているということになります。そしてインドネシアで用いられているということになります。もちろん、国語として整備をしていく中で、とりわけ書き言葉においては文法などを整理していった部分もあるなど、人為的な操作はありますけれど、もともとは自然言語であるということになります。

1-3. インドネシアの言語状況

インドネシアにはインドネシア語だけでなく数多くの言語が存在します。これらは地方語と呼んでいて、話者人口の多い順にピックアップをしていくと、まずジャワ語という言語があります。これが約 40%だと考えてください。そして今日これから話すスダ語が約 15%、それからジャワ島の東側のマドゥラ島で話されているマドゥラ語、ミナンカバウ語、ブギス語、バタック語、バンジャル語、バリ語となっています。たとえばバリ語の話者が 1.6%というのはたいした数ではなさそうにも思えますが、2 億 4000 万人のうちの 1.6%ですから、結構な数字ですよ。300 万人とかそれくらいでしょうか。ちなみにインドネシアの国内にいくつ言語があるかという、これは正直なところ分かりません。Ethnologue という

インターネットサイトがありますが、これをご覧になったことのある方はいらっしゃいますでしょうか。この中で Languages of Indonesia というページを見ると、インドネシアの言語は 726 あると書いてあります。しかし、これがすなわちインドネシアの言語数というわけではありません。なぜかと言うと、〇〇語の△△方言のようなことがあるからです。ただ少なくとも 600 とか 700 とか、それくらいはあると思われます。ここにあります公用語としてのインドネシア語についてですが、インドネシア語は憲法上国語（公用語）として規定されていて、学校教育などは全てインドネシア語で行なっているということです。子供が生まれたとき、それぞれの地域で使われている地方語をまず習得していきます。その後小学校に上がって、学校教育の中でインドネシア語を習っていくのです。生活として使う言語がそれぞれの地方語、それに対して公の場ではインドネシア語を使うという、いわば二重の言語使用というのがインドネシアでは当たり前ののです。実はこれも一概にはそうとも言えないという側面もあるのですが、今回は割愛します。基本的には、生活レベルで地方語、国の枠組みのレベルでインドネシア語となっているのです。

2-1. スンダ地方とスンダ語

スンダ地方も地方語としてスンダ語、公用語としてインドネシア語が使われる二重言語社会になっていきます。ここでは、まずスンダ地方について、次にスンダ語の特徴について、そして最後に多言語社会、二重言語社会の中でどのようなことが起きているのかということについて話したいと思います。

スンダ地方はジャワ島の西 3 分の 1 ほどで、西部ジャワ州とその西側のバンテン州にほぼ重なります。中心都市はバンドゥンで、西部ジャワ州の行政上の州都です。1955 年にアジア・アフリカ会議が行なわれたのがこのバンドゥンです。ジャワ島の他の部分はほとんどがジャワ語圏です。以前は西側の部分も含めて西部ジャワ州だったのですが、2001 年にバンテン州という独立した州になりました。独立のメリットとしてはここにスカルノハッタ国際空港というのがあり、かなりのお金が落ち、それで十分に独立してやっていけるのだろうと思われます。なお、北海岸に接し、西部ジャワ州とバンテン州に挟まれた形でジャカルタ首都特別州があり、DKI（デー・カー・イー）略されます。

さらに言語分布でおもしろい点として、先ほど西ジャワ州とバンテン州にほぼ

重なると言いましたが、「ほぼ」というのがミソになります。ジャワ島西3分の1であっても、北海岸沿いにジャワ語圏が広がっています。歴史的にはスダ地方に王国があったのですが、ジャワに滅ぼされたという経緯があり、実はスダ人はジャワ人を憎んでいる、などという話もあります。こうした経緯から、北海岸沿いがジャワ語圏で、また、ジャカルタ地域はどういう訳かここだけインドネシア語の一方言であるジャカルタ方言（ブタウィ方言）というインドネシア語のヴァリエーションが用いられる地域となっています。このように海以外はスダ語圏に囲まれているにも関わらず、文化圏、言語は違っています。

スダ語の話者人口はインドネシアの人口の15%くらいと先ほど言いましたが、おそらくだんだん減っているのではないかと思います。ただ、おそらく3000万人、少なく見積もって2500万人はいるだろうと思います。スダ語は陽には当たらないものの、大言語であるといえるでしょう。ちなみにジャワ語は約40%、8000万人から9000万人程度の話者人口を抱えています。母語話者数としてはスダ語がジャワ語に次いで2番目となっています。

宗教に関しては、スダ人は基本的にイスラム教徒です。ジャワ人の家庭では親がイスラム教徒であっても子どもがキリスト教徒になるということがあり得ます。ところがスダ地域では親がイスラム教徒だったら子どももイスラム教徒になるのが当たり前です。

スダ地方は文化的に非常に豊かで、割礼や結婚式などといった儀式や通過儀礼の際にお披露目の儀式をすることがよくあります。伝統的な音楽を演奏したり、踊りを踊ったり、しかもその伝統的な芸能を保持しているだけではなく、他の要素と融合させて新しい芸能を生み出すということもよくやっています。

ここでいくつかスダ地方の文化を紹介します。【図1】はシシガアン（sisingaan）という、割礼の際の伝統芸能です。獅子の神輿の上に少年が乗っています。これがスダ地方の伝統芸能の1つです。こうしたお披露目があるときにはスピーカーから音楽をがんと流し、そうするとそこで何かがあるということが分かります。その音を聞いて子どもたちがどこからともなく集まってきます。つまり、招いていない子どもも来るのですが、このように子どもが伝統芸能に触れる機会があるのです。招待状もやたらと配るのですが、招待された人は自身の都合のいい時間に会場を訪れ、まず主催者に挨拶をします。その後食事が用意されている場所に行って自分で料理を取り、席に座って食事をしながら踊りや音楽、会話を楽します。そして時間になったらまた主催者に挨拶して帰

ります。日常空間の中で非日常が行われるのもおもしろいと思います。



【図1】 シシガアン (sisingaan)

【図2】は、妊娠7ヶ月の儀式です。ざるを通して頭の上から水をかけ、一度水をかけるとその後羽織っている布を1枚取ります。それを7回繰り返し、7回目が終わったら、布の中で手元に抱えているヤシの実をポトンと落とします。これは、安産祈願を表しているのが明らかだと思います。



【図2】 妊娠7ヶ月の儀式

2-2. スンダ語の特徴(1) 敬語体系

次にスンダ語の特徴についてお話しします。スンダ語でまず目立つ特徴といえ
ば敬語体系です。これは日本語の話者であれば同じ概念なのでさほど違和感はない
かと思います。なぜスンダ語に敬語体系があるかなのですが、もともと敬語体
系は、王宮文化が非常に強かったジャワの文化圏で発生し、王宮文化の中で敬語
が発達し、それが近隣の他の言語圏にもいわば「輸出」されていきました。近隣
の言語というのはスンダ語やバリ語、マドゥラ語などです。

具体的に敬語使用というのがどうなっているかという、だいたい600の語あ
るいは概念に対して、尊敬語、謙讓語、丁寧語の入れ替えが起きます。通常語
(kasar) に対する対概念が尊敬語 (lemes) で、これらの二項対立が基本的な枠
組みなのですが、中には二項だけではなくもう一つ、謙讓語 (sedeng) を持つ組
み合わせもあります。通常語と謙讓語で別の語を使う場合もありますし、謙讓語
とが通常語と同じ場合もあり、このままではどうもきれいに説明しきれません。

【表1】をご覧ください。スンダ語のところでは通常語、謙讓語、尊敬語と3
つの枠を設けています。通常語というのは身内や友達と話したりする際に用いる
語のレベルといったものです。なお、参考までにインドネシア語も表中に記して
あります。

まず、父と母。これは日本語でも、「私の父は」「お父様は何をしていらっしゃる
いますか」というように文体によって使い分けがあります。「父」について、通
常語では bapa という語を使い、謙讓語では pun bapa と、通常語と同じ bapa が
使われています。一方、尊敬語は tuang rama という別の表現になります。「母」
を見てみると、通常語では indung、謙讓語では pun biang、尊敬語では tuang ibu
と、それぞれ異なる語を用います。

次に身体名称。「手」は、通常語と謙讓語で共通して leungeun、尊敬語で panangan。
「頭」は通常語と謙讓語で sirah、尊敬語で mastaka です。その下の欄にある「名
前」ですが、これは面白い枠組みになっています。通常語の ngaran の右側が2
段に分かれています。上の段は謙讓語として wasta、尊敬語として jenengan とい
う単語を使っています。下の段では、謙讓語と尊敬語で共通して nami となっ
ています。これはどういうことでしょうか。上の段は人の名前を表します。これに
対して下の段は一般に物の名前を表します。

次に、基本的な動作を表す語について見てみます。「行く」という単語があり
ますが、通常語では indit、謙讓語では mios、尊敬語では angkat になります。「来
る」も通常語では datang、謙讓語では dongkap、尊敬語では sumping となります。

「食べる」という語も通常語では *dahar*、謙讓語では *neda*、尊敬語では *tuang* となります。ところが次の「運ぶ」と「取る」。これも基本的な動作を表す単語と言ってよいと思いますが、通常語レベルではそれぞれ *mawa* と *nyokot* となっているのに対し、これらは謙讓語 *ngabantun* と尊敬語 *nyandak* が共通して用いられます。訳が分からなくなりそうですが、日本語で「お持ちになってください」というのは「パソコンが壊れてしまったので…」「ではどうぞお持ちになってください」という会話の中では「運ぶ」、「このパンフレットはいただけますか?」「どうぞお持ちになってください」の中では「取る」という意味ですね。つまり日本語でも、敬語語彙が複数の意味をカバーするということがあります。

次にその下の「送る」では通常語が *ngirim*、謙讓語と尊敬語のレベルでは共通して *ngintun* となっています。形容詞の「重い」は、通常語レベルでは *beurat* というのに対し、謙讓語と尊敬語のレベルでは共通して *abot* となります。助動詞の類ですが、「未来」を表すとき、通常語レベルでは *rék*、謙讓語と尊敬語のレベルでは *badé* となります。続いて形容詞の「良い」も通常語 *alus* に対し、謙讓語と尊敬語のレベルでは *saé* と言います。

このように、表を見ると、通常語と謙讓語が共通していたり、謙讓語と尊敬語が共通していたり、ばらばらですよね。敬語を分析する場合には、2つの軸があります。ひとつは「丁寧な文体かあるいは通常の文体か」という文体のレベル。もうひとつは、動作などについて、他者についてどのように敬意の表し方をするか。このような2つの軸から分析すると、まず「通常」に対して「丁寧」という文体の違いが、そもそも *kasar* (通常語) と *lemes* (尊敬語というより丁寧語) の対立になります。そして、それとは別の見方として、他者(相手あるいは第三者)に敬意をどう見せるかという枠組みの中で謙讓語と尊敬語を使い分けます。この2つの軸から分析することにより、敬語体系をよりすっきりと説明することができます。

そしてあと1つ、表に「シラミ」という語が残っています。シラミにも敬語があるんですね。シラミには尊敬語にだけ特別な語があります。ということは、別にシラミに敬意を払っているわけではなく、「尊敬すべき相手についているシラミ」ということです。この尊敬語はだんだん使われなくなっているという話もありますが、規範的な文法書の説明によると、「シラミ」にも尊敬語があるとされています。(聴講者「尊敬している人についているセミとかハエとかにも尊敬語があるのですか」) 全ての動物について調べているわけではないので分から

ないのですが、ほかには「馬」にも尊敬語がありました。少なくともこの2つについてはかつてはあったということです。なお、「鳥」や「鶏」などには特別な敬語はありません。

敬語の概念は日本語と共通しているので、日本語話者にしてみると語を覚えるのが面倒ではあっても、概念はたやすく理解できると思います。日本語話者にとって、スダ語の敬語は親近感を覚えるポイントとなるかもしれません。

2-3. スダ語の特徴(2) 動詞先導詞

次は、「動詞先導詞」(あるいは「動詞導入詞」)についてです。特定の動詞または形容詞と呼応関係にある語で、同じ文の中で特定の動作や状態を表すときに出てくる場合もあれば、単独で使われる場合もあります。たとえば *am* という語があり、これは *dahar* 「食べる」と緩やかな共起関係にあります。一つの文の中で *am dahar* ということもあれば *am* だけで独立して使われることもあります。また、*diuk* 「座る」については、*gek* という語が緩やかな共起関係にあつて、これも *gek diuk* と使う場合もあれば、*gek* を単独で使う場合もあります。あとは、*seuri* 「笑う」という単語がありますが、これにはいくつか呼応する語があるのですが、そのうちのひとつが *barakarak* で、これは「げらげら(笑う)」です。これらも、日本語でいうと「げらげら笑う」「すっくと立つ」というように表せますし、日本語で「すっくと」「げらげら」というとそれだけで状況が分かります。一方、*bodas* 「白い」には *ngeplak* という語が対応し、「真っ白い」という様態を表します。

さらに、単独で使う場合に、独立して動詞となる要素をつけるというのがあります。たとえば「チンする」という日本語がありますが、なんとなくスダ語も似ているという気がします。こうした日本語との対応は研究されてはいるのですが、十分ではなく、研究テーマとしては関心を呼びやすいと感じます。

2-4. スダ語の特徴(3) *téh* と *mah*

ハンドアウトで次に掲げた *téh* と *mah* についてですが、これらは堅苦しい言い方をするときトピック (topic : 主題) を表すときに用いられます。特に *mah* は「他者との対照」を表します。実はこれらは、要するに日本語の助詞「は」にあたります。必ず使うというわけではないのですが、スダ語の中ではよく出てきます。

たとえば *Abdi mah teu nanaon*. 「私は（私に関しては）構いません」、これは「他の人については分からないけど」という意味が含意されており、対比の意味が出てきます。日本語の「は」についても、「昨日は東京では雨は降りませんでした」というと、「東京では」とあるので他では雨が降ったかもしれない、「雨は」とあるので雪は降ったかもしれない、といったように対比の意味が出てきます。このように、*téh* と *mah* というのは日本語の助詞「は」に共通する部分があります。お手元にお配りしたエッセイにも、そうした話を書いています。

téh と *mah* に相当する語は標準的なインドネシア語やジャワ語などにはありません。ですが、先ほどジャカルタは別の言語圏であるとお話しましたが、*mah* というのはジャカルタの人たちはよくちよく使っています。ジャカルタ方言には本来ないのですが、便利だからという理由で使われることもあるのだそうです。本学に来たジャカルタっ子の留学生、国際シンポジウムに来たジャカルタ出身の研究者なども *mah* を使っていたのを耳にしたことがあります。便利な要素なんですね。また、もう一つ例文を挙げますと、*Teu kénging nyesep di dieu téh.* と *Teu kénging nyesep di dieu mah.* はともに「ここでは煙草を吸ってはいけません」ですが、*mah* を使うと他の場所では可というような意味が含まれます。

2-5. スダ語の特徴(4) 接中辞 -ar-

もう一つスダ語の特徴として挙げられるのが、接中辞という要素です。接頭辞、接尾辞は分かりやすいと思いますが、接中辞というのは単語の中に現れます。ただしどこにでも現れるのではなくて、語頭の子音とそれに続く母音の間に挟まれる形で用いられます。スダ語には3種類の接中辞があるのですが、うち2つはごく限られた語にしか現れません。それに対して、ハンドアウトに挙げている *-ar-* という接中辞は非常によく出て来て、また生産的です。この主な働きは複数を表すことです。例として、*budak* 「子供」がありますが、最初に子音 *b* とそれに続く母音 *u* の間に *-ar-* が入り、これが *barudak* 「子供たち」となります。次に「寝る」の赤ちゃん言葉で「ねんねする」を *bobo* と言いますが、これに *-ar-* がつくと *barobo* と、まるで別の単語のようになります。私も最初のうちは別の単語だと思い込むようにして別々に覚えていました。それから、*beresih* 「きれい」ですが、*-ar-* が挿入されると *bareresih* 「どれもこれもきれい」となります。次に *ulin* 「遊ぶ」ですが、これは *-ar-* がつくと *arulin* となります。語頭が母音の

場合、-ar-がつくと接頭辞のように見えますが、これについては語頭にゼロ子音があると設定して分析することにより、徹底して接中辞と見なすことができます。

さらに、この接中辞-ar-は2回出てきて強調の意味を表すことがあります。たとえば puguh 「もちろん」に-ar-を2回挿入すると pararuguh となり、これに否定語 teu が伴って teu pararuguh 「(なにもかも) まったくはつきりしない」となるのです。グーグル (Google) で-ar-が1回の teu paruguh と2回出てくる teu pararuguh のどちらが多いかを検索してみると、2回用いられている方が多かったです。ただ、以前は teu paruguh と teu pararuguh で出現数の差が大きかったのが、最近は縮まってきています。

3. インドネシアにおける多層言語社会の状況

ここまではスダ語について日本語と比べたときにどのような特徴があるかについて述べてきましたが、次に二重言語社会、あるいは多層言語社会、重層言語社会について話したいと思います。こうした社会で起きる言語現象のひとつとして、まずコードスイッチングというものがあります。コードスイッチングというのは、ある言語もしくは言語の1ヴァリエーションから何らかのきっかけにより違う言語あるいは違うヴァリエーションに移っていくという現象です。言語あるいは言語のヴァリエーションをまとめてコードというのですが、つまりはコードが切り替わるということです。

先ほども申しましたように、インドネシア語の公用語はインドネシア語です。つまり、スダ人であっても行政の話をするときには一般にインドネシア語を使います。けれども行政や公の話をしていても会話の参加者がスダ人だとスダ語になりやすい。そこにスダ語が分からない人が入るとインドネシア語に切り替わったりします。【表2】は、話し相手あるいは場面とどのような関係にあるかなど、どのようなきっかけでインドネシア語からスダ語へ、あるいはスダ語からインドネシア語へ切り替わるかについて論じている、1980年代に発表された論文から抜き出してまとめたものです。ここから、インドネシア語は業務的であったり現実的な話になる。あるいは、公共の場であったり、人間関係が近しくなったりするときに使われるようだとわかります。それに対してスダ語は、日常的な話をする、あるいは日常的な環境で会話をする、またはプライベートな話であったり、非常に近い人間関係の中で話をする、というようになります。実際

には色々な要因があるのですが。かつて、ジャカルタでタクシーに乗ったときに、私がスンダ語を話せると分かったスンダ人の運転手がスンダ語に切り替えたり、という経験もありますが、こうすると親密な感じが生まれます。

さらに、もう一つ切り替えのきっかけとして敬語体系があります。【表2】の9番目にあるように、年代が上の人が若い人と話すときに、若者の下手なスンダ語の敬語を聞いていてイライラするために、敬語のないインドネシア語に切り替えることがあります。さらに、インドネシア語というのは公用語というステータスが与えられています。つまり、権力を持っています。スンダ語だけでも、将来の仕事がほとんど期待できず、むしろインドネシア語を話した方が仕事が見つかります。このように、だんだんとスンダ語は使われなくなりつつあります。

2001年にスンダ文化国際会議が開催され、その会議のしめくりとして公式提案がなされました。その中のひとつに、私は耳を疑いました。スンダ語における謙譲語、尊敬語、丁寧語という3形態は複雑であり、若者のスンダ語離れにつながりやすいため、これを通常語と丁寧語の2つに簡素化するというのです。これはスンダ文化の国際会議ですから、スンダ文化をこよなく愛する人たちが主催する会議だったのに、このような提案がなされたのです。ただ、実情としてはまだこのまま、つまり簡素化は行なわれていないようです。

また、こんなことがありました。とても丁寧なスンダ語を使う人の話をします。身体部位の「歯」は、先ほどの「手」と同様に通常語と謙譲語が共通していて、尊敬語のみ異なっているのですが、自分の歯について、丁寧な言い方の中で、尊敬語を使ったのです。自分自身のことなので、本来は謙譲語を使うべきなのですが、本来は他の人のことにしか使えない尊敬語を、自分自身について使ったのです。

これ以外にも、いくつかの単語について通常語と謙譲語が共通していて、自分自身の事柄について尊敬語を使うという、つまり、通常語／謙譲語に対して尊敬語があるのが、通常語と丁寧語という対立、すなわち、尊敬語が丁寧語化しつつあるというプロセスがあるようです。日本語においても、ある語が丁寧語化しつつあります。それは何かというと、「いただく」です。「いただく」というのは謙譲語ですよ。これは丁寧語ではないはず。しかし「〇〇さんが△△していただきました」というような表現を、アナウンサーでさえもときどき使っています。また、NHKで「～拝見していただきます」と言っているのを耳にしたこともあります。

スンダ語話者のインドネシア語にはスンダ語の影響が見られます。先ほどの téh ですが、スンダ人はこれを時々インドネシア語にもつけてしまいます。スンダ人だけではなく、先ほども言いましたように、ジャカルタの人も mah をちょくちょく使うようになっていきます。

また、さまざまな語彙表現が地方語からインドネシア語に流入しています。スンダ語からインドネシア語に入ることはあまりないのですが、たとえば「昔」という意味で zaman dulu という表現がインドネシア語にあるにも関わらず、時々ですが、新聞の中でもスンダ語の baheula を使って zaman baheula と書かれています。スンダ語の baheula を使うと、とても昔という印象が出てくるように感じます。また、「居眠りする」はスンダ語で nundutan といいます。今まで何人かのスンダ人に nundutan をインドネシア語では何て言えばいいのかと聞いても、未だに明確な答えが返ってきただけでありません。そうすると、仕方なく使うということにもなります。

インドネシア語の中で地方語の語彙表現を使う場合、ごく一部のみにしか通じないか、あるいは多くの人々にいきわたり、場合によって全国的に広まるかということになります。ジャワ語の母語話者は 40% を占めています。つまり、人数の上では一大勢力となります。そのため実際にジャワ語起源の単語や表現がインドネシア語に流れ込んで会話の中で使われると、場合によってはスタンダードなインドネシア語の中でも使われるようになってくるということがあります。一方、ジャカルタは首都なので、情報の発信地となります。そのため、ジャカルタ方言は人数的にはジャワ語ほど多くなくても、色々な情報がジャカルタから発信されますが、言葉の使われ方も同様です。つまり、人数のマジョリティーであったり、あるいは首都という「中央」での権力としてのマジョリティーであったりすると、これらはインドネシア語全体に広まりやすいということになります。スンダ語というのはかなり限定的に用いられているということができます。

【表 1】スンダ語の敬語語彙の例

日本語	インドネシア語	スンダ語		
		通常語	謙讓語	尊敬語
父	ayah, bapak	bapa	pun bapa	tuang rama
母	ibu	indung	pun biang	tuang ibu
手	tangan	leungeun		panangan
頭	kepala	sirah		mastaka
名前	nama	ngaran	wasta	jenengan
			nami	
行く	pergi	indit	mios	angkat
来る	datang	datang	dongkap	sumping
食べる	makan	dahar	neda	tuang
運ぶ	membawa	mawa	ngabantun	nyandak
取る	mengambil	nyokot		
送る	mengirim	ngirim	ngintun	
重い	berat	beurat	abot	
【未来】	mau, akan	rék	badé	
良い	baik	alus	saé	
虱	kutu	kutu		puntang

【表2】スンダ語ーインドネシア語間のコードスイッチング³

	スンダ語 → インドネシア語	インドネシア語 → スンダ語
1.	スンダ語を話せない(話し慣れていない)と思われる第三者の登場	スンダ語を話せない(話し慣れていない)と思われる第三者の退場
2.	話題が技術的な内容に移行	話題が技術的な内容から技術的ではない内容に移行
3.	場面が家族的雰囲気から学校の雰囲気へ(くつろいだ雰囲気から業務的雰囲気へ, スンダ的雰囲気からインドネシア的雰囲気へ)	場面が学校の雰囲気から家族的雰囲気へ(業務的雰囲気からくつろいだ雰囲気・非業務的雰囲気へ, インドネシア的雰囲気からスンダ的雰囲気へ)
4.	「教養がある」ことを示したい, 田舎ではなく都会の間人であることを示したい	日常生活の中で日常的な話題について「同郷者」とスンダ語を話さないと違和感を感じる
5.	話し相手との社会的距離を置きたい(スンダ的雰囲気ー緊密, インドネシア的雰囲気ー緊密でない)	話し相手との社会的距離を近づけたい
6.	スンダ語の敬語表現の選択の義務を避けようとする	スンダ語の丁寧体で丁寧さを示したい, 通常体で親密さを示したい
7.	他の場面の会話を引用する	他の場面の会話を引用する
8.	インドネシア語にコードスイッチングした話し相手の影響を受ける	スンダ語にコードスイッチングした話し相手の影響を受ける
9.	より若い世代と会話する	同じ会話の状況・場面で, 年輩の世代が若い世代とインドネシア語で話した後年輩の世代と会話する, 若い世代が若い世代とインドネシア語で話した後年輩の世代と会話する
10.	公共の場所にいると感じる	公共の場ではなく家あるいは自身の場所にいると感じる
11.	母語が本当はスンダ語ではないことを示したい	スンダ語が第一言語である, または第一言語でなくてもスンダ語が流暢である(スンダ語を話したい)ことを示したい
12.	書き言葉や電話など, 他のメディアの使用へと移る	日常のメディアの使用に移る(電話などの道具を用いない話し言葉)

³ Widjajakusumah, H. 1986. “Alih Kode antara Bahasa Indonesia dan Bahasa Sunda di Masyarakat Dwibahasa Indonesia-Sunda di Kotamadya Bandung”, Halimurti Kridalaksana (ed.) *Pengembangan Ilmu Bahasa dan Pembinaan Bangsa*. Ende: Nusa Indah. 200-216. を参照。

コラム † ジャカルタとバンドゥンを結ぶ交通機関: 鉄道讃歌



バンドゥン駅

… * * * ————— * * * …

朝5時にジャカルタのガンビル駅を出発し、8時ごろに到着したバンドゥンの空気はいささか涼しく、心地よく感じた。あちこちから、かじりたてのスندا語が耳に入ってくる。……、1988年に留学のため訪れたバンドゥンの最初の印象である。

私にとっては、バンドゥンへ向かうにはジャカルタから鉄道に乗るといのがいまだに当たり前だ。留学当時は、鉄道パラヒアガン号でジャカルタとバンドゥンを何度となく往復し、それ以降も、少なくともジャカルタから向かう際にはほぼ必ず鉄道を使ってきた。

かつては鉄道が両市を結ぶ非常に重要な交通手段で、1日に10往復以上も走っていた。だが、高速道路が整備され、最近ではバスや「トラフェル(travel)」と呼ばれる乗合自動車が多数走るようになり便利になったため、鉄道の利用者が劇的に減り、鉄道の本数も減っていった。

それでも鉄道の味は忘れがたい。ディーゼル機関車に引かれる車両が、標高700

メートルのバンドゥンに向けて、およそ 170km の距離を 3 時間ほどかけて走る。途中、いくつかの深い谷間を、架けられた鉄橋で渡っていく。このときの景色は絶品だ。「まるで“カサンドラ・クロス”だ」と言った友人もいるが。通過する、あるいは対向車両との入れ違いで一時停車する駅では、近隣の子供たちが見送ってくれる。

つい先日、2012 年 12 月に、ジャワ島中部のジョグジャカルタから飛行機でバンドゥンへと向かった。かつて 1 年半も留学で暮らし、その後も何度か訪れているのに、実はバンドゥンのフセイン・サストラヌガラ空港に行ったのはこれが初めてであった。かつてはジャカルターバンドゥン間の空路もあったようだが、いずれにしろバンドゥンでは空港に縁がなかった。

その後、バンドゥンからジャカルタに向かう交通手段に悩んだ。どうしても鉄道に未練があるが、あれこれと考慮した挙げ句、トラフェルを使うことにした。トラフェルに乗って、やはり車窓からの景色は鉄道の方がはるかに素晴らしいと改めて感じた。

スンダ語を知るための3冊

・ * ・ ... † ... ・ * * * ・ ... † ... ・ * * * ・



森山幹弘. 1988. 『スンダ語会話』. 大学書林.

現在までに日本で出版されている、スンダ語に関する唯一の学習書。「基本的表現」「日常的表現」の章は、丁寧体と通常体の両方を、日本語と対照させて掲載。「実践会話」の章は、場面を想定した会話例となっている。また付録として語彙集もある。

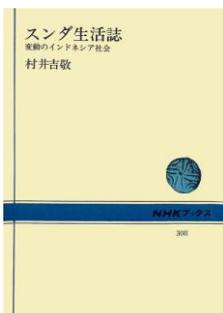
... * * ————— * * ...

降幡正志. 2003. 「多層な文化を支える言語」, 大角翠編著『少数言語をめぐる10の旅—フィールドワークの最前線から—』. 三省堂. pp. 206-236.

東京女子大学比較文化研究所が開講したチェーンレクチャー「比較文化—少数民族のことばと文化—」をもとにまとめられた10章からなる本に所収。スンダ語を「少数言語」と言えるのか、フィールドワークと呼ぶにはおこがましいのではないかなどと、様々な不安を抱えながらの執筆であった。



... * * ————— * * ...



村井吉敬. 1978. 『スンダ生活誌』(NHKブックス308). 日本放送協会.

筆者が1975年から2年間にわたりバンドゥンに留学し、本書はその間の調査や観察の記録となっている。単なる留学体験記にはとどまらず、筆者の深い洞察が多々織り込まれている。情報としては古いところもあるが、文章と内容の新鮮さは、当時と現在とを考える上でも大いに価値がある。

... * * ————— * * ...

平成 23 年度 東京外国語大学オープンアカデミー
東京外国語大学語学研究所 企画
『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』
ウクライナ語
2011 年 11 月 1 日 第 5 回
東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
中澤 英彦

1. はじめに

こんにちは、中澤です。日本でウクライナについて語ると必ず「あなたはロシア語を捨てた」と言われます。(明言しておきますが、私はロシア語を捨てていません。)なぜそう言われるかという、ウクライナに触れるや、誰しも恋の病にかかったようにウクライナファンになり、つい熱っぽく語ってしまうからです。

では、まずそのような「危険な」ウクライナと日本の係わりについてお話しします。私がウクライナ語を意識したのは大学時代で、本格的に勉強を始めたのはウクライナ独立期です。当時ウクライナというと、ああ、南米の国ねと言われたものでした。昔も今も知名度はいま一つです。係わりなぞ何もないように感じます。しかし、意外にあるのです。実は、日本女性は皆ある意味でウクライナの恩恵を受けているのです。日本国憲法は女性の権利の擁護を定めています。その憲法草案の作成に参画したのがウクライナ系アメリカ人ゴードン・ベアテ・シロタさんで、戦前の日本で育った彼女は、女性の権利擁護を強く主張し、それが受け入れられたのです。また、日本人に好まれるベートーベンの『運命』『田園』。ここにもウクライナとの繋がりが窺えます。この作品はラズモフスキー伯爵に献呈されています。ロシアがウクライナを併呑した際、最後のヘチマン(往時、ウクライナにおけるコサックの事実上の独立国の統領)がラズモフスキー家の人で、その子孫なのです。彼はロシア宮廷に仕えウィーン駐在大使を務め、ベートーベンをパトロンとして援助しました。その成果が『運命』や『田園』でした。

では日本人とウクライナ人との最初の出会いはどうだったのでしょうか。大黒屋光太夫(1751-1828)という名前をご存知の方も多いと思います。光太夫は伊勢白子の船頭で、乗船が難破してアリューシャン列島に漂着、その後苦節9年余りの後、ようやく帰国の夢を果たした人物です。彼は帰国願いのため、シベリアを

横断してはるばる女帝エカテリーナ二世に謁見を求めに行きました。しかし、当初、帰国が許されません。失意の底にいる光太夫を救ったのは女帝の側近でした。「帰国させてやったらどうか」と女帝に進言してくれ、帰国が許されたのです。その側近こそがウクライナ人（系）でした。民族の最初の出会いという殺し合いということもあるのに、日本とウクライナの出会いは、何と心温まる出会いでしょう。光太夫のもたらしたロシア語の知識は日露交渉史で第一級の資料とされています。しかし、キエフ大学のI. ボンダレンコ先生の研究によれば、あれはウクライナ系の人のロシア語だそうです。そうすると光太夫のロシア体験とは実は日本人初のウクライナ体験だったことになります。

では言語の問題に移ります。一般に言語の魅力とは、言語そのものの魅力、言語をとりまくレアリアの魅力です。たいがいの日本人はスラヴ語というとロシア語しか浮かびませんから、ロシア、ロシア語からスラヴ、スラヴ語をみる傾向があります。が、ウクライナ語を少しでも齧ってみるとこれはちょっと違うなという印象を受けます。同じスラヴ語に属しながらポーランド語とロシア語はあまりにも断絶が大きい、ミッシングリンクの存在を感じます。ウクライナ語を学んでみると、ミッシングリンクここにありと感じます。しかも、単なるリンクではなくスラヴ祖語に繋がる可能性のある黄金のリンクです。

ロシア語とウクライナ語は先祖を共にする非常に近い言語です。しかし、ウクライナ語と比べるなら、ロシア語は整形手術を受け、先祖の姿を失いつつある言語にみえます。ウクライナ語の方は本来の、先祖の姿をよくとどめていると言えます。ちなみにロシア語は屈折語の典型と間々言われますが、屈折語の要素をより多く残すのはウクライナ語です。ロシア語がカットされたダイヤモンドなら、ウクライナ語はダイヤモンドの原石です。ですから、スラヴ語の比較対照言語として非常におもしろいのです。さらに、後で見る歴史のため、ウクライナの言語、ウクライナ語は21世紀の現在、母語から国語への路をたどっています。国語化、標準語化を考える上で生きたデータを提供してくれます。例えるならば、火山学者の目の前で火山が噴火しているようなものです。文字通り千載一遇の機会です。しかし、日本はウクライナをすべてロシアの視点から見、このようなことに目をつぶっています。首都キーウが今もってロシア語名でキエフといわれるのがそのよい例です。ウクライナ語はロシア語に比べて未熟だとか、ロシア語が分かればウクライナ語は必要ないと断言する方もいないわけではありません。

本当にそうでしょうか。ウクライナには伝統も豊かな文化もあり（参照。人名

表)、それを作り出し、担う言語もあるのです。ただ知られていないだけです。1991年、ウクライナはソ連邦から完全に独立しました。世界はいまウクライナを発見したのです。少しウクライナ語をかじってみると、文献にない新事実が次から次に出てきます。発見に胸が躍ります。このように、いわば発見されたばかりのウクライナ語の魅力の一つはロマンをかきたてられることです。

1.1. ウクライナの自然環境

地図をご覧ください。ウクライナの小学校の地図帳によれば、面積はヨーロッパ最大で60.4万km²（除くロシアとある。）、大国です。広い国土はなだらかな平坦地です。南西部に風光明媚なカルパティア山脈があるものの、さほど高くはありません。日本人の目からは贅沢なほど自然に恵まれています。天災はまずありません。水害は多少あるかもしれませんが、ところが鉱物資源は豊かで、ほとんどあります。土壌（黒土）は豊かな実りをもたらし、つとに「ヨーロッパのパン籠」として知られています。21世紀、世界が食糧危機に陥る時、世界を救うのはウクライナだと言われるほどです。クリミアなど観光資源も豊かです（しかし、残念ながら日本には知られていない）。西欧、南欧、北欧へのアクセスもいい。「神様、不公平！」と思わず叫びたくなりますね。しかし、この豊かさ、地政学的位置が皮肉にもウクライナに不幸をもたらしたのです。

1.2. ウクライナの歴史的背景

ウクライナの位置を見ましょう（地図参照）。西にポーランド、東、北にロシアがあり、南が黒海、トルコです。この位置のためウクライナは、東西二大勢力の狭間におかれ、そのせめぎ合いの中で、独立を求める苦難の道を辿られました。ポーランド対トルコ・チュルク、、、アメリカ対ソ連、欧米対ロシア、、、数多くの抗争の中で、ウクライナに決定的影響を与えたのはポーランドとロシアの抗争ですので、それを軸にウクライナの歴史を簡単に述べます。

揺籃期、ウクライナに運命の女神は微笑みます。当時、ユーラシア大陸の西端では、バルト海周辺の北欧、西欧と文明の一大中心地ビザンツ世界とを結ぶ二大交易路が走っていました。その一つが、バルト海からドニエプル水系を辿る交易路で、その要衝にキエフが築かれ、それが後にキエフルーシ（ルーシ、キエフ公国）、ウクライナへと発展したのです。キエフルーシは繁栄を極め、キリスト教の国教化で有名なウラジミール聖公（在位980-1015）の時代、ヨーロッパ最大の

国でした。その息子ヤロスラフ賢公（在位 1019-1054）は積極的な婚姻政策をとり、スウェーデン、ノルウェー、ドイツ、フランス、ハンガリー、ビザンツの王家、王族と姻戚関係を結んでいます¹。ですからヨーロッパの現王室にはほとんどこの人の血が入っているといても過言ではありません。

しかし、運命の微笑みは永続きしません。十字軍の進出で地中海が交易路の中心に踊り出て、ルーシの地位は奪われます。折しもルーシは内紛で苦しみそこにモンゴルが侵入、さしも栄華を誇ったキエフも 1240 年に陥落します。以後ルーシの統一性は失われ、二大勢力の草刈り場、抗争の場と化しました。

その最大のものがポーランド対ロシアの抗争で、ポーランドにはボフダン・フメリヌィツキー（1595-1657）が抵抗し、ポーランドが弱体化し、反比例的に勢力を拡大したロシアにはイワン・マゼパ（1639-1709）が抵抗しました。

まず、ポーランドがキエフ公国の版図を次々に領有し、リトアニアと合併（1385 年クレヴォの合同、1569 年ルブリンの合同）、地域最強となります。肥沃かつ広大無辺のウクライナの地が放っておかれるはずがありません。両国に分割されてしまったのです（第一次ウクライナ分割）。その結果、ルーシでは教会スラヴ語（スラヴ世界初の文語、古代教会スラヴ語が現地の言語の特徴を取り入れてできたもの）、ルトゥ語（ピリニウス方言に由来するベラルーシ語）とプロスタモーヴァ（民衆語化したルトゥ語）、ラテン語などの多言語状態に至ります。

さて、ポーランド・リトアニアの支配下にあったとはいえ、豊穡の地ウクライナです。徐々に力を蓄え、再び隆盛をみるようになりました。しかし、ポーランドの統治は過酷で、治下のウクライナ民衆、コサックには不満が鬱積していました。この不満に火をつけ、対ポーランド反乱の火蓋を切ったのがフメリヌィツキーです。フメリヌィツキーは、愛する女性の拉致、息子殺害の被害を代官に訴え出たところ、なんと自分が投獄されてしまったのです。フメリヌィツキーは最強を誇ったポーランド軍を一時粉砕寸前まで追い詰め、ウクライナに事実上の独立国を成立させますが、政略に長けたポーランドに抑え込まれます。窮余の一策として彼は、モスクワ公国と同盟を結びます（1654 年のペレヤスラフ協定）。しかし、これは裏目に出ます。

ちなみにペレヤスラフ協定の交渉の際にウクライナ - ロシア語通訳が同席したそうです。すでに通訳なしにはウクライナ語、ロシア語の間の厳密な意志疎通は不可能だったことを意味します。

話を元に戻します。当時、モスクワはルーシ北東部で力をつけてきた新興国で、

フメリヌィツキーはあくまで対ポーランド共闘の協定・同盟のつもりでしたが、モスクワ側からはウクライナ保護領化の要請とされてしまいます。あまつさえモスクワは協定に反し、その後ポーランドとはかつてウクライナ民衆の反乱を何度も鎮圧しました。

フメリヌィツキーの闘争の意味は、政治的には、キエフルーシ以来蚕食され、独立を保てなかったウクライナに一時的とはいえ事実上の独立国家を成立させたこと、その後のモスクワ(後のロシア)への併合のきっかけを作ったことです。この時期からウクライナのモスクワ公国への隷属が始まります。モスクワとポーランドはウクライナを分割し、ドニエプル左岸をモスクワ、右岸(除くキエフ)をポーランドの勢力圏と取り決めました。1667年のことでした(アンドルソヴォの協定。第二次ウクライナ分割)。そのため、現在でも言語・文化・政治的に左岸はロシアの影響、右岸はポーランド(西欧)の影響を色濃く残しています。モスクワはさらに右岸ウクライナの併呑を図ります。モスクワが推進していた中央集権化、南下政策には豊穡かつ地政学的に有利なウクライナは不可欠だからです。これに抵抗したのがかのマゼパです。

マゼパは稀代の人物で、会う人会う人が、皆心を虜にされてしまったほどでした。彼を知るフランスの外交官の記録によれば、大変な教養の持ち主で何カ国語も自由にあやつったとのこと²。齢65過ぎにして16歳の娘にいちずに恋されたという一事から、人間的にいかにも魅力的な人だったか想像できますね。(このことは、ウクライナ人の血を引くチャイコフスキーのオペラ『マゼッパ』にロシア側の視点で描かれています。参照。フランツ・リスト交響詩『マゼッパ』)

さて、マゼパは、ピョートルの絶対の信頼を得て、右腕として南下政策、スウェーデン戦に加担し、コサック軍を率いて戦いました。ところが、中央集権化を強行するピョートルの鉄の意志の行く手が、ウクライナの滅亡であると悟るや、スウェーデン軍と手を組み、ピョートルに戦いを挑みます(1709年のポルタヴァの戦い)。しかし、ピョートルの宣伝戦と長期的政略の前にあえなく敗北します。ポルタヴァの戦いは世界史的な意味を持ち、北欧・東欧のその後を運命づけました。モスクワ公国は、このころからロシア(本来ウクライナ地域を指す名称)を名乗り、超大国の道を歩み出し、逆にスウェーデンは超大国への夢が破れ、そして、ウクライナは永続的にロシアの支配下に組み入れられたのでした。

ロシア治下の左岸ウクライナはロシアへ併呑(蔑称で小ロシアと呼ばれる)され、民族色の払拭が図られます。端的な例がウクライナ語禁止令です。1702年、

ウクライナ語書物の印刷・出版の禁止、1863年ウクライナ語の教科書、初級教科書類の禁止、1881年ウクライナ語劇上演禁止など、10回以上もウクライナ語禁止令が出されたのです。ロシア革命時の1918年に赤軍がキエフに入った時、ウクライナ語を話したというだけで銃殺された人がいるそうです。

一方ポーランド治下の右岸ウクライナでは、ポーランドの弱体化と3度にわたる同国の分割の度に、同時にウクライナも分割されました。

こうしてウクライナは左岸でも右岸でも、国家としては消滅し、さらに民族としての一体感も危ういものになる一方でした。ウクライナの人も物もウクライナとしては認められずロシア人、ロシアの物とされました。いわば匿名のウクライナしか許されなかったのです。ロシア・リアリズム文学の祖ゴーゴリ、ロシア帝国初の哲学者スコヴォロダー、ロシア料理の代表ボルシチ、名横綱大鵬の父はロシア人、、、枚挙にいとまがありません。これらはみなウクライナ人、ウクライナの物です。

この時、ウクライナ人としてのアイデンティティーをからくも支えたのは、かつてのキエフルーシの栄光の記憶、コサックの末裔としての誇り、とりわけ母語ウクライナ語への思いでした。帝政ロシア治下で、ポーランド語の使用が許されず苦しんだキュリー夫人の話はあまりにも有名です。しかし、ウクライナにはウクライナ人の数だけの「キュリー夫人」がいたのです。

ウクライナ人のウクライナ語への思い、ウクライナ独立への渴望は焼け付くほどのものがあります。

2.1. 言語をめぐる状況

長期にわたる異国の支配、とくにロシアの約350年にわたる支配の下で執拗に使用禁止令がだされた結果、ウクライナ語はおもに心ある知識階級の一部と地方、農村部でしか話されない言語となっていました。「諸民族の牢獄」からの解放を謳ったソ連時代（1922-1991）にも事態はほとんど改善されませんでした³。1920年代の一時期を除くと、ウクライナ語の使用は反革命的行為とされて、社会生活上著しい不利益を被り、公には使用が困難でした。1991年の独立後、ようやく名実ともウクライナが公用語とされ、現地では「失われた時を求めて」精力的にウクライナ語の教育、普及活動が行われています。

独立後20年余りを経た現在、現地における出版物調査によればすでにウクライナ語は国家語としての地位を確立しています⁴。この状況に対してロシア語話

者からの揺れ戻しがあり、2012年、新しい言語法が成立、一定の条件のもとに特定地域においては公用語としてロシア語（それ以外の言語も）も使用が許されるようになりました。

しかし、問題は山積しています。かつて家の、あるいは村の片隅で細々と話されたウクライナ語の前には、国家の言語としての規範統一（国語化）への課題が立ちほだかり、現在も標準語としての規範確立の過程が進行しています。またウクライナ語とロシア語が併用された結果、両言語の要素を混在させたことば *суржик* スルジク（混ぜ物のある不純な小麦の意味）が用いられることもあります。ウクライナ語における規範の確立は、非常に近い言語ロシア語との峻別という側面を持ちます。

2.2. 言語の歴史

スラヴ祖語（スラヴ諸語の共通の先祖）から分かれた古期ロシア語（キエフルーシで用いられた言語）は、8～14世紀の間に統一性を失い、ウクライナ語、ロシア語、ベラルーシ語と分かれました。ウクライナ語の特徴はすでに12世紀頃までには形成されていましたが、その後、上に見たように近隣諸国に支配され、世界史上例を見ないほど頻繁にウクライナ語使用禁止令がしかれました。このような禁令にもかかわらず、母語による創作活動を続けた作家I. コトリャレウシキ（1769-1838）や作家T. シェウチェンコ（1814-1861）、歴史家・作家P. クリシ（1819-1897）の作品および思想が、民衆の話し言葉を核として、教会スラヴ語の要素を取りこみ、彫琢して作り上げたのが現代ウクライナ語の基礎です。これが定説、つまりソ連時代の説です。

これに対して複数の研究者は異を唱えます（仮称「ウクライナ説」）。キエフ周辺にいたポリャーネ氏族などの言語がキエフルーシ成立とともに他の氏族の言語と融合して古期ロシア語が成立したが、キエフルーシ崩壊後、ウクライナ語、ロシア語、ベラルーシ語に分岐したというものです。つまり、もともと異なっていたという説です。まだそれほど多数の研究者が「ウクライナ説」を唱えているわけではありませんが、この説を裏付けるような事実もあります。

スラヴ人の居住地はカルパティア山脈北部で、ウクライナ北西部、ベラルーシ南部、ポーランド東部の地域と考えられています。なんとウクライナ北西部には、スラヴ祖語時代の語のアクセントが残っており、かつ語彙的にポリャーネ氏族などのものがウクライナ語に残っているというのです。語彙はともかくアクセント

というのはなかなか変わるものではなくかなり長期間保たれます。ですからあなたがちこの説を否定し去ることはできません。今後の研究に俟つところ大です。

3.1. ウクライナ語に関するデータ

下にウクライナ語の系統、現状についてデータを記します。

- 1) 系統 インド・ヨーロッパ語族スラヴ語派東スラヴグループの一つ（以後、適宜ウクライナ、ロシア、ポーランドを宇、露、波と略記）

スラヴ語派

東スラヴ語—ウクライナ語、ロシア語、ベラルーシ語

西スラヴ語—ポーランド語、カシューヴ語、チェック語、スロヴァキア語、
低地ソルブ語、高地ソルブ語

南スラヴ語—スロヴェニア語、クロアチア語、セルビア語、マケドニア語、
ブルガリア語

- 2) 主な使用地域 ウクライナ（公式名称）における公用語・教育言語
使用文字 キリール文字
- 3) 標準語、方言区分 北ウクライナ方言、（南）東ウクライナ方言、（南）西ウクライナ方言があり、標準語は（南）東ウクライナ方言に各地の要素を加味して形成される。
なお、ウクライナ語使用禁止令が部分的に解除されたのは1905年、完全かつ実質的に解かれたのは1991年の独立の時である。

- 4) 国勢調査による人口、宇語話者人口

スラヴ語中で第2（3）位（順位のずれは統計のずれによる）

1989年 総人口5170万人 宇人3740万人（72.3-72.7%）露人1140万人（22%）

2001年 総人口4846万人 宇人3770万人（77.8%）露人824万人（17%）

ウクライナ本国の話者人口約3680万人、その他、ロシア連邦（436万人）、カザフスタン、ポーランド、カナダや米国などの南北アメリカ、オーストラリアの話者合計は約4500万人。

3.2. ウクライナ語そのもの

では具体的な言語の問題に入ります。ウクライナに多大な影響を与えたロシアとポーランドの言語を適宜対照します。両言語は東スラヴ語と西スラヴ語で、ウ

クライナ語は東スラヴに属します。

ウクライナ語には他のスラヴ語や日本語、英語などと比べた場合様々な特徴がありますが、その中でいわゆる「音楽性」と形態、語彙、統語構造の二重性（多重性）に的を絞ってお話します。まず「音楽性」です。（以下ウクライナ語のラテン文字転写は簡易転写、アクセント（'）は必要な場合のみ付します。）

3.3. 音声と「音楽性」

1) 母音

/a//ɛ//i//ɨ//ɔ//u/の6つでロシア語より一つ多い。母音の長短が意味の区別をしない点はロシア語と同じです。

2) 子音

p, b, m, f, w, t/t', d/d', n/n', l/l', r/r', c/c', dz/dz', č, s/s', z/z', š, ž, j, dž, k, g, ch, h の32の子音がある。

（'）は、jや母音の iのように舌の中央部を硬口蓋に近づけて発音することを表します。

3) 語のアクセント

アクセントはストレスアクセントで、単語ごとに定まった位置にあります。アクセントのある音節の母音はない場合よりも強く、明瞭に、やや長めに発音されますが、長さの差はロシア語ほど大きくありません。そのためかアクセントのない音節の母音はロシア語ほど弱化しません。

宇 <u>про́шу</u>	どうぞ	宇 <u>прошу́</u>	頼みます	露 <u>прошу́</u>	頼みます
プロシュー		プロシュー		ブラシュー	

このようにロシア語と比べると差は微妙ですが、決定的に異なるのは同化（前後の音に合わせて音が変わること）の現象、母音連続と子音連続に対する対応の差です。

3.4. 同化

有声子音と無声子音の同化は、ロシア語でも、ポーランド語でも起こります。ところが、両者の間にあるウクライナ語にはこの同化の現象はありません（除く少数の例外）。下の下線部分を比べてください。

宇 <u>хлі́б</u>	露 <u>хле́б</u>	波 <u>chleb</u> — パン
フリーブ	フリェーブ	フレブ
宇 <u>соло́дкий</u>	露 <u>сла́дкий</u>	波 <u>słodki</u> — 甘い
ソロードクィ	スラートキー	スウォトキ

ウクライナ語が同化を起こさないのは、古い時代の語形*хлѣбъ(*xľěbъ)の「бъ」の影響を温存するためと考えられています。

3.5. 「音楽性」—子音および母音の連続を回避する傾向

スラヴ人はどの民族も母語を誇りにし、自分の母語が一番音楽性豊かと自慢します。言語の音楽性を定義するのは難しいですが、ロシアの A. ペシコフスキー (1878-1933) の言うように母音と子音の調和、比率であるとするなら、ウクライナ語はきわめて「音楽性」豊かな言語です。少なくとも音的にきわめて繊細な言語と言えます。以下 1) 2) 3) の様に、子音連続、母音連続を回避する傾向があるのです。

1) 子音連続なし:

宇 професор // 露 профессор 波 profesor — 教授
 プロフェッソル ブラフェーサル プロフェッソル

例外 接辞と語幹の場合のみ可能: годинник 時計
 ホディーンニク

2) В の発音 位置によって[u] [w] [v]の3通りの発音になる。

(1) [u] 語頭/音節の初めの В+子音:

вдома 家で вранці 朝に
 ウドーマ ウラーンツィ

そのため、時に文字通り удома と書かれることもある。
 ウドーマ

(2) [w] 母音+В+子音、語末/音節末の В:

Шевчénко シェウチェンコ(姓) був いた Київ キエフ
 シェウチェンコ ブーウ クィーウ

(3) [v] その他の位置:

вона 彼女 мова 言語 слово 語
 ヴォナー モーヴァ スローヴォ

3) i は母音の直後では й[j]に交替する:

він іде, вона йде. 彼は歩いている he is going
 ヴィン イデー ヴォナー イデー 彼女は歩いている she is going

この他にも前置詞などが母音、子音の調和を保つためにバリエーションを持ちます。例 з (英語の with にあたる前置詞) と із/ зі
 ズ イズ/ ズィ

ここで音声をお聞かせできないのが残念ですが、インターネットの検索に「Два кольори」二つの色 (お勧めの歌手 Квітка Цісик) と入れて、ウクライナで愛唱されるこの歌を聴いて下さい。楽しいクリスマスキャロル Добрий вечір тобі, пане

господарю (お勧めは macleon1976)、3 Різдом Христовим! (お勧めは olshe1977) などもお聞きください。

さて、人名表をご覧ください。ウクライナ人 (出身者) に著名な音楽家が目立ちます。いささか「身びいき」かもしれませんが、これは音的に繊細なウクライナ語の影響なのではと思われてなりません。ちなみに、ウクライナには人の心を打つしみじみとした民謡が多いのですが (例、Місяць на небі「空には月が」、お勧めは Дуєт бандуристок. Катерина Коврик)、ポップスの領域でもウクライナ人 (系) の活躍が知られています。

4. 二重性と言語の構造

ウクライナ語は、東スラヴ語ながら、西スラヴ語のポーランド語の影響を受けており、形態、語彙、統語構造における東西両スラヴ語の特徴を兼ね備え、いわば二重性を持ちます。換言すれば語彙、変化形、表現のバリエーションが豊富なのです。そのためかウクライナ人には外国語学習に秀でている人が目立つようです。

宇 спасибі	дякую	露спасибо	波Dziękuję	—有難う
スパシィービ	チャークユ	スパシィーバ	チェンクイエ(ン)	

このようにロシア語系の語もポーランド語系の語も使われます。さらに例は割愛しますが、時にはチュルク語系統の語も用いられます。

以下、二重性、多様性を形態、統語面から簡単に見ます。まず形態論です。

4.1. 形態面

4.1.1. 形態面

屈折語の特徴を色濃く残す：名詞類 (名詞、数詞、形容詞)、代名詞は、性 (男性、女性、中性)、数 (単数、複数)、格 (主格、対格、属格、所格、与格、具格、呼格) で変化。また人・動物 (活動体) / 物・こと (不活動体) の区別が格変化にあります。

ウクライナ語には「呼格 (呼びかけの形)」があります。ロシア語にも昔ありましたが、現代では使われなくなっています。下の变化表で університет「大学」の属格語尾 y はウクライナ語では男性名詞の約 35%にありますが、ロシア語では少数の名詞に残滓として残るのみです。このようにロシア語が失ったものをウク

ライナ語が保っていることが間々あります。ですからロシア語の謎がウクライナ語によって解ける場合も少なくありません。ウクライナ語はスラヴ語比較研究に資するところ大なのです。

さらに格形の多様性があります。ロシア語に比べるなら、ウクライナ語は格の形に異形（バリエーション）が豊富です。бацько バーチコ「父親」の所格と与格で/の右の形もあります。所格（例は割愛）は、バリエーションがかなり豊かで文体やニュアンスに応じて使い分けられます。

	父[男性、人] バーチコ	大学[男性、物] ウニヴェルスイテート	ママ[女性] マーマ	単語[中性、物] スローヴォ
主格	бацько	університет	мама	слово
対格	бацька	університет	маму	слово
属格	бацька	університету	мами	слова
所格	на бацькові/у	в університеті	на мамі	слові
与格	бацькові/у	університету/ові	мамі	слову
具格	бацьком	університетом	мамою	словом
呼格	бацьку	—	мамо	

4.1.2. 動詞

相（アスペクト）で2分されるのはロシア語、ポーランド語と同様ですが、両言語に比べると時制形態が豊かです。

例 日本語「読む」には不完了相 читати 完了相 прочитати が対応。
チターティ プロチターティ

時制は、過去形、現在形、未来形の3時制ですが、時には、大過去形も用いられ、未来形には合成形と総合形の2つがあります。

1) 現在形—主語の人称と数で6つの形に変化する。

	主語		不完了相不定詞	完了相不定詞
			читати	прочитати
単数	1 人称	я	читаю	прочитаю
	2 人称	ти	читаєш	прочитаєш
	3 人称	він	читає	прочитає
複数	1 人称	ми	читаємо	прочитаємо
	2 人称	ви	читаєте	прочитаєте
	3 人称	вони	читають	прочитають

2) 未来形—主語の人称と数で6つの形に変化する。

主語		不完了相			完了相
単数	1人称	я	читатиму	буду читати	完了相は現在形が、そのまま未来を意味するので、未来形はない。 参考「読んでしまう」
	2人称	ти	читатимеш	будеш читати	
	3人称	він	читатиме	буде читати	
複数	1人称	ми	читатимемо	будемо читати	
	2人称	ви	читатимете	будете читати	
	3人称	вони	читатимуть	будуть читати	
			総合未来形	合成未来形	

不完了相の動詞にのみ未来形があり、次の2つの形があります。(1)総合未来形 - 不完了相不定詞+ -му、-меш、-ме、-мемо、-мете、-муть (<ійняти) と(2)合成未来形 - 助動詞の変化形+不完了相不定詞。なお、ロシア語にはない総合未来形のほうがウクライナ語では好まれる傾向があります。

3) 過去形—主語の性と数で4つの形に変化する。

主語		不完了相		完了相
単数	男性	він	читав	прочитав
	女性	вона	читала	прочитала
数	中性	воно	читало	прочитало
複	3性とも	вони	читали	прочитали

大過去形—動詞の過去形+助動詞の過去形という大過去形が時に用いられることがあります。

Він ходив був. 彼は通った
ヴィーン ホディーウ ブーウ

4.2. 統語面

統語構造には数々の興味深い現象がありますが、その中で特に目立つものを述べます。

4.2.1. 数詞2, 3, 4と名詞の結合

名詞の形はポーランド語とロシア語と比べると興味深いずれを示します。

	名詞の取る数、格		
波語	複数主格		
宇語	男性名詞	単数属格	男性名詞一形は複数主格。 女性名詞、中性名詞一形、 アクセントも単数属格
	女性名詞	単数属格	
	中性名詞	単数属格	
露語	単数属格		

場合 написати 書き上げる) の不定詞語幹+to/но という文型です⁵。これはウクライナ語、ポーランド語にあり、ロシア語にはありません(方言には存在)。

ロシア語の文には主語があり、「誰かによって書かれた」と行為者の存在がすかに窺われるのですが、ウクライナ語には主語がなく、述語は全部中性形になっています。そのため「物語はずっと前に書かれていた」といういわば自然現象的叙述で、物語が自然にできてしまっているという感じになります。もちろん、必要があればウクライナ語でもロシア語の様に主語(主格名詞)を立てて表現することもできます。つまり、文型の面でも多様性が存在するのです。

概して主語を立てない非人称文的言い方は、文型で見る限り、英語<ロシア語<ウクライナ語<日本語の順で多くなります。私の素朴な言語生活の観察でもそう感じます。ですからおそらく日本文学の翻訳では、英語よりロシア語のほうが原文に近く、さらにウクライナ語は他の言語では訳出できない細やかな情感まで訳出する可能性があります。(そのためでしょうか、ウクライナ語には日本文学が次々に翻訳され、大の親日家が多く存在します。)

逆も真なりです。ウクライナ文学の邦訳でもウクライナ人の情感を訳出できる可能性があります。ウクライナには優れた作家、詩人が大勢いますが、日本語に翻訳されているのはタラス・シェウチェンコ(1814-1861)とレーシャ・ウクライーンカ(1871-1913)(有吉京子のバレエマンガ『スワン』は『森の詩』に取材)と一部の現代作家くらいです。当然一般の人には知られていません。残念なことです。これは、これまでウクライナが匿名で生きていたこと、従って真のウクライナを知る機会が皆無に等しかったことによると思われる。今後日本でウクライナの認知が進むにつれて事態が改善するとおおいに期待されます。

5. 終わりに

さて、ウクライナの魅力を十分に語れたかいささか心もとないですが、もし興味があれば、ぜひウクライナ語を学んで下さい(文献参照)。現状では日本語でウクライナ語を勉強するには2冊しかありません。しかし、英語やロシア語で書かれたウクライナ語学習書は沢山あります。辞典では、I. ボンダレンコ先生と天理大学の日野先生の『ウクライナ語のための日本語学習辞典』があります。日本人向けの辞典は今のところありませんが、私どもが現在作成中です。

それにしても、今は本当にウクライナ語を勉強するのが楽になりました。私の学習時に比べるとウクライナ語の規範が確立し、さらにインターネットでどこに

いても音声を聞くことが可能です。今は勉強しようと思えば独力でもできます。ウクライナ人はヨーロッパの侍かと感じるほど日本人と気質が似ており、厳しい歴史にもかかわらず明るくのびやかな性格の人が多いためです。光太夫のようにウクライナ人と心温まる出会い（現実でも書物の中でも）を経験して、一人でも多くの日本人がウクライナの魅力に触れ、ウクライナ語を学ぶようになってほしいものです。

参考文献

1. 黒川祐次. 2002. 『物語 ウクライナの歴史 ヨーロッパ最後の大国』中央公論新社. pp. 40-41
2. 黒川祐次. 2002. 『物語 ウクライナの歴史 ヨーロッパ最後の大国』中央公論新社. pp115.
3. 中澤英彦. 2001. 「戦間期のウクライナにおける言語政策」『平成10年度～平成12年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書—課題番号 10490014 研究課題『両大戦間期ロシアの政治と文化の歴史的考察』 pp. 73-88.
4. 中澤英彦. 2006. 「辞書編纂とウクライナ語—ヴェルナツキー図書館のウェブ上のカタログに見る—」『ユーラシアと日本』Area Studies Occasional Paper Series No.2 University of Tsukuba 筑波大学大学院地域研究科 pp. 162-180.
5. 中澤英彦. 2002. 「現代ウクライナ語における-**HO**, -**TO** 型無人称文について」『オスノーヴァ』01号. ウクライナ言語・文化研究会. pp. 31-44.

参照文献

- 「東スラヴ諸語比較対照研究」班. 1994. 『現代ウクライナ語対照文法』神戸市外国語大学外国学研究所

略年表

時代と背景	ドニエプル右岸	ドニエプル左岸, 莫
862年キエフ・ルーシ時代 (930-1036)ドニエプル時代 (1036-1169)ボルガ時代	教会スラヴ語 古期ルーシ語 ウラジーミル聖公 (?-1015) — 版図ヨーロッパ最大 989(8)年 キリスト教国教化	
12世紀	古期ルーシ語分化—12c 統一性失う	
13-14世紀 分領時代 モンゴルの侵入 1240年 貴府壊滅	ガリツィア・ヴォルィニ公国 (1199- 1340→理波に併合) 現字の9割の地域支配	ドニエプル中流,左岸に人口移動 A.Невский(1252-63)
1385年 クレヴォの合同 波・理の合同 第1次宇分割 1569年 ルブリンの合同 理公国・波王国と連合 1596年 プレストの合同	ガリツィア→波 ヴォルィニ他→理 Euthimios版 Ruth ルトウ語 教会スラヴ語 ベラルーシ語的 裁判,公文書 要素↓ →プロス =ラテン語 タ・モヴァ化 ガリツィア,ポドリエ, 16c 農奴急増 貴府,ヴォルィニ→波 波 コサック利用 ユニエイト誕生	15c 莫中心に北東露再 統一の動き活発 15c コサック出現
1632年 貴府モヒラ アカデミー創立	ザボロージェコサックの指導者 P:サハイダーチヌイ(-1622) 貴府再建に着手 再度宇文化の中心地に	
1654年 ベレヤスラフ協定	ボフダン・フメリニツキー, 東宇を拠点に対波蜂起,独立運動(1648-), 新興の莫と組む, 対等/ 隷属 →属国化	
1667年アンドルソヴォ (波と 莫)講和 第2次宇分割 1686年 波・莫恒久平和	ドニエプル右岸→波, ハイダマキ運動 波の要請 莫軍出動 (1734,1750,1756年)	左岸(含む貴府)→ 莫,莫の 自治国へトマン国家 自治権制限強化
1702年 1709年 ポルタヴァの戦い	1700年 波, コサック廃止 / ピョートル大帝 宇語書物の印刷・ スウェーデン軍 (カール 12 世)・マゼパ敗北 出版の禁止	
1772年 第1次波分割 1783年 エカテリーナ II世	ガリツィア→奥 その他→露 の一部 教会スラヴ語→露語 (上流階級口語) 地方行政,世俗言語=プロスタ・モヴァ	左岸 へトマン国家廃止,直轄 諸県に分割,農奴制=小露
1793年 第2次波分割	右岸 (除ポーシェヤ)の大半→露 ガリツィア → 奥・ハンガリー帝国	
1795年 第3次波分割	西北部 (ポーシェヤ, ポドリヤ, 18-19c 宇ルネサンス ヴォルィニ),理 → 露 1798年 宇初の文学作品 Котляревський	
1846(45-47)年	キリル・メトディオウス団結成	
1863年	露内相 P:ヴァルエフの禁 教科書, 初級読本類禁止	
1876(5)年 エムス勅令	宇語文化活動の中心, ガリツィア (奥支配) に移動	
1881年	宇語劇上演禁止 露語正書法(ярлик)のみ許可	
1905年	露帝国アカデミー, 宇語を独立の言語と認定	
1917年 ロシア革命 1918年	11月 宇国民共和国宣言, 英仏承認 12月 宇ソヴィエト共和国 宇科学アカデミー創立 1月 中央ラーダ, 宇の完全独立を宣言 11月 西宇国民共和国成立 12月 貴府, 宇国民共和国復活	
1919年	1月 東西宇共和国合併 8月 サンジェルマン条約	
1922年	ウクライナソビエト社会主義共和国成立	
1927年	ハリコフにおける正書法会議 28年 農業集団化	
1930年代 非宇化	32-33年 飢饉 中期 吟遊詩人虐殺 39年3月15日 カルパト・宇独立宣言	
1945年2月 ヤルタ会談	41年6月 ドイツ占領下リヴィウで独立宣言, 東ガリツィア→ソ連・宇	

1989年10月28日	字言語法制定, 91年1月施行 公用語化
1991年8月24日	字最高会議独立宣言, 12月8日ソ連邦解体
2004年12月	オレンジ革命 Помаранчева революція 三代 Віктор Андрійович Ющенко
2010年2月25日	四代大統領 Віктор Федорович Янукович

表記は露語式 略記号の意味 (斜字のみ 中澤考案)

字=ウクライナ 填=オーストリア 波=ポーランド 理=リトアニア 貴府=キーウ/キエフ 莫=モスクワ
 →波, ポーランドの支配・勢力下に入ること
 年号の下線は説明の下線部分の年号と対応

Україна ウクライナ



地図出典：

中澤英彦, 2013. 『ニューエクスプレス ウクライナ語』白水社.
 なお地名はウクライナ語表記と () 内はロシア語表記

1. 文字

宇語 Українська абетка (алфавіт)

露語 Русский алфавит

1	А а	a	18	Н н	n	1	А а	a	18	Р р	r
2	Б б	b	19	О о	o	2	Б б	b	19	С с	s
3	В в	v	20	П п	p	3	В в	v	20	Т т	t
4	Г г	h	21	Р р	r	4	Г г	g	21	У у	u
5	Ґ ґ	g	22	С с	s	5	Д д	d	22	Ф ф	f
6	Д д	d	23	Т т	t	6	Е е	je	23	Х х	x(kh)
7	Е е	e	24	У у	u	7	Є є	jo	24	Ц ц	c(ts)
8	Є є	je	25	Ф ф	f	8	Ж ж	ž(zh)	25	Ч ч	č(ch)
9	Ж ж	ž(zh)	26	Х х	x(kh)	9	З з	z	26	Ш ш	š(sh)
10	З з	z	27	Ц ц	c(ts)	10	И и	i	27	Щ щ	šč(shch)
11	И и	y	28	Ч ч	č(ch)	11	Й й	j	28	Ь ь	
12	І і	i	29	Ш ш	š(sh)	12	К к	k	29	Ы ы	y
13	Ї ї	ji(i)	30	Щ щ	šč(shch)	13	Л л	l	30	Ь ь	'
14	Й й	j	31	Ь ь	'	14	М м	m	31	Э э	e
15	К к	k	32	Ю ю	ju(iu)	15	Н н	n	32	Ю ю	ju(iu)
16	Л л	l	33	Я я	ja(ia)	16	О о	o	33	Я я	ja(ia)
17	М м	m		'	"	17	П п	p			

ラテン文字への翻字法

2. 参考文献

書名	著者	出版社	出版年	レベル
I 学習書				
ニューエクスプレス ウクライナ語	中澤英彦	白水社	2013 第三刷	入門初級
Ukrainian phrasebook	Bekh, Olena 他	Lonely Planet Publications	1997	入門初級
Colloquial Ukrainian	Press I.他	Routledge	1994	入門初級
ウクライナ語入門	中井和夫	大学書林	1991	入門初級
Modern Ukrainian	Humesky A.	The Canadian Institute of Ukrainian Studies Press	1980	入門中級
II 辞典・語彙集類				
ウクライナ語のための日 本語学習辞典	ボンダレンコ I, 日野貴夫他	アリテルナティーヴ イ	1998	入門中級
現代ウクライナ語語彙集	ウクライナ言 語・文化研究会編	東京外国語大学語学 教育研究協議会	1997	入門初級
Російсько-Український/ Українсько-російський словник. 8-ме видання	Ганич Д.И.他	A.C.K.	2000	中級上級
Українсько-російський словник 7-е видання	Їжакевич Г.П.他	Наукова думка	2000	中級上級
Українсько-Англійський Словник	Andrusyshen C.H. 他	University of Toronto Press	1957	中級上級

人名表 ♪ 主なウクライナゆかりの人々 ♪

ウクライナ人 (系)

ニコライ・ゴーゴリ (1809-52)	タラス・シェフチェンコ (1814-61)	レーシャ・ウクラインカ他作家多数
グリゴリー・スコヴォロダ (1722-94)		放浪哲学者
ミハイル・グリーンカ (1804-57)		ロシア古典派音楽の祖『ルスランとリュドミラ』
アンディ・ウォーホル (1928-1987)		東スロヴァキア出身者の子、米国ポップ・アートの代表的画家
イゴール・シニコフスキー (1889-1972)		ヘリコプターの実用化に貢献
ジョージ・ガモフ (1904-68)		物理学者、宇宙創生のビッグ・バン理論提唱、DNA の先駆的研究
エフゲニー・エフトシエンコ (1933-)		イルクーツク出身、『バービー・ヤール』 (1816)
ピョートル・チャイコフスキー (1840-93)		祖父はウクライナの作曲家
ニコライ・オストロフスキー (1904-36)		作家『鋼鉄はいかにきたえられたか』

ロシア人 (系)

イリヤ・レーピン (1844-1930)		画家『ヴォルガの舟曳き人夫』
セルゲイ・コロリョフ (1907-66)		宇宙ロケットの打ち上げの最大の貢献者
セルゲイ・プロコフィエフ (1891-1953)		ポルタヴァ生まれ。バレエ組曲『ドニエプルの岸辺で』
アレクセイ・トルストイ (1817-75)		作家。『白銀公爵』
ニコライ・ベルジャエフ (1874-1948)		思想家。キエフ生まれ。
ミハイル・ブルガーコフ (1891-1940)		作家。キエフ生まれ。『巨匠とマルガリータ』『白衛軍』

ポーランド・ウクライナ人 (系)

カジミール・マレーヴィッチ (1878-1935)		画家。キエフ生まれ、教育を受ける。
---------------------------	--	-------------------

ポーランド人 (系) 他多数

ヴァツラフ・ニジンスキー (1890-1950)		舞踏家
ジョゼフ・コンラッド (1857-1924)		20世紀初頭を代表する英国作家

ユダヤ人 (系) 西北ウクライナは「ユダヤ人の故郷」、ユダヤ人作家の故地

シャローム・アレイヘム (1859 - 1916)		『牛乳屋テヴィエ』『屋根の上のバイオリン弾き』の原作者
---------------------------	--	-----------------------------

イサーク・バーベリ (1894-1941/40?)		作家。オデッサ生まれ。『騎兵隊』
イリヤ・エレンブルグ (1891-1967)		作家。キエフ生まれ
ウラディミール・ホロヴィッツ (1903-1989)		ピアニスト。キエフ生まれ。
アイザック・スターン (1920-2001)		右岸クレメニッツ生まれ。ヴァイオリニスト
ダヴィッド・オイストラフ (1908-1974)		オデッサ生まれ。ヴァイオリニスト
ナタン・ミルスタイン (1904-92)		ヴァイオリニスト
エミール・ギレリス (1915-85)		ピアニスト
イリア・メーチニコフ (1845-1916)		細菌学者 免疫学創始者 ノーベル生理学・医学賞
セルマン・ワクスマン (1888-1973)		抗生物質ストレプトマイシン発見。ノーベル生理学・医学賞

エーミール・フランツォース (1848-1904)		ガリチア生まれ、チェルノヴツェで教育
ザッハ・マズッホ (1836 - 1895)		マズヒズムの名の元祖 ガリチアを舞台とする小説
ゴールド・メーア (1898-1978)		イスラエル元首相

ドイツ人 (系)

スヴァトスラフ・リヒテル (1915-97)		ピアニスト
------------------------	--	-------

ギリシャ人 (系)

アルヒーブ・クインジ (1824-1910)		画家『ウクライナの夕べ』
------------------------	--	--------------

アルメニヤ人 (系)

イワン・アイヴァヅフスキー (1817-1900)		海洋画家「第九の怒濤」
アンナ・アフマートヴァ (1889-1966)		詩人。キエフで教育を受ける。詩人としてデビュー

コラム 十

ああ、ウクライナ料理！



チョウザメが待っている！

… * * * ————— * * * …

料理をするくらいなら死ぬ方を選ぶ、これが私の人生哲学。男子たるもの食事と衣服にこだわるなという躰けを厳しく受けた私の信条である。

ところが、本場のウクライナ料理だけは別で、また食べたい、いやできれば作ってみたいのである。

風土、感性、味覚、歴史の結晶が民族の料理である。数年間肥料いらずでも作物が実り、手に取るとほのかな芳香がする豊かな黒土とウクライナ人の感性、繊細な味覚が、外国文化（統治）の下での何百年もの厳しい修行時代を経て完成させたもの、それがウクライナ料理である。不味かろうはずがない。不味いといった日本人にはあったことがない。

ロシアでは、食べ物に「ウクライナの」という形容詞がつくと、おいしいものと相場がきまっている。ロシア人にとってもウクライナ料理はおいしいのだ。



かわいいメニュー

代表は、ボルシチ。これは家庭ごとにレシピがあり、数十種類にもなる。ボルシチはウクライナが本家本元。さらにワレニキ（リンゴ、桜んぼなどの様々な具が入ったいわば水餃子）、キエフ風チキンカツレツ、キャベツ料理のゴルブツイ、豚の脂身の塩漬けサーロなどおいしい料理が目白押し。いやいや、手の込んだ料理でなくとも野菜、パンがまたおいしい。さすがウクライナはヨーロッパのパン籠の名にふさわしい。

しかし、ご用心。フランスの文豪バルザックはウクライナの女性に恋し結婚。帰仏後ほどなく死んでしまった。ことによったらウクライナ料理のうまさに殺されたのかもしれない。むむ一、料理は作らなくとも作ってもらっても死ぬことになるのか。食べるべきか止めるべきか悩みはつきない。ああ、ウクライナ料理。

ウクライナを知るための3冊

・*・...‡...・*・*・*・...‡...・*・*・*



黒川祐次. 2002. 『物語 ウクライナの歴史 ヨーロッパ最後の大国』. 中央公論新社.

ウクライナへの愛に満ちた名著です。仏語と宇語に堪能な外交官の視点から、古代より 2001 年までのウクライナを多角的に描写。浩瀚な資料に基づく記述は客観的かつ名文。読ませます。この一冊でウクライナ通、ウクライナ愛好者になること間違いなし。

... * ————— * ...

小川万海子. 2011. 『ウクライナの発見 ポーランド文学・美術 19 世紀』. 藤原書店.

ポーランド・ロマン主義の源泉となったウクライナの魅力を余すところなく見事な筆致で描く感動の力作。ポーランド美術、文学の造詣の深さとウクライナに対する憧憬、知識が見事に調和した描写は詩想と発見に満ちており、感動のまま最後の頁まで進んでしまう。



... * ————— * ...

2013年
刊行予定

末澤恵美他. 2013. 『ウクライナを知るための 70 章』. 明石書店.

一般読者にもわかりやすいウクライナの総合的な辞典、便覧。ロシアや他国の視点ではなく、専門家がウクライナを直接観察しあらゆる分野を詳細に説明、ウクライナの研究・学習の出発点となり、経路点であり、座右の書となる事典。

... * ————— * ...

平成 23 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』

アストゥリアス語

2011 年 11 月 8 日 第 6 回

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

黒澤 直俊

1. イベリア半島の諸言語

私はポルトガル語が専門で、普段はポルトガル語を教えながら、ポルトガル語を中心に言葉の歴史を研究しています。今日の話は、そこからは少しずれていきます。今回の講座では最初にロマンシュ語というのがありましたが、これからお話しするアストゥリアス語も遡れば同じ系統に属する言語です。ロマンス語と呼ばれる、ヨーロッパの地中海地域に分布しているラテン語から変化した言語です。スペイン西北部のアストゥリアス自治州を中心とする地域で話されています。イベリア半島は、国としてはスペインとポルトガルに分かれています。言葉の上では多言語地域です。西から主なものだけでも見ていくと、ポルトガルのポルトガル語と、そして、ちょうどその真北にあたるスペインのガリシア地方のガリシア語、これはこの地域の公用語のひとつですが、言語学ではこの西側の帯状の地域をガリシア・ポルトガル語言語領域としてひとまとめにして扱います。私が研究の中心にしているのはこの地域です。言語学的にかなりの特徴を共有し、歴史的に十三世紀あたりまで遡ると、この2つの言語の差はとても小さくなります。現代でもガリシア語とポルトガル語ではネイティブスピーカー同士のコミュニケーションにはほとんど問題がありません。もちろん、かなりの差異が話し言葉でも認められますし、書き言葉の正字法も異なります。これは、歴史的な経緯やガリシア地方がスペイン語を公用語とする地域の一部であることと関係があります。スペインは国全体の公用語はスペイン語ですが、地域公用語として他の言語を平行して使っている地域があります。地中海側のカタロニア語は有名です。方言差があることから、バレンシア語との2つの言語を主張する人もいます。カタロニア語は中世以来の文学伝統を持つ、学習者の多い重要な言語で、カタロニ

ア語の日刊紙を擁しているだけでなく、複数のテレビやラジオがカタロニア語だけで放送しています。また、言語学では比較的有名な地域ですが、北のフランスとの国境に近い地域にフランス側とまたがって分布しているバスク語があります。この言語は系統が不明で孤立した言語とされています。バスク語以外のイベリア半島の言語や方言はすべてラテン語に起源するロマンス語です。実は、バスク地方はバスク語よりも他の政治的な事情からよく知られているのかもしれませんが、反対側のポルトガルのちょうど真北にあたるガリシア自治州のガリシア語についてはすでに触れましたが、これはむしろポルトガル語に近い言語です。それから、当然のことですが、スペイン語があります。スペイン語が方言として分布している地域はイベリア半島の中央部をほぼ三角形にしたような地域です。もともと分布していたのがカスティーリャ地方を中心とするのでカスティーリャ語と呼ばれることもあります。さらに、カタロニア語とスペイン語にはさまれるような形で、アラゴン地方のアラゴン語というのがあります。中世にはアラゴン王国というのがありましたが、現在ではこの言語は話し手の数が減っていて、あまり勢いがないようです。言語的には、カタロニア語とスペイン語の中間的特徴を示します。

そこで今日これからお話するのは、半島北部中央、やや西よりのアストゥリアス自治州を中心に、公用語にはなっていないものの、保護対象言語として、そして近年では言語使用法という州の法律で使用が奨励されている言語です。現地の学校では選択科目としてアストゥリアス語を学習することができます。現在、州政府とオヴィエ



ド大学が共同して設立しているアストゥリアス言語アカデミーを中心として規範の整備や教育、研究などが行われ、地域の公用語にすることを要求している運動があります。1980年代以降は文学などもかなり盛んです。この言語は十九世紀以来の伝統的なスペイン言語学ではレオン語とも呼ばれ、中心的な方言の変種では、この地域のことを Asturies (スペイン語では Asturias) と言うため、日本でもアストゥリエス語と呼ぶ人もいます。もっとも、「アストゥリエス語」内部の方言によってはアストゥリアスでよい場合もあり、スペイン語を通じて主

に知られている言語でもあるので、ここでは細かいことは言わずアストゥリアス語と呼んでおくことにします。系統的には、スペイン語、つまりカスティーリャ語とガリシア・ポルトガル語の中間に位置する言語です。言語学では、このアストゥリアス語と、カスティーリャ・レオン州のレオン語、ポルトガル北東端部のミランダ語などを合わせてアストゥリアス・レオン(諸)語とか、アストロレオン語などと呼んでいます。現在、これらの言語は地域的にはつながっていませんが、かつては連続していたと考えられます。中世にはアストゥリアス王国、のちにレオン王国というのがあり、十三世紀頃までは有力な存在でした。スペインでは現地の人や研究者の間で、このことばは言語か方言か、つまり独立した言語なのか、それともスペイン語とガリシア語の間の移行的な変種で独立性が低い言語なのかといった論争があります。スペイン王立アカデミーに近い立場は、アストゥリアス語は方言で、なぜならばアストゥリアス地方の伝統的な話者は、この方言からスペイン語との間を運用上場面に応じて漸進的に使い分け、その間には断絶がなく、言語的独立性が低いとしています。他方、独立した言語であるとされるガリシア語とはこのような連続性は感じられない、これはガリシア語は母音が7つの言語であるのに対し、アストゥリアス語やスペイン語は五母音で、七母音体系と五母音体系の言語の間には明らかな断絶があるが、アストゥリアス語とスペイン語のあいだはそうではなく、方言的なちがいがいしか存在しないとしています。さらに、アストゥリアス語には共通語となるような確立された規範変種がなく、細分化された諸方言の集合体で、全体が単に半島北部の方言連続体の一部をなしているだけであるという指摘もあります。しかし、アストゥリアス言語アカデミーや公用語化運動を進めている側の人たちは、アストゥリアスには固有の言語と文化があり、アストゥリアス語はイベリア半島北部におけるロマンス語の方言で、ガリシア語やスペイン語とは異なる独立した言語であると主張しています。アストゥリアス語からスペイン語への変異は漸進的とされましたが、アストゥリアス語はスペイン語との二言語使用状態が長く続いたため、語彙使用などの面でスペイン語に近い形とアストゥリアス語本来の形が平行して存在する例が多くあります。例えば、「始める」という意味の動詞にはスペイン語に近い形の *empezar* や *comenzar* などの他に *entamar* というアストゥリアス語本来の形とされるものがあります。語彙使用をこのような土着的な本来の形にし、さらにアストゥリアス語は音声面でアクセントのない母音の発音がゆれたり、形態統語面でもスペイン語ではあまり用いられない構造などがあるので、土着的なスタイルにシフトし

たアストゥリアス語はスペイン語の母語話者には理解不可能な場合が少なくありません。実は、アストゥリアス語内部での方言差も大きい場合があります、方言によっては、アストゥリアス語の他の方言の話者でも理解できない場合すらあります。もっとも、このような議論はきりがありません。その言語が方言であるか言語であるかというようなことは言語学的にはあまり意味がないというのが近年の言語学の考え方です。結局は、政治的社会的問題で、その言語共同体に属する人間が決めることです。いずれにせよ、この地域はスペイン語が正式の公用語ですが、スペイン語に比較的近い、しかし、かなり異なる部分もある言語または方言であるアストゥリアス語も話され、住民の大部分は、程度の差こそあれ、この2つの言語に通じているというのが状況です。アストゥリアス語そのものは、ちょうどスペイン語とポルトガル語の中間的な言語特徴を示す言語であると言ってよいでしょう。方言差が大きく、多様に分化しているので、中世のポルトガル語を研究している者から見ると、中世のテキストに見られる言語変化や変異形を目の前にするような印象もあり、きわめて興味深い対象です。アストゥリアスのある言語学者に言わせると、イベリア半島で起きたレコンキスタという、十世紀あたりからの中世のキリスト教側の政治勢力がイスラム勢力を駆逐して行った動きのことをそのように呼びますが、それに伴う人口移動が起きなかったために、ローマ帝国崩壊以降の言語分布をそのまま引き継いで、特に中心がない形でアストゥリアス・レオン語の諸方言がこの地域に分布していると言います。その結果、過去千年間ぐらいの間に周辺の言語で起きた変化やそれに伴う変異形はこの地域の方言の中にほとんどすべて見て取ることが出来ます。1950年代あたりまでのスペイン言語学にこの地域の方言に関する研究が多いのはそのためです。

なぜ私がこの言語をやっているかという、ガリシアやポルトガルを中心にずっと勉強していたのですが、ポルトガル国内にポルトガル語の方言ではない、アストゥリアス・レオン語の方言が残っている地域が少しあります。北東部のブラガンサという地方ですが、そこにはミランダ・ド・ドーロという人口が数え方にもよりますが、最大で8000人程度の地域と、現在では60人ほどの人口しかないリオドノール村、そしてその近くのグアドラミル集落、ここは2007年に訪問したときには人口24人でしたが、これらの地域の方言はアストゥリアス語に近い言語として十九世紀から研究されています。それぞれミランダ語、リオドノール語、グアドラミル語と呼ばれます。最後のグアドラミル語の話し手は2007年には86歳のおじいさんと82歳のおばあさんでした。二人は夫婦ではな

いので、もう使っていないと聞きましたが、2011年にアストゥリアスで読んだ新聞のルポルタージュ記事ではおばあさんが1人いたと書かれていました。リオドノール語のほうはまだ10人くらいはいたようですが、その後どうなったのかは確認していません。一方、ミランダ語のほうは、まだ活力があって、話し手も2000人くらいはいると思いますが、1998年にミランダ言語法というのがポルトガルの法律として国会で決まって公布され、この地域ではこの言語をポルトガル語と同じように使用する権利を認めるという言語権の法律ができています。現地の小学校や日本の中学と高校にあたる中等学校では、選択科目としてミランダ語を履修することが出来ます。ミランダ語はかつてはよそから来た人々の前では口には出来ないような恥ずかしい言葉として現地のの人にとってはコンプレックスのもとでしたが、現在では法律が出来たこともあり、出版物も多少は出て、その地域にいくと、一部の人は一生懸命その言語を話しています。ポルトガル語とは少し違うので、普通のポルトガル人が聞いてもまず分かりません。話しがずれますが、最近ではポルトガルには公用語は3つあると言われるようになりました。第1番目はポルトガル語で、第2番目がミランダ語、第3番目はポルトガル手話です。手話にもネイティブスピーカーがいて、世界中で地域によって異なる手話があり、日本には日本手話というのがありますが、研究している人も多くいます。ポルトガルでは手話を法的に公用語として認めています。ミランダ語は地域での言語権が認められているだけであって、ポルトガルの公用語のひとつであると言うのには厳密には問題があるのですが、それはそれとして、この地域を少し研究していたのですが、あまりにも話し手が少ないことや、そんなに簡単に行ける場所ではなく、なにしろ鉄道を使うとリスボンからここまで下手すると20時間以上かかり、途中での乗り換えも多くとても不便な場所であるとか、資料があまりなかったり、研究上とつきにくいいため、なかなか進まないでいました。そのうち、よく考えてみると、ここは全体の地域のうちの1つなので、全体、すなわちアストゥリアス語をやらないと意味がないと思い、去年から集中して勉強するようになりました。もっとも、アストゥリアスから帰って来て資料などを調べていたら、大学院を出た頃に集めた論文や本のコピーがずいぶん出てきました。以前に関心を持っていたことも少しずつ思い出すようになりました。

アストゥリアス語の分布と方言

すでに触れたように、現代のアストゥリアス・レオン語には主に3つの変種が知られています。1つはアストゥリアス語、2つめがレオン語、そして3つめは前に述べたミランダ語です。ミランダ語はポルトガル国内の言語で、このレオン語というのは、アストゥリアス自治州の南にカスティーリャ・レオン州というのがあります。その地域に残っているアストゥリアス・レオン語の方言です。レオン語（または方言）、スペイン語で *leonés*、ポルトガル語の *leonês* には、実は別の使い方もあって、言語学の一部ではアストゥリアス・レオン語全体をさしてレオン語と言うこともあります。スペインが生んだ偉大な言語研究者のメネンデス・ピダルが1906年に出版した『レオン方言』*El dialecto leonés* という研究はこの分野の基本文献ですが、この「レオン方言」はアストゥリアス・レオン語全体をさしています。この本はポルトガルのミランダ語についても触れています。アストゥリアス・レオン語のレオン方言、あるいは現代レオン語などという時は、レオン地域の言語をさして使います。この言語にも、いわゆる言語権を求める言語復興運動がないわけではありませんが、アストゥリアス語に比べるとあまり活力はありません。（まだ見ていませんが、2012年に初めて文法書が出版されました。）それから、言語学では常識ですが、必ずしも言語の分布と行政的な区分は一致しません。アストゥリアス語も、アストゥリアス自治州の境界を越えて、カスティーリャ・レオン州やカンタブリア州でも話されている地域があります。ただし、これらの地域では初等中等教育におけるアストゥリアス語の選択履修は行なわれていません。アストゥリアス自治州の言語政策の外にあるからです。それから、アストゥリアス州内にも別系統の方言があります。ガリシア・アストゥリアス語と呼ばれているもので、州の西側のガリシア自治州と接する地域に分布しています。アストゥリアス州内にガリシア語とアストゥリアス語の境界線、つまり七母音体系と五母音体系の言語の境界線ですが、これが走っています。アストゥリアス州内のガリシア語ということになります。アストゥリアス語に近い特徴も持っていて、むしろ中間的な言語変種です。この地域では小学校とか中学校のメインの教育言語はもちろんスペイン語ですが、オプションでガリシア・アストゥリアス語が教えられています。アストゥリアス言語アカデミーはガリシア・アストゥリアス語の正字法も定めるとともに2009年からは初等中等教育におけるガリシア・アストゥリアス語の教員養成のコースを特別に開設するなど、教育や研究面での振興策をとっています。この言語はガリシアとアストゥリアスの州の境界になっているエオ川とアストゥリアス州内を流れるナヴィア

川の間の地域なので、エオナヴィア語と呼ばれることもあります。

というわけで、アストゥリアス州内では、この西側の一部を除いた地域でアストゥリアス語が話されています。人口のおそらく半分を下回る40万人くらいの話し手があるとされています。アストゥリアスはスペインの中でもやや特殊な地位を占めています。アストゥリアス自治州の正式の名称はスペイン語では Principado de Asturias、アストゥリアス語では Principáu d'Astruies で直訳すればアストゥリアス公国またはアストゥリアス皇太子領です。毎年、アストゥリアス皇太子賞というのがあり、日本でも報道されますが、授賞式にはスペインの皇太子がわざわざ首都のオヴィエドまで赴きます。歴史的には、イベリア半島はかつてローマ帝国の一部で、五世紀以降ゲルマン王国になってもラテン語が使われていましたが、その後、八世紀からアフリカ経由でイスラム教徒がやってきて、だいたい南3分の2くらいはイスラム国家になりました。その後、現在のスペインやポルトガルが成立する過程にはイスラム勢力を徐々に南へ追い出していったプロセスがあって、これをレコンキスタ、再征服と呼んでいます。その過程で最終的には現在のスペインやポルトガルにまとまって行くさまざまな王国の興亡があるのですが、このイスラムに対する再征服活動、つまりレコンキスタの最初の出発点になったのがアストゥリアスであると言われています。この地域はいわば山岳地域で、それほど極端に標高は高くありませんが、山と谷に分断されています。今でこそ高速道路が山々に橋をかけるように作られていますが、昔は断崖絶壁に寄り添うような細い道を行くところでした。八世紀にはイスラムの支配を受けた時期もありますが、比較的早い時期に山に守られるようにしてイスラムの支配を逃れました。伝説的には、すでに八世紀にこの辺を起点にしてアストゥリアス王国が成立しましたが、やがてここは不便なので、十世紀にレオンに国の中心が移りレオン王国となります。これがやがてレオン・カスティーリャ王国となり、最終的にはカスティーリャが中心となってイベリア半島を統一していきますが、結局、もともとのアストゥリアス地方は不便なために置き去りにされてしまいます。結果的にこの地域では八世紀、九世紀頃から大きな人口の移動がない状態で方言が現在まで続くことになりました。そういうわけでスペインの方言研究ではこの地域はかなり重要で、1930年代から1950年代の方言研究ではかなり徹底的に研究されています。今でも、この地域は伝統的な方言として牛飼いななどの人たちを相手に記述研究ができる状態がまだ残っています。スペインも基本的にはそうですが、ポルトガルでは十一世紀からおそらく十五世紀あ

たりだと思いますが植民のため人口が北から南に動いています。そこである意味で共通の言語、言語学ではコイナーと言いますが、そのようなものが形成されたと考えられ、地域間の言語差はかなり大雑把です。ポルトガルでは東西に言語の特徴境界線が走って、方言の主要な差異が南北に分かれています。これはこのように人が動いたからです。ところがアストゥリアスの地域には、そうした移動がなかったので、方言特徴は交錯していて、分散しています。中世の古い文献に出てくるような古い特徴がそのまま残っていて、言語的にはとてもおもしろい地域です。また、文化や民俗学的な観点からも、これは孤立した地域の特徴ですが、古い文化現象が残っています。ドンキホーテの中ではこのあたりの地域はイベリア半島で最も野蛮な地域として言及されているのだそうです。実際、伝統的にも遅れた地域であるという意識があります。今でも、山の方に行くと医者には行かず祈祷師みたいな人に行く人もいます。民話などの伝承文化の研究にも非常におもしろい地域です。

さて、簡単に言語特徴を見てみましょう。最初の表はラテン語からガリシア・ポルトガル語、アストゥリアス語、スペイン語を対照させたものです。アストゥリアス語としては比較的代表的とされる中央方言を想定しています。latin がラテン語、galego-português はガリシア・ポルトガル語でポルトガル語やガリシア語の古い段階の言語、asturianu はアストゥリアス語、castellano はスペイン語です。なお、アストゥリアス語はアストゥリアス語で asturianu、スペイン語では asturiano ですが、現地での通称に bable バブレというのがあります。中世の頃から bable と言われたり、asturiano と呼ばれたりしてきました。

言語特徴	latin	galego-português	asturianu	castellano
-l-	SALIRE	sair	salir	salir
-n-	MANU	mão	mano	mano
二重母音化	PETRA/PORTU	pedra / porto	piedra / puertu	piedra / puerto
l-	LUNA	lua	lluna	luna
-d-	LATUS	lado	llau	lado

単語は、それぞれラテン語の語源で示せば SALIRE 「出る」、MANU 「手」、PETRA 「石」、PORTU 「港」、LUNA 「月」、LATUS 「側」という意味ですが、ポルトガル語

やガリシア語では、ラテン語の SALIRE や MANU との対応からわかるように母音間の *-l-* や *-n-* が消失します。アストゥリアス語やスペイン語ではそのまま残り、ラテン語に近い形になっています。方言の分類はこういう特徴を積み重ねて行なうのですが、その下の二重母音化と書いてあるところでは、PETRA, PORTU に対応するところでは、ポルトガル語では *pedra, porto* と母音の *e, o* は変わりませんが、スペイン語やアストゥリアス語では *e* が *ie*、*o* が *ue* になっています。これが二重母音化と呼ばれる現象で、もともとひとつだった母音が1音節の連続して発音されるふたつの母音に変化してしまう現象です。厳密に言うと、この現象が起きる前のイベリア半島のロマンス語には *e* と *o* にそれぞれ広い発音と狭い発音の2種類の区別がありました。結果的に *a, i, u* と合わせて7つの母音があったのですが、ここで二重母音になったのは広い発音の *e* と *o* です。この変化の起きなかったポルトガル語には、現代語の状態はもうちょっと複雑ですが、基本的に古い状態に近い7つの母音の区別が残り、二重母音化が起きたスペイン語やアストゥリアス語では、広い発音の *e* と *o* が二重母音になってしまい、狭い *e* と *o* との対立が失われ、日本語と同じような五母音体系に移行してしまいました。二重母音化そのものの内容は、実は、アストゥリアス語の方言内部でかなりの変種があり複雑です。この *-l-* や *-n-*、二重母音化という3つの特徴が、ポルトガル語をアストゥリアス語やスペイン語と分ける特徴になっています。一方、ラテン語の LUNA を見てみると、ポルトガル語では *-n-* が落ちますから *lua* ですが、アストゥリアス語だけ *lluna* と語頭の *l* が *ll* になっています。この *ll* は「リュ」に近い発音で、口蓋化した *l* と呼ばれますが、ラテン語の語頭の *l* がこのような発音に変化するのがアストゥリアス・レオン語の特徴です。この語の発音は [リューナ] ですが、地域によって、特にアストゥリアス西部では [チューナ] という発音もあります。これを区別するために *l. luna* という綴り字のバリエントも認められ、アストゥリアス語学では「牛飼いのチェ」 *ch vaqueira* と呼ばれる音で、従来は !! のように感嘆符をくっつけたような文字が使われていましたが、最近では *l* の間にピリオドを挟む *l.l* が使われています。他にアストゥリアス語では、ラテン語の母音間の *T* から変化した *-d-* がポルトガル語やスペイン語では *lado* でそのままですが、*d* が消えて *llau* になります。この *-d-* の消失は、口語的なスタイルのスペイン語では比較的一般的な特徴です。

アストゥリアス語内部の方言分類については、実際にはとても複雑なのですが、前に触れた西端のガリシア・アストゥリアス語、あるいはエオナヴィア語地域を

除いて、大まかに西部方言、中央方言、東部方言の3つに分け、必要に応じて沿岸部と内陸・山岳部を区別します。山岳部の方言は常に保守的です。標準的な規範変種としてアカデミーなどが奨励しているのは中央方言を基礎にしています。ただ、文学作品などは作家それぞれの方言で書かれていますから文語のばらつきは常に観察されます。以下の表はかなりおおざっぱですが、アストゥリアス語内部の方言差の代表的な例です。

特徴	単語	分布地域
ll- / l. l-	llobu / l. lobu 「狼」	中西部、東部 / 西内陸部
-as / -es	fabas / fabes 「白インゲン豆」	西部、東部 / 中央
f- / h.-	fierru / h. ierru 「鉄」	西部、中央 / 東部



アストゥリアス

l. l についてはすでに述べましたが、他に中央方言で語末の語源的な -as が -es になるという変化があります。これは名詞だけでなく動詞の語尾についても言えます。中央方言といっても、中央最北端の沿岸部では -as が残っている地域もあります。それから f- と h.- ですが、ラテン語の語頭の f はポルトガル語やアストゥリアス語の大部分の地域では維持されますが、東部方言では喉頭摩擦音の、ちょうど日本語で [ハ、ホ、ヘ] などと発音する時の初めの子音に近い形になります。この音を表すために採用されている文字の変種は h の下に点を打ったり、パソコンだと出しにくいので h の次にピリオドを打って h. としたりするもの

です。この h. はスペイン語で語頭の f が h になり、やがて発音されなくなった変化の中間の状態を伝えているものと考えられています。

アストゥリアス語の歴史

次に、歴史的な背景を見てみたいと思います。本当かどうかは定かではないのですが、718年にアストゥリアス王国が作られたとされています。その頃からこの辺にはまとまった王国が存在したらしいということです。722年に伝説的な Covadonga の戦いというものがあったとされています。キリスト教側の勢力が初めてイスラムに打ち勝った戦いとされていて、レコンキスタの開始を告げる重要な出来事だったとされているのですが、最近では、実際にはそういう宗教戦争的な意識はなかっただろう、また、半ば伝説のようなもので、本当にあったかどうかもわからないとされています。アストゥリアスの東部のカンガス・デ・オニスというあたりだったというのですが、中世の年代記には書かれていますが、場所も日付も、戦いの規模もよくわからないなぞの事件です。十世紀くらいになると、だんだんレコンキスタも進み、キリスト教徒が南に侵攻してきたので、アストゥリアスから南のレオンに都が移されました。その頃はまだポルトガルは独立していなくて、ちょうど現在のポルトガルの最北部とガリシアと一緒にこの地域の一部として支配されていました。ポルトガルの勢力が強くなってきて独立するのは、十二世紀です。

718-910: アストゥリアス王国 Reinu d' Asturias
722: コバドンガ Covadonga の戦い (Cangas de Onis のあたり?)
914: オルドーニョ 2 世 Ordonho II によるオヴィエド Uviéu (Oviedo) からレオン León への遷都 (レオン王国の成立)
1155: フエル・ダヴィレス Fueru d' Avilés アストゥリアス語の初出文献
十四世紀から: スペイン語の公用語化 Castellanización
1639: アストゥリアス語で書かれた最初の文学作品 (詩) 「聖オライアの遺物の所有をめぐるオビエドとメリダの争い」《Pleitu ente Uviéu y Mérida pola posesión de les cenices de Santa Olaya》、アントン・デ・マリレグラ Antón de Marirreguera 作
1869: 最初の文法書《Gramática Asturiana》, Juan Junquera Huergo
1974: バブレ語委員会 Conceyu Bable の創設
1975-: アストゥリアス語の再生運動 Surdimientu → 現代文学の芽生え
1978: スペイン国憲法 Consituición Española. artículo 3 《les demás llingües españóles serán tamién oficiales nes respetives Comunidaes Automómes d' acordies colos sos Estatutos》 (「その他のスペインの諸言語も、それぞれ自治州の自治憲章に従って公用語となるだろう」)

1980: アストゥリアス言語アカデミー Academia de la Llingua Asturiana の創設
 1981: アストゥリアス自治憲章 Estatutu d'Autonomía d'Asturies, 《Sofitaráse'l Bable. Daráse puxu al so emplegue, al so esparidimientu nos medios de comunicación y al so deprendimientu...》(「バブレ語は保護される。その使用やマスコミへの拡大、習得が推進されるだろう」)
 1983- : アストゥリアス語の学校教育への導入 Escolarización en Llingua Asturiana
 1998: アストゥリアス語／バブレ語の使用と保護法
 Llei d'Usu y Proteición del Bable / Asturianu

言葉の歴史を語るときには、いつ頃になるとその言語で書かれた資料が残っているかということが問題にされますが、アストゥリアス語については、1155年のフェル・ダヴィレス Fieru d' Avilés という、アヴィレスというアストゥリアス中央部の沿岸都市に与えられた特別法の文献が残っています。これが最初の文献です。この時代あたりからかなりの量の古文書文献は残っていますが、十四世紀になると、カスティーリャが強くなってきて、この辺の地域の公用語はスペイン語となっていきます。そのため、アストゥリアス語は周辺のものになっていき、中世には文学を発達させるまでには至りませんでした。初期のある作品にはアストゥリアス語版が最初にあり、その後、スペイン語に書き換えられて、アストゥリアス語のほうは残らなかったとする説もありますがよくわかりません。

その後、1639年に最初の文学作品が作られます。これはそれほど長くない詩なのですが、ポルトガルもガリシアも十三世紀、十四世紀には文学言語が発達します。ポルトガルでも、最も古いのは十二世紀末と主張している人もいますが、十三、十四世紀になると、詩と散文、年代記などが出て来て、私たちは文学作品の成立の時代と言っていますが、それに対してアストゥリアスでは中世に文学作品は成立しませんでした。ポルトガルやスペイン、ガリシアでは政治的な共同体が成立して、その中でその地域の文学言語や共通の言語を作る動きがあります。その後、十六世紀近くになると、文法書が作られたり、その言語を整備するという一連の動きがあります。そうしたプロセスを積み上げて来た上で、たとえば今のポルトガル語とかスペイン語は一種の共通語と言える規範を成立させています。しかし、アストゥリアスにはそういうものはありませんでした。逆に言うと中世の方言が多様に分布していた状態がそのままずっと続いてきているとも言えないこともありません。十七世紀に最初の詩が出て、十八世紀、十九世紀も断片的にアストゥリアス語でものを書いてみたり、自分たちの言葉についての議論というのがありますが、それは一般的ではなく、一部の人たちのあいだでのみ行わ

れていました。しかしそれでも、1869年にアストゥリアス語の最初の文法書が出ます。しかし、このような近代を意識した流れは、共和制の政治の時代に混乱を生み、1930年代のスペイン内乱の後に軍事独裁政権が成立し、その中でスペイン語以外の言語の公共的な使用は禁止され、ガリシア語やアストゥリアス語などは公に使用出来なくなります。ガリシアでは二十世紀初めにガリシア語に目覚めるガリシア・ルネッサンスという動きがあるのですが、アストゥリアスではそのようなものはないまま独裁に入ってしまった。その後、ほぼ現代になりますが1974年にバブレ語委員会というのができ、1975年に独裁者のフランコ将軍が死んで、スペインが今の政治体制に移行していく民主化のプロセスの中で、アストゥリアス語の復興運動が起きてきます。その過程で、アストゥリアス言語アカデミーが作られ、アストゥリアス語の正字法や文法書、辞書などが作られて、今に至ります。まだ30年くらいしか経ってないわけです。この頃の初期の文学作品を見ると、不自然ということはありませんが、今までそうしたことは試みがなかったため、なんでこんな書き方をしているのだろうという部分もあり、ぎこちないのですが、最近ではもう第三世代くらいまで行っていて、ちょうど落ち着いてきたというところですね。法律的には、1978年のスペイン憲法で、各地域の諸言語も公用語として認める規定がされ、80年代にアストゥリアス言語アカデミーというのが作られているのですが、これは連邦政府が大学などの機関とともに出資してつくっている公共機関です。ここでアストゥリアス語の出版活動の中心的な部分や言語研究が行われています。それから81年に州の自治憲法で、アストゥリアス語を州の言語として位置づけていますが、公用語にはなっていません。現在、アストゥリアスでは、小学校、中学校、高校、大学で、アストゥリアス語が教えられていますが、自由選択で、選択しない人もいます。首都のオヴィエドではスペイン語だけがかなり話されていますが、田舎や都市によってはまだかなりの人がその方言でしゃべっています。非常に伝統的な話し手の場合は、なかには読み書きをあまりしない人もいますから、そういう人たちは、言葉の意識としてはスペイン語とかアストゥリアス語という区別はあまりないと言われています。

アストゥリアス語はどのような言語か

次にアストゥリアス語の簡単な文章を挙げてみました。スペイン語とポルトガ

ル語の訳も括弧で示しました。お互いよく似ていますが、細かく見るといろいろ
なちがいがわかると思います。

- ① La novela entama con un diálogo. その小説は対話で始まる
(ス : *La novela comienza con un diálogo.*)
(ポ : *O romance começa com um diálogo.*)
- ② De tolos rapazos, vengo ún enfadáu entrugando por ti.
そのすべての青年のうち、ひとり怒っている者が君のことを尋ねてやって来た
(ス : *De todos los muchachos, vino uno enfadado preguntando por ti.*)
(ポ : *De todos os rapazes, veio um zangado perguntando por ti.*)
- ③ Si vos apetez un café fáigovoslu darréu.
もし君たちがコーヒーがお望みでしたらすぐに私が作りましょう
(ス : *Si os apetece un café os lo hago inmediatamente.*)
(ポ : *Si vos apetecer um café faço-vo-lo imediatamente.*)
- ④ Ye un mozu bien curiosu. 彼はとてもすてきな青年です
(ス : *Es un muchacho muy agraciado.*)
(ポ : *É um rapaz muito bonito.*)
- ⑤ Prestóme esi llibru. その本が私は気に入りました
(ス : *Me gustó ese libro.*) (ポ : *Gostei desse livro.*)
- ⑥ Dende esi monte vese tola ciudá. その山からその市全体が見渡せます
(ス : *Desde ese monte se ve toda la ciudad.*)
(ポ : *Desde esse monte vê-se toda a cidade.*)
- ⑦ Tuvi suerte porque dexé'l coche aparcáu equí cerca.
私は運がいい、というのもこの近くに駐車出来たから
(ス : *He tenido suerte porque he dejado mi coche aparcado aquí cerca.*)
(ポ : *Tive sorte porque deixei o carro estacionado aqui perto.*)
- ⑧ Morrió-y el gatu. 猫に死なれた (ス : *Su gato se morió.*)
(ポ : *Morreu-lhe o gato. / O seu gato morreu. / O gato dele (/dela) morreu.*)
- ⑨ Comí un platu llenteyes. (*Comíme un platu llenteyes.は言えない)
私はレンズ豆の料理を食べた (たいらげた)
(ス : *Comí un platu de lentejas. / Me comí un platu de lentejas.*)
(ポ : *Comi um prato de lentilhas. / *Comi-me um prato de lentilhas.は言え*

ない)

①の例は *novela* は「小説」、*la* は定冠詞です。*entama* は「始まる」という動詞で、*con* は *with* にあたる手段を表すものです。それから *un* という不定冠詞について *diálogu* は「対話」なので、「その小説は対話から始まる」となります。これがスペイン語となると、動詞は違いますが、ほぼ同じだということが分かります。その下のポルトガル語を見ると小説の意味で *romance* というのが使われていて、そういうところでずれてきますが、非常に近い言語だということがよく分かると思います。②の例文では「そのすべての青年のうち、ひとり怒っている者が君のことを尋ねてやって来た」というのがありますが、「そのすべての青年のうち」にあたる *De tolos rapazos* がスペイン語では *De todos los muchachos* となっています。また、スペイン語やポルトガル語では「すべての」という語と定冠詞の複数形で *todos los* や *todos os* となっているのがアストゥリアス語では *tolos* と結合形になっています。また、*enfadaú* 「怒っている」はスペイン語だと *enfadado* ですが、ポルトガル語では *zangado* です。*entrugando* は「尋ねる」という動詞なのですが、スペイン語やポルトガル語だと、*preguntando* や *perguntando* です。⑤の「その本が私は気に入りました」というのがありますが、スペイン語で「好き」というのは *gustar* という動詞ですが、アストゥリアス語では *prestar* です。*prestar* は語源的には「役に立つ」という意味です。好きな対象が主語となって主体が間接目的語になるという構文はスペイン語とアストゥリアス語は同じですが、ポルトガル語は異なります。反面、目的語の代名詞の語順はアストゥリアス語とスペイン語は異なります。③や⑤、⑥の例文がそのよい例ですが、ポルトガル語とアストゥリアス語がほぼ同じ語順になります。⑨の「レンズ豆の料理」という表現はスペイン語とポルトガル語では、それぞれ *platu de lentejas*, *prato de lentilha* で、アストゥリアス語は *platu llenteyes* で、「～の」にあたる前置詞の *de* が省略されています。アストゥリアス語でこれを *platu de llenteyes* とし、スペイン語やポルトガル語と同じようにしても間違いではないのですが、このような場合、前置詞の *de* が任意に省略出来るというのがアストゥリアス語の特徴です。

次に冠詞の前接という現象について見てみましょう。上の⑦の例文にもあるのですが、*el* という男性単数形の定冠詞ですが、母音で終わる単語が先行すると

前の語と結合してひとかたまりになるという現象です。

⑩ Garró l llibru. 彼(彼女)はその本をつかんだ (garró + el llibru)

⑪ Diz que l ser humano ye cruel. 人間は残酷だと言う (...que + el ser...)

⑫ Diz que l'home nun lo creyó. その男はそれを信じないと彼は言う (...que + el + home...)

ミランダ語でも同じ現象がありますが、ポルトガル語やスペイン語では見られません。ただ、ポルトガル語では、昔こういう現象があったと考えないと説明できない変化があります。

アストゥリアス語は母音の発音が揺れると前に述べましたが、メタフォニーと呼ばれる現象が方言のなかに観察されています。歴史的な音変化で多くの言語でよく見られる現象ですが、ちょうどドイツ語でウムラウトと呼ばれるものと同じで、語末に狭い母音があるとその影響でその前にあるアクセントのある母音の発音が狭くなってしまうという現象です。具体的には、語末の -u が、その前にある強勢母音で e > i, o > u, a > o/e という変化を引き起こすものが多いようです。その結果, pelu, pelos 「髪の毛」、perru, perros 「犬」、llombu, llombos 「背、背肉」、gochu, gochos 「豚」(それぞれ単数形, 複数形の順) という単語では、この変化が起きる地域では、単数形で pelu > pilu, perru > pirru, llombu > llumbu, gochu > guchu という変化が起り、単数形と複数形の対は pilu - pelos, pirru - perros, llumbu - llombos, guchu - gochos となります。ポルトガル語でも同じような変化が中世に起きていますが、アストゥリアスではまだこういう変化が進行中の地域があって、そこでは pelu - pilu, perru - pirru, llombu - llumbu, gochu - guchu のような単語が共存しているので、話し手はこれらの語の問題の位置で e ~ i, o ~ u の対立を区別できないことがあると言います。形容詞でも同じように solu > sulu / sola / solos / soles / solo 「たったひとつの、~だけ」、solteru > soltiru / soltera / solteros / solteres / soltero 「独身の」と言うような例を挙げる事が出来ます。

上の母音の発音の揺れはアクセントのある強勢母音の話でしたが、無強勢母音では以下に見るように o と u や e と i との間になりに揺れがあります。

probin ~ prubin かわいそうな(指小辞) dormir ~ durmir 眠る sofrir ~ sufrir 苦しむ

pequeñín ~ piquenín 小さい (指小辞) vestir ~ vistir 着る sentir ~ sentir 感じる

ただし、このような場合、正字法では語源的な形を採用し、発音の揺れは示しません。この点で、前に見た 1.1 や h. とは扱いが異なります。

次に「素材の中性」neutru de materia と呼ばれる現象を見てみましょう。アストゥリアス語の形容詞を勉強すると、文法性と数があって男性単数、男性複数、女性単数、女性複数の形をおぼえなければいけません。ここまではスペイン語やポルトガル語と同じですが、アストゥリアス語にはもうひとつ中性形というのがあります。たとえば、次の「よい」、「悪い」、「黒い」の形容詞の変化を見てください。

bonu / bona / bonos / bones / bono よい
 malu / mala / malos / males / malo 悪い
 prietu / prieta / prietos / prietes / prieto 黒い
 (男性単数/女性単数/男性複数/女性複数/中性)

中性という形はどんなときに使われるかということ、「シドラ」sidra という、リングオでできたシャンパンを表す単語がありますが、アストゥリアスではシドラは文化的にとっても重要な要素です。sidra は女性名詞なので、冠詞も形容詞も女性形で la bona sidra 「よいシドラ」と言わなければなりません。形容詞を後置すると la sidra bono と形容詞が中性形になります。これは、この位置で、ある種の素材などを表す伝統的な名詞と一緒に用いられたときに可算、不可算の区別が形容詞に現れて来るとい現象です。他に同じような名詞で la lleña seco 「乾いた薪」というのがありますが、今度は、「薪」を可算扱いにして「2本の乾いた薪」とすると les dos lleñes seques となって、性数一致は普通になります。この中性形による不可算性の表示はコピュラ構文の述語や目的語の代名詞などにも反映します。これはポルトガル語やスペイン語には見られない現象です。ただし、アストゥリアス語でも方言によってはない場合もあります。

⑬ El carbón ye prieto. 石炭は黒い (×prietu)
 the coal is black

⑭ Esta sidra nun ta malo. このシドラは悪くない (×mala)
 this cider not is bad

目的語代名詞の語順が、むしろポルトガル語に近いことについてはすでに述べました。最後に、語彙の対応を見てみましょう。言語的に近い変種の間では常にこのようなことは起きます。スペイン語とポルトガル語の間の語彙のずれや、ポルトガル語でもブラジルのポルトガル語とポルトガルのポルトガル語、あるいはアフリカのポルトガル語の間には同じような例がたくさんあります。スペイン語とポルトガル語は同じでもアストゥリアス語は違うというものや、アストゥリアス語とポルトガル語は近いけれどスペイン語とはちょっとずれているという例を挙げてみました。

意味	asturianu	castellano	português
寛大な	arrogante	generoso	generoso
臆病な	medrosu	cobarde	cobarde
内気な	cobarde	tímido	tímido
すてきな	curiosu	guapo	bonito
詮索好きな	achisbón	curioso	curioso
場所	sitiu	lugar	sitio, lugar
集落	llugar	población	povoação
疑り深い	sospechosu	suspicaç	desconfiado
被る	carecer	sufrir	sofrir

アストゥリアス語で *arrogante* という単語は「寛大な、気前がいい」という意味ですが、ポルトガル語やスペイン語の *arrogante* は「傲慢な」という意味です。それから、*curioso* は「興味のある」、「他人のことに首をつっこむ」という意味ですが、アストゥリアス語の *curiosu* は「きれいな、すてきな、完璧主義者の」といった意味です。アストゥリアス語で、人に対する最高の褒め言葉は *arrogante y curiosu* で「気前がよくて美しい立派な人だ」ぐらいの意味ですが、スペイン語やポルトガル語だったら「傲慢で人のことに鼻先をつっこむ」という意味です。こういうのを語学では偽りの友といい、単語は似ているけれど、こっちはまったく別の意味になるという例です。スペイン語やポルトガル語ではそういう例がたくさんあります。

アストゥリアスやアストゥリアス語を知るために

アストゥリアス関係の情報は、インターネットであればアストゥリアス言語アカデミー *Academia de la Llingua Asturiana* (<http://www.academiadelalingua.com/>)

やアストゥリアス公営ラジオテレビ RTPA = Radiotelevisión del Principado de Asturias (<http://www.rtpa.es/>) などから得ることが出来ます。RTPA はスペイン語とアストゥリアス語で番組を制作しています。標準的なアストゥリアス語だけでなく、方言色の強い地方語やアストゥリアス語の言語干渉の強いスペイン語の発話なども聞くことが出来ます。ラジオでは Radio Parpayuela とか Radio L. lena などが中央内陸部の方言にシフトしたアストゥリアス語を使って放送しています。アストゥリアス語を学ぶための基本文献には以下のようなものがあります。

- 1) *Gramática de la Llingua Asturiana 3ed.* 2008 (Academia de la Llingua Asturiana)
- 2) *Normes Ortográfiques 6ed.* 2005 (Academia de la Llingua Asturiana)
- 3) *Gramática d' asturianu. Guia de consulta rápida*, Ester Prieto Alonso, 2004. Uviéu: Trabe.
- 4) *Diccionariu de la Llingua Asturiana* 2000 (Academia de la Llingua Asturiana)
- 5) *Diccionariu Asturianu-Castellanu*, Xuan Xosé Sanchez Vicente, 2008. Uviéu:Trabe
- 6) *Diccionariu Básicu de la Llingua Asturiana*, Pablo Manzano y Urbano Rodríguez, 2001. Xixón:Trea

文法書の 1) と正字法マニュアルの 2) はアストゥリアス言語アカデミーのホームページから PDF としてダウンロードできます。いずれも標準アストゥリアス語の基本マニュアルです。辞書の 4) もオンラインで検索することが出来ます。3) は実用的な文法マニュアルで、5) はアストゥリアス語スペイン語辞典です。6) は次項で紹介していますが、広く用いられている基本的辞典です。



アストゥリアスの伝統的建造物 horru

… * * * ————— * * * …

アストゥリアスはシドラを抜きにしては語れない。不思議なことだが、アストゥリアス人と話しているといつの間にか会話がシドラのほうに引っ張られてしまう。シドラ sidra とはリンゴを自然発酵させた6%くらいのアルコールで、飲み方は culín と呼ばれる口の広いコップを片手で腰のあたりに構え、もう一方の手で瓶を頭の上まで高く挙げて、そこからコップにめがけて注ぎ込む。(右写真参照) これは発泡性の低い飲み物なので、泡立てるためにするが、この動作は escanciar と言って、もともとは「酌をする」という意味のポルトガル語にもスペイン語にもあるゲルマン系の単語である。そうしてコップ4分の1くらいまで注いだところで、これを一気に飲み干す。ちょうど半分泡立っているくらいがよい。飲み干すと言ったが、実は全部飲んではいけない。ほんの少しだけ残して、それで自分が口を付けたところを



escanciar

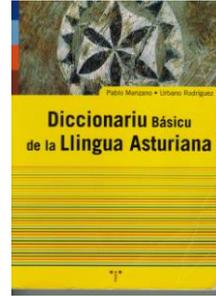
洗い流す。これはコップはその場にいる者たちでまわし飲みをするからである。シドラをともに飲むことが仲間の証なのである。1回飲むとしばらくおいて、最低30分は休む。そうして話をしながら、何回か飲んでいるうちに、いつの間にか朝方近くなる。これがアストゥリアスの夜の過ごし方であるが、もっともアストゥリアス人は昼でも夜でも仲間が集まった時はシドラを飲んでいる。人間関係の基底にある飲み物で、ひとりで飲むことはしない。日本では残念ながらアストゥリアス産のシドラは入ってこない。日本の風土には合わない人間的な飲み物だからである。

アストゥリアスを知るための3冊

・*・...‡...・*・*・*・...‡...・*・*・*・...‡...・*・*

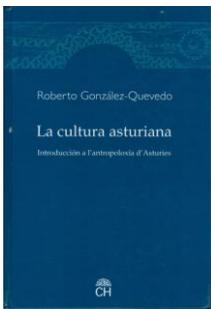
Diccionariu Básicu de la Llingua Asturiana,
Pablo Manzano y Urbano Rodríguez, 2001. Xixón:Trea

アストゥリアス語の基本語を対象にしたハンディーなポケット辞典である。語数は少ないので、一見するとあまり役に立たないような印象を与えるかもしれないが、類義語や反意語が多めに記載されていることや、例文が豊富なのでアストゥリアス語を書くときにはもっとも便利な辞典である。アストゥリアス語の単語を調べるためには、アカデミーの、本文で紹介した辞典の他にスペイン語の単語なども確認する必要がある。



... * ←—————→ * ...

Roberto González-Quevedo 著 *La cultura asturiana. Introducción a l'antropoloxía d'Asturies* 『アストゥリアス文化、アストゥリアスの文化人類学入門』, pp.754, 2010. Uviéu: CH Editorial.



アストゥリアスの文化について概説した最良の書で、700頁を超える大著である。著者のゴンサレス・ケヴェードは、オヴィエド大学で言語学や文献学を担当しているが、同時に詩人で小説家であり、言語学者、文化人類学者、哲学者でもある。言語学では人類言語学に関する著作やPalacios del Sil というレオン地域のアストゥリアス方言のすぐれた記述がある。この書は、文化人類学の現代的な理論にも配慮ながら、長年のフィールドワークの成果をまとめたもので、文化や伝承についてよくあるような主観的な印象をまとめたものではない。本文は標準的なアストゥリアス語で書かれている。他に、この著者には数百頁にも及ぶアストゥリアス語で書かれた西洋哲学史の大著もある。この著者の詩や小説は、アストゥリアス語西部山岳方言で書かれている。

本講座の実施概要は次のとおりです。

東京外国語大学オープンアカデミー 2011 年度後期開講講座

「外語大の教師が熱中するもうひとつの言語」

日時：2011 年 10 月 4 日～11 月 8 日、毎週火曜日、全 6 回、19 時～20 時半

会場：東京外国語大学 本郷サテライト 3 階セミナールーム

日時：2011 年 10 月 4 日

講師：富盛伸夫（東京外国語大学大学院教授）

第 1 回 「スイス・アルプスの少数言語、ロマンシュ語」

日時：2011 年 10 月 11 日

講師：萬宮健策（東京外国語大学大学院准教授）

第 2 回 「スィンディー語 (Sindhi)：母なる川インダスが育んだことば」

日時：2011 年 10 月 18 日

講師：萩田 博（東京外国語大学大学院准教授）

第 3 回 「パンジャービー語」

日時：2011 年 10 月 25 日

講師：降幡正志（東京外国語大学大学院准教授）

第 4 回 「スンダ語」

日時：2011 年 11 月 1 日

講師：中澤英彦（東京外国語大学大学院教授）

第 5 回 「ウクライナ語 一知られざるウクライナ、ウクライナ語」

日時：2011 年 11 月 8 日

講師：黒澤直俊（東京外国語大学大学院教授）

第 6 回 「アストゥリアス語」

東京外国語大学オープンアカデミー 2011 年度後期開講講座

「外語大の教師が熱中するもうひとつの言語」活動報告書

発行 2013 年 3 月 29 日

編集・発行者 東京外国語大学語学研究所

代表者 高垣敏博

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

Tel : 042-330-5407

東京外国語大学オープンアカデミー 2011年度 後期開講講座
外語大の教師が熱中するもうひとつの言語

東京外国語大学 語学研究所
2011年10月4日(火)～11月8日(火)
東京外国語大学 本郷サテライト